○滅後の五品

又復如來滅後若聞是經而不毀訾起隨喜心當知已爲深心解相

已下は第二に滅後の五品を明かす。此中二大段あり。初は此より當品の終りまでは五品の行相を列ね且つ後の四品の功德を格量し。後は隨喜功德品の始より終りまでは初品の功德と格量するなり。初の一大段の中に長行と偈頌との二段あり。長行の中に五段あり。即ち五品の行相を明かす此は第一隨喜品を明かすなり。

(字義)隨喜心とは諦觀の四教儀に云く。問ふ。何れの法をか隨喜するや。答ふ。妙法なり。妙法とは卽ち是れ心なり。妙心躰具すること如意珠の如し。心佛及び衆生是の三差別なし。此の心卽空卽假卽中なり。常境は無相なり。常智は無緣なり。無緣にして緣す。三觀にあらざることなし。無相にして相なり。三諦宛然なり。初心に此理を知て己れを慶ひ人を慶ぶ。故に隨喜と名くと。

○深信解相とは上の第四信の終の文と言同しくして意別なり。今の文の深信解の三字は第四信の深信觀成に當る。相の一字は第四信の前相といふ義なり。深信觀成の前相の隨喜品の位に現はるゝこと。喩へば日月出でんとするとき明相先づ現はるゝが如きなり。是を相と說くといふ。

何況讀誦受持之者

已下は第二に讀誦品なり。此中二節あり。初は人を標し。後は格量す。今は初なり。此は更加讀誦として隨喜の上に讀誦の行を加ふなり。

斯人則爲頂戴如來。阿逸多。是善男子善女人。不須爲我復起塔寺及作僧坊。以四事供養衆僧。所以者何。是善男子善女人。受持讀誦是經典者。爲已起塔造立僧坊。供養衆僧。則爲以佛舍利起七寶塔。高廣漸小。至于梵天。懸諸旛蓋。及衆寶鈴。華香瓔珞。抹香塗香。燒香。衆鼓伎樂。簫笛箜篌。種種舞戲。以妙音聲。歌唄讚頌。則爲已於無量千萬億劫作是供養已

此は第二節格言なり。

(字義)斯人とは讀誦品の人をさす。○四事とは衣服飲食臥具湯藥なり。

(通解)法華經を讀誦する人は則ち如來を頂戴し奉るなり。又此人は如來の

爲に塔を起して舍利を供養し僧坊を作りて衆僧と供養するに及ばず。何となれば法華經を讀誦する者は塔を建て衆僧を供養せるなり。則ち佛舍利の爲に七寶の塔の高廣にして梵天に至るを建て。種々の香花瓔珞等を以て千万億劫の間供養するに成りぬればなりとなり。

(釋意)法華經は是れ如來の法身なるが故に法華經を讀誦する者は即ち如來を頂戴するなり。又法華經は法身の舍利なり。(生身の舍利に對す)故に法華經を讀誦すれば則ち如來の舍利を供養せしになる。又法華經能く法性一味の理と詮はせば。是れ即ち第一義諦の僧寶也。(比丘の和合を僧といふ是れ事の僧寶なり。今は之に對して理性の一味和合を第一義の僧といふ)依て經を讀誦する人は己に衆僧と供養せしになりぬとなり。

▲第一義諦とは眞理的眞實的と言ふ如し。是れ俗諦又は世諦といふ語に對するなり。

阿逸多。若我滅後。聞是經典。有能受持。若自書。若教人書。

已下は第三に說法品なり。此中二節あり。初は人相を標し。後は功德を格量するなり。今は初めなり。此は受持讀誦の上に書寫の行を加ふるなり。此中數人の二字に重きを置て說法品とせしなり。

則爲起立僧坊。以赤栴檀作諸殿堂。三十有二。高八多羅樹。高廣嚴好。百千比丘。於其中止。園林浴池。經行禪窟。衣服飲食。牀褥湯藥。一切樂具。充滿其中。如是僧坊堂閣。若干百千萬億。其數無量。以此現前供養於我及比丘僧。是故我說。如來滅後。若有受持讀誦。爲佗人說。若自書。若教人書。供養經卷。不須復起塔寺及造僧坊。供養衆僧。

此は第二節功德を格量するなり。

(字義)三十有二とは應身を殿堂に譬へ。應身の三十二相を三十二とせり。○八多羅樹とは玄贊に。多羅樹の形は欄楯の如し。極て高きは長さ七八十尺也。花は黃米の如し。子の大さ針の如し。人多く之を食ふ。此方之なし。故に翻せすと。華嚴音義に。西域には其高さ十丈餘なり。故に經中取て定量となすと。さて八多羅樹は八正道の高きを表するなり。○百千比丘とは百界千如冥會するを表せり。下の諸句各表示あり。煩らはしけれは略す。

況復有人。能持是經。兼行布施持戒。忍辱精進。一心智惠。

已下は第四に兼行六度品なり。此中二節あり。初は人相を標し、後は格量す。今は初なり。此は上の說法品の上に六度を兼ね行ふなり。○一、心とは即ち禪定なり。

（釋意）五品の中初二三品は中道の理觀を修するのみにて未た事行に涉ること能はず。今は正觀稍明らかなるの故に傍に六度の利益を兼ねるなり。是れ即ち一切の法を擧けて悉く六度の中に入らしむるの法なり。たとへば色塵の一に就て之をいふに、一切の色に著せずして能く捨るは施なり。一切の色に縛せられず。非を作さるいは戒なり。一切の色に即して其心理に住して動轉せざるは忍なり。一切の色に滯らず。其色に即して速に中道の理に入るは進なり。一切の色を見るに即ち中道の理を知りて散亂なきは禪なり。一切の色に即して其實相を悟るは慧なり。自餘の一切諸法も皆是に准して知るへし。此心地に住するを六度を行すといふ。

其德最勝。無量無邊。譬如虛空。東西南北。四維上下。無量無邊。是人功德。亦復如是。無量無邊。疾至一切種智。

此は第二節格量なり。○一、切種智とは初住分證の位をさす也。今は五品弟子位にて觀行即の位なれは（前の圖）此より進んて疾く初住に入て此一切種智を分證せるをいふ。

若人讀誦受持是經。爲佗人說。若自書。若敎人書。復能起塔。及造僧坊。供養讚歎聲聞衆僧。亦以百千萬億讚歎之法。讚歎菩薩功德。又爲佗人。種種因緣。隨義解說此法華經。復能淸淨持戒。與柔和者。而共同止。忍辱無瞋志。志念堅固。常貴坐禪。得諸深定。精進勇猛。攝諸善法。利根智惠。善答問難。阿逸多。若我滅後。諸善男子善女人。受持讀誦是經典者。復有如是諸善功德。

已下第五には正行六度品なり。此中二節あり。初は人相を標し、後は功德を格量す。今は初なり。此は圓觀漸く熟して理事融即するの故に能く具さに六度を行するなり。

（通解）若し人是經を讀誦し、受持し、他人の爲に說き、若しは自らも書き、若しは人をして書かしめ、復た能く塔を建て、及ひ僧塔を作り、聲聞の衆僧及ひ

▲布施の中に財施法施の二あり。塔を建て坊を造り僧を供養する如きは財施なり。偈を以て功德を讃嘆し經典を解說する如きは法施なり。

菩薩の功德を供養し讃嘆し。又他人の爲に種々の因緣を以て義のまいに此法華經を說き。(已上は財施法施の二なり)復能く清淨に戒を持し。(此は戒行持)柔和の人と共に居り忍辱にして瞋ることなく志念堅固なり。(此は忍辱行)常に坐禪を貴ひて諸の深定を得(此は禪定行)精進勇猛にして諸の善根を攝持し。(此は進行精)利根にして智惠あり。能く問難を解答せん。(此は般若行)若し我の滅度の後に諸の善男子善女人是の法華經を受持し讀誦する者にして又如是の六度の功德あらばとなり。(此は總結の辭なり)

當知是人已趣道場近阿耨多羅三藐三菩提坐道樹下阿逸多。是善男子善女人。若坐若立。若經行處。此中便應起塔。一切天人皆應供養如佛之塔。

此は第二節格量なり。

(注意)以上の五品は都て十信位の前にて觀行即の位なり▲五品終る。

爾時世尊。欲重宣此義而說偈言。

若我滅度後　能奉持此經　斯人福無量　如上之所說

是則爲具足　一切諸供養　以舍利起塔　七寶而莊嚴

表刹甚高廣　漸小至梵天　寶鈴千萬億　風動出妙音

又於無量劫　而供養此塔　華香諸瓔珞　天衣衆伎樂

然香油蘇燈　周市常照明　惡世末法時　能持是經者

則爲已如上　具足諸供養

已下第二に偈頌なり。此中四節に分ち。此は第一節第二品を頌す。○表刹とは刹は刹多羅の略幢竿の類なり。塔上に高く表出する幢竿を表刹といふ。

若能持此經　則如佛現在　以牛頭栴檀　起僧坊供養

堂有三十二　高八多羅樹　上膳妙衣服　牀臥皆具足

百千衆住處　園林諸浴池　經行及禪窟　種種皆嚴好

此は第二節第三品と頌す。○牛頭旃檀とは長行には赤旃檀といふ色に取りしなり。今牛頭といふは地名に取りしなり。正法念經に云く。北洲有山。山峯狀如牛頭。於此峯中。生旃檀樹。故名牛頭。云云

若有信解心　受持讀誦書　若復教人書　及供養經卷

散華香抹香　以須曼瞻蔔　阿提目多伽　薫油常然之
如是供養者　得無量功德　如虛空無邊　其福亦如是
況復持此經　兼布施持戒　忍辱樂禪定　不瞋不惡口

此は第三節第四品を頌す。○須曼とは又須末那とも蘇摩那ともいふ。其花黄色にして甚た薫る。木の高さ三四尺四方に垂れて蓋の如しと經音義に出つ。○瞻蔔とは又旃簸迦といふ。此に香花樹といふ。花細くして香はし。其氣風に順ふて遠く傳ふ。○阿提目多伽とは此に龍舌華といふ。此草大麻の如く赤き花青き葉あり。實は油となすに堪ゑたりと文句記に見ゆ。

恭敬於塔廟　謙下諸比丘　遠離自高心　常思惟智慧
有聞難不瞋　隨順爲解說　若能行是行　功德不可量
若見此法師　成就如是德　應以天華散　天衣覆其身
頭面接足禮　生心如佛想　又應作是念　不久詣道場
得無漏無爲　廣利諸天人　其所住止處　經行若坐臥
乃至說一偈　是中應起塔　莊嚴令妙好　種種以供養

佛子住此地　則是佛受用　常在於其中　經行若坐臥

此は第四に第五品を頌す。

(字義)生心如佛想とは今は是れ觀行五品の人なれとも。遠のらすして初住の位に入りて八相作佛を示現すへけれは。佛の想をなして尊崇すへしとなり。○無漏無爲とは眞如實相の理をいふ。是れ因緣の所作にあらされは無爲なり。無明の汚垢を離るれは無漏なり。○佛子等とは已下の四句佛子所在の地は即ち佛の遊處たると言ふなり。佛子とは五品觀行の人なり。此人の住處は則ち佛の受用し玉ふ所にて佛は常に其中に在て經行し坐臥し玉ふなれは。之を尊崇することと佛と均しくすへしとなり。經行とは遊行なり。

(注意)已上頌文の中に五品の中の後の四品の功德を格量すれとも初品の功德と格量せす。此は入道の初なれは廣く之を讃嘆して人と勸發せんの爲に。故さらに隨喜功德品の一品を說き玉ふ故なりとぞ。

妙法蓮華經隨喜功德品第十八

▲五品を以て十信の前五の信に攝そることあり。此は普賢觀經の意に約す。之を判攝の五品と名く。今は此監に就くなり。

滅後の五品を明らそ中に二大段ありて初は五品の行相を列ね且つ四品の功德を格量し。後は初品の功德と格量する也。(九十四頁を看よ)而て上來は第一大段を明らし終るを以て。已下は第二大段初品の功德と格量す即ち當品の始終是れなり。さて五品の功德に就て因果の二德あり。前品頌文に明らす四品の功德も又當品に明らす初品の功德も通して因の功德なり。而して果の功德は唯初品のみに就て明らし法師功德品といふ。即ち次の品是れなり。されは次の法師功德品を初品の果の功德を明らすといふに對して。前品の流通分より(八十頁)已下當品の終りまても總して初品の因の功德を明らすと科せしなり。(九十四頁を看よ)此中には現在の四信と滅後の五品とを明らして初品の功德を明らすに限らされとも。四信と五品とは或る點に於て同一の義あり。且つ五品の中には初の隨喜品ら主說にて。之ら爲に因と果との功德に就て各一品を說きし程なれは。他の四信の行相と功德と又五品の行相と後の四品の功德とは總して隨喜品の因の功德を明らす附屬物として。大科段の上には初品の因の功德を明らすと科せしものと

▲七方便とは人天二乘通別圓三教の菩薩なり。上に屢出つ。

心得へし。

されは大科段の上よりは前品流通分より初品の因の功德と明らすにて。其中爲深信解相まては(九十三頁)現在の四信の行相と功德とを明らし。又其より前品の終まては滅後の五品の行相と後四品の功德とを明らし。此品の初より正しく初品の因の功德を明らすなり。

品題を釋せは文句に隨喜とは事理に隨順して己を慶ひ人を慶ふなりと。如來本地の深遠理性の常住を聞て信順し逆はす一毫の凝滯なきを理に順ふとなし。如來三世の益物橫竪に該亘して一切處に徧きを聞て亦一毫の凝滯なきを事に順ふとなす。廣事に即して深理に即して廣事に達そ。本迹不二にして二なり。事理不別にして別なり。二と雖も別と雖も無二無別なり。如此信解すると隨と名くるなり。如來出世四十餘年未た眞實を顯さす。七方便の人には誠諦と語らす。然るに今凡夫の心を以て佛の所知に等しらしめ。父母所生の肉眼を以て佛の所見に同し。此の如く究竟の法界を知見して廣くして涯底なく。無等無等等にして更に過上な

し。佛今之を說き我れ之を聞くことを得たり豈に慶はさるを得んや。されは已を慶ふとは諸法實相の理(迹門)及ひ遠本(本門)を聞て信解をるの故に歡喜を生するなり。人を慶ふとは佛も衆生も無作の三身を具へたりと觀するを以て。一切衆生に此正道を悟らしめんとて大悲心を起をいふ。

爾時彌勒菩薩摩訶薩。白佛言。世尊若有善男子善女人。聞是法華經隨喜者。得幾所福。而說偈言。

世尊滅度後　其有聞是經　若能隨喜者　爲得幾所福

此品の始終初品の因の功德を格量するに二あり。初は彌勒の問。後は如來の答。今は初なり。分別功德品の終に第二品已下の功德を格量し玉へとも未た初隨喜品の功德を說き玉はされは彌勒此問を發起し玉ふなり。義疏に云く。本經の流通を命する初に隨喜品を辨するは此經は二權二實(衆教の權實佛身の權實)を明らすに昔の說と相違せり。執迷の徒耳に逆ひ心に違して信受することを能はす。是の故に今隨喜の功德を無邊なりと明らして信受を勸むるなりと。

爾時佛告彌勒菩薩摩訶薩。阿逸多。如來滅後。若比丘比丘尼。優婆塞優婆夷。及餘智者。若長若幼。聞是經隨喜已。從法會出。至於餘處。若僧坊。若空閑處。若城邑巷陌。聚落田里。如其所聞。爲父母宗親善友知識。隨力演說。是諸人等。聞已隨喜。復行轉教。餘人聞已。亦隨喜轉教。如是展轉。至第五十。

已下は第二に如來の答なり。此中長行と偈頌との二段あり。長行の中に又二段あり。初は內心隨喜の人を明らし。後は勸他聽法の人を明らす。初に內心隨喜の人と明らす中五節あり。此は第一節隨喜し展轉して敎ふるを敍す。

(釋意)展轉して人を敎ふれは末に至るに隨ふて其德劣れるの常なり。況んや五十人の中上の四十九人は自ら聞き他に敎ふるの故に自行化他の二德あれとも最後の一人は自ら解するのみにして他に敎ふることなきの故に其德最も劣れり。而して今は最下品の人の功德を擧て其より上品の功德と顯はす心なり。又上の分別功德品に四品の功德をのみ格量して初

隨喜品と聞き玉ふ事も。此に至て最下品の功德を廣說して勝れたる四品の功德を況顯せんとの如來の巧說なり。さて五十の數に就て文句に說あり。其意は天竺の算數の法に十を滿數となすと。七を滿數となすとの二途ありて。若し七を滿數とするときは。七七は十十といふ如く一の滿數を極めたる數なり。而して七七は四十九にて。今の五十人といふは即ち師弟にして自行化他の德を具へたる者七七四十九人と。又但自行にして化他の德なき者一人との數なりとなん。

阿逸多。其第五十善男子善女人。隨喜功德。我今說之。汝當善聽。若四百萬億。阿僧祇世界。六趣四生。衆生。卵生胎生。濕生化生。若有形無形。有想無想。非有想非無想。無足二足四足多足。如是等在衆生數者。有人求福。隨其所欲。娛樂之具。皆給與之。一一衆生。滿閻浮提金銀瑠璃硨磲碼碯。珊瑚琥珀。諸妙珍寶。及象馬車乘。七寶所成。宮殿樓閣等。是大施主。如是布施。滿八十年已。而作是念。我已施衆生娛樂之具。隨意所欲。然此衆生。皆已衰老。年過

八十。髮白面皺。將死不久。我當以佛法而訓導之。即集此衆生。宣布法化。示教利喜。一時皆得須陀洹道。斯陀含道。阿那含道。阿羅漢道。盡諸有漏。於深禪定。皆得自在。具八解脫。

此は第二節格量の本を明かすなり。

(字義)六趣とは六道なり。地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天をいふ。趣とは往趣の義衆生作す所の業に隨ふて趣く處なれは六趣といふ。○四生とは下に所謂胎生乃至化生なり。上に六趣といふ一の分類法なり。今四生といふ。又是れ一の分類法なり。故に雜心論に云く。六趣は但正生を攝して中陰を攝せず今は生と攝し盡さんと欲するか故に四生を說くと。(已上幾の說)○卵生とは卵にて生るゝ者なり。諸の鳥の類ひなり。○胎生とは牛馬等の如く胎藏より生まるゝ者なり。○濕生とは飛蛾等の如く濕氣より生るゝ者なり○化生とは諸天等の如き諸根頓に具足して無にして忽ち有るをいふ。人間と畜生とは四生を具へり。地獄と天人とは只化生なり。鬼は胎生と化生に通すといふ。○有形無形とは欲界色界の有情は有形なり。無色界の有情は無形

なり。○有想無想非有想非無想とは無色界の第四天を非想非非想天といふ。心想至て微細閑寂なれは想あるにもあらす想なきにもあらすといふ。又欲界の第四天に無想天といふあり。其天所の人は五百大劫の間無心定に居るなり。依て無想といふ。其より以外の有情は盡く有想なり。されは此三種にて三界を攝し盡くすなり。○無足二足四足多足とは無足は蚯蚓の如し。二足は人天の衆生なり。四足は牛馬の如し。多足は百足の如し。義疏に云く。六趣と四生と各一門に衆生を攝そ。今又二門を以て攝す。謂く有形と無形となり。次には三門に攝す。謂く有想乃至非有想非無想なり。次は四門に攝す。謂く無足乃至多足也。皆是れ増數の法門に以て衆生を攝する也。○有人求福とは他日の福報を求めんとして今日彼等の衆生に向て布施を行ふなり。○示教利喜とは妙法を示教して彼を利益して喜はしむるなり。○須陀洹とは預流と譯す。三界の見惑を斷して眞理の一分を證り始めて聖者の流類に預參せし人なり。○斯陀含とは一來と譯す。須陀洹の更に進んて欲界の思惑の一分を斷し。尚一たひ人間天上に往來して阿羅漢の悟

りを開くへき聖者といふ。○阿那含とは不還と譯す。欲界の思惑を盡く斷して再ひ欲界に還生せさる聖者なり。○阿羅漢とは三義あること前に辯せり。（第一卷の初）阿那含の更に進んて色界無色界の思惑を斷し盡し。再ひ三界の中に生を受けさる聖者なり。已上之を四果の聖者と稱し。聲聞乘にて悟を開きし人の區別なり。○八解脫とは阿羅漢の得る禪定の名なり。第一卷の中に辯せり。

（通解）今其の第五十人目の人の、隨喜の功德と、說くは、若し四百万億阿僧祇の世界の六道四生の諸の衆生あらんに、人ありて彼等に布施を行しして我福を求めんとして、彼衆生の樂欲に隨て、一切の娛樂の具と、以て皆之に給與そ。即ち一の衆生に閻浮提に滿てる珍寶乃至樓閣を以て彼等に施與して八千年を滿てり。（已上施）而るも是の念を作せり。我れ既に衆生に娛樂の具を施して彼等の意樂に隨へり。然るに此等の衆生は今は皆衰老して年八十と過き。髮白く面皺みて久しからそして將に死なんとす。我れ當に佛法を以て之を訓導すへしと。即ち此等の衆を集めて法化を宣流して一時に

▲見惑思惑の事は第三卷百十七頁に委し

四果を得せしめ。就中、阿羅漢には諸の煩惱を盡くして禪定自在に八解脫の功德を具へしむとなり。（已上施）

於汝意云何。是大施主所得功德。寧爲多不。

此は第三節如來の問なり。

彌勒白佛言。世尊是人功德甚多。無量無邊。若是施主。但施衆生一切樂具。功德無量。何況令得阿羅漢果。

此は第四節彌勒の答なり。○況得阿羅漢果とは法施といふ。

佛告彌勒。我今分明語汝。是人以一切樂具施於四百萬億阿僧祇世界六趣衆生。又令得阿羅漢果。所得功德。不如是第五十人聞法華經一偈隨喜功德。百分千分。百千萬億分。不及其一。乃至算數譬喩。所不能知。阿逸多。如是第五十人展轉聞法華經隨喜功德。尙無量無邊阿僧祇。何況最初於會中聞而隨喜者。其福復勝無量無邊阿僧祇。不可得比。

此は第五節正しく格量するなり。

（釋意義疏に二施の時長く行ひ廣きに一念の隨喜に及はざる所以は。財施は是れ世間の因なり。（布施行は人天の樂果を感ずる樂因なるを云ふ）法施は但二乘を得るなり。（今の法施に就て言ふ）隨喜は凡を越え聖を越えて必ず當に成佛すべし。故に隨喜は勝れたるなり。十方の螢火は一の日に及はず。大千の野干は一の獅子に及はざるが如し。智度論に云く。三千の草樹は一の如意樹に如かずと。又善に三品あり。財施は是れ世間の因なれば下品となし。法施は二乘の果を得せしむれは是れ中品と名く。隨喜は作佛すれは名て上品となす云云。

又阿逸多。若人爲是經故。往詣僧坊。若坐若立。須臾聽受。緣是功德。轉身所生。得好上妙象馬車乘。珍寶輦輿。及乘天宮。

已下は第二に勸他聽法の人と明すなり。此中四人あり。初は自ら往て聽く人。二は人に座を分つ人。三は他を勸めて聽かしむる人。四は具さに聽て修行する人なり。今は第一自ら往て聽く人を明す。○乘天宮とは上の車乘輦輿の文字より引て此に天宮に乘るといふ。天の宮殿に生する意なり。（釋意）凡そ果報に二あり。一を華報といひ二を果報といふ。華報とは米麥を

作りて薨稈を得るの如く。果報とは正しく米麥の實を得るの如し。之に就て此處に明らす四人の中初の三人に明らす所は但其の華報に就きしのみ。若し其果報をいはゝ固より佛果なりと心得へし。義疏に云く。第一の人は其往詣聽法の義を取るの故に天宮に乗る等の報と得るなり。若し聽法の邊に就て報を得るを明らは則ち無邊の福を得ん。而して此中に三品の人あり。下品は乘馬に乗る報と得。中品は七珍の輿に乗る報を得。上品は天宮に乗る也云云。

若復有人。於講法處。坐。更有人來。勸令坐聽。若分座令坐。是人功德。轉身得帝釋坐處。若梵天王坐處。若轉輪聖王所坐之處。

此は第二に座を分ちて聽かしむる人なり。是れ亦分座の義邊を取るの故に三王の坐處を得るなり。若し聽法の義邊に就らは即ち無窮の福を得るとなり。

阿逸多。若復有人語餘人言。有經名法華。可共往聽。即受其教。乃至須臾聞。是人功德。轉身得與陀羅尼菩薩共生一處。利根智慧。

百千萬世。終不瘖瘂口氣不臭。舌常無病。口亦無病。齒不垢黑。不黃不疎。亦不缺落。不差不曲。脣不下垂。亦不褰縮。不麤澀。不瘡疹。亦不缺壞。亦不喎邪。不厚不大。亦不黧黑。無諸可惡。鼻不匾�。亦不曲戾。面色不黑。亦不狹長。亦不窊曲。無有一切不可喜相。脣舌牙齒。悉皆嚴好。鼻脩高直。面貌圓滿。眉高而長。額廣平正。人相具足。世世所生。見佛聞法。信受教誨。

此は第三に他を勸めて聽かしむる人なり。

（字義）陀羅尼菩薩とは陀羅尼の德を得たる高位の菩薩なり。陀羅尼は總持と譯す。文義を憶持する力なり。○喎とは口戾り不正なり。○匾匾とは玄贊に匾は薄なり。釋文に云く今の俗廣博を呼て匾匾となすと。

（釋意）章安（天台の直弟）の云く。初め與陀羅尼菩薩共生一處より終り人相具足に至るまて合して五十の功德あり。故に功德を以て人に名くれは亦五十人となる。（上の五十と同し）但上の五十人は內心の隨喜を論し。今は唯外事を論するを異となす也。又此文の中に六根の功德あり。何となれは利根智惠は是れ

意根の功德なり。不瘖瘂は舌根の功德なり。鼻修高直は鼻根の功德なり。見佛は眼根の功德なり。聞法は耳根の功德なり。餘は是れ身根の功德なり。前の內心隨喜の德は十信位相似即の分也。今は乃ち相似即の前の德。觀行即の分なるのみ云云。義疏に云く。此中人を勸めて法華を聽ゐしむる義を取れは四種の法を得。一には人を勸めて經を聽ゐしむるは即ち是れ人の善友なり。故に後に已れ善友に値ふ報を得。與陀羅尼菩薩共生一處と言ふ所以なり。二には人と勸めて法を聽ゐしむれは前人數を受けて須臾に法を聞て智惠を發生す。故に後に已れ還て智惠の果報を得。經に利根智惠と言ふ所以なり。三には口業を以て人と勸めて微妙の法を聽ゐしめ。他の正信正解を生せしむるゐ故に。已れ後に醜陋を離るゝことを得て端正の果報を得るなり。故に文中口舌に就て言ふ所多し。四には人を勸めて經を聽ゐしむるは是れ人の善友なれは世世に常に見佛聞法信受教誨を得るなり云云。

阿逸多。汝且觀是勸於一人。令往聽法。功德如此。何況一心聽說讀誦。而於大衆爲人分別。如說修行。

此は第四に具さに聽て修行する人なり。此第四の人の福は最勝なれは其報說く可からさるなり。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

若人於法會　得聞是經典　乃至於一偈　隨喜爲他說
如是展轉教　至於第五十　最後人獲福　今當分別之

已下は第二に偈頌なり。此の中二段あり。初は內心隨喜の人を頌し。二は勸他聽法の人を頌す。初の中に三節あり。此は第一節第五十人の人を頌す。

如有大施主　供給無量衆　具滿八十歲　隨意之所欲
見彼衰老相　髮白而面皺　齒疎形枯竭　念其死不久
我今應當教　令得於道果　即爲方便說　涅槃眞實法
世皆不牢固　如水沫泡焰　汝等咸應當　疾生厭離心
諸人聞是法　皆得阿羅漢　具足六神通　三明八解脫

此は第二節格量の本を頌するなり。

（字義道、果、とは聲聞道の證果なり。四果の別あり。長行の如し。○涅槃眞實法とは世事のはゐなきに對して涅槃を眞實といふ。此涅槃を得るを聲聞道の目的とす。而して今は小乘の涅槃なれは偏眞空寂の涅槃なり。○水沫泡焰とは水沫水泡陽焰なり。陽焰とは莊子に野馬といふ類なり。かけらふと訓す。野中の塵埃日光に照されて浮動しけるを遠く望めは水の如し。愚者誤りて眞の水となす。之を陽焰と云ふと智度論に解せり。維摩經方便品の中に廣く此等の諸喩を引て世間法の不實無常なるを明ゐせり。○皆得阿羅漢とは三界の法に厭離心を生して一切の煩惱を斷し涅槃眞實の法を證得せるを阿羅漢といふ。○六神通三明八解脫とは羅漢所具の德なり。前に辨せり。（第二卷十九頁六）

最後第五十、聞一偈隨喜、是人福勝彼、不可爲譬喩、
如是展轉聞、其福尙無量、何況於法會、初聞隨喜者、

此は第三節正しく格量するを頌す。最後第五十聞一偶隨喜の意を

藤原爲顯

夫木小夜ふけていそちにつたふ濱千鳥聞つゝ人を夢はさむなり　最惠法親王

新葉法の花いく山風にさそはれてこゝまてもなほ匂ひきぬらん　前大僧正慈鎭

續拾つたへ行五十の末のやまの井に御法の水をくみてゝるゝなり　源俊頼朝臣

散水法の海磯つたひきく波の音をつゝむにさへもぬるゝ袖のなし

若有勸一人、將引聽法華、言此經深妙、千萬劫難遇、
即受教往聽、乃至須臾聞、斯人之福報、今當分別說、
世世無口患、齒不疎黃黑、唇不厚褰缺、無有可惡相、
舌不乾黑短、鼻高脩且直、額廣而平正、面目悉端嚴、
爲人所喜見、口氣無臭穢、優鉢華之香、常從其口出、

此は第二に他を勸めて法を聽のしむる人を頌す。此中四節あり。此は第一節超て勸聽の人と頌するなり。○斯人之福報とは勸めし人をさす。○優鉢

華とは具さには優鉢羅華といふ。此に青蓮花と譯す。

若故詣僧坊　欲聽法華經　須臾聞歡喜　今當說其福
後生天人中　得妙象馬車　珍寶之輦輿　及乘天宮殿

此は第二節。追て自ら往て法を聽く人を頌す。

若於講法處　勸人坐聽經　是福因緣得　釋梵轉輪座

此は第三節。座を分つ人を頌す

何況一心聽　解說其義趣　如說而修行　其福不可限

此は第四節。具さに聽て修行する人を頌す。▲初隨喜品の因の功德を明かし終る。（八十頁下）

妙法蓮華經法師功德品第十九

流通分の中。弘經の功德深きことを明かして流通を勸むる中に上來は初隨喜品の因の功德を明かして流通を勸むる一大段終るを以て。已下は第二大段。初隨喜品の果の功德を明かして流通を勸むるなり。即ち當品の始終是れなり。當品の中には受持讀誦解說書寫の五種の法師か六根清淨の

○法師功德品第十九

功德を得ることを明かせり。是れ前に明かせる五品の中初品の人の進んで十信位に上りて（即ち觀行即より相似即に入る）得る所なれは初品の果の功德といふなり。

法師の義は前の法師品に說くが如し。（第四卷）即ち五種の法師なり。五種の法師か道力增進して六根清淨の功德を得るを明かすが故に法師功德品といふ。問ふ。五品とは第一に隨喜品。第二に讀誦品。第三に說法品。第四に兼行六度品。第五に正行六度品なり。（前に譬よ）而して此品の初に六根清淨の德を得る人を擧けて受持是法華經若讀若誦若解說若書寫といへり。之を前の五品に對するに初の三品に當れり。されは三品の果を明かすといふへし。何ろ初の隨喜品の果に限るや。答ふ文字の上より言へは難する所の如し。然れとも今は義に依て之を分別す。何となれは隨喜品と云へはとて會に隨喜の念をのみ云ふにあらす。此中固より受持も讀誦もあるへけれは。當品の初にある五種法師の行を盡く隨喜品と見るも妨けはあるへからす。かくて前品は明に隨喜功德品と題すれは初隨喜品の功德たるは言ふまて

▲身三口四意三とは不婬不盜不殺是れ身三なり。不妄語不綺舌不惡口不綺語是れ口四なり。不貪不瞋不邪見是れ意三なり。

もなし。而して今は此品に次て法師の功德を明すしたる者なれは。前品に望めて初隨喜品の觀行を成就して得たる功德と見るか台祖の意なり。是れ亦人を勸むる所以なり。何となれは初隨喜品の功能すら如此。況んや後の四品に於てをやと。聞く者益感憤すべければなり。故に文句に云く。初品既に然り。四品加〳〵然り。相似(十信を云)既に然り。分眞(十住を云)倍〳〵然りと。

爾時。佛告常精進菩薩摩訶薩。若善男子善女人。受持是法華經。若讀若誦。若解說若書寫。是人當得八百眼功德。千二百耳功德。八百身功德。千二百意功德。以是功德。莊嚴六根。皆令清淨。

此品の始終初品の果の功德を明すに二段あり。初は總じて六根の功德盈縮の數を列らね。後は別して六章となして之を釋す。今は初なり。

(釋意六根の功德合すれば六千也。六千なる所以は菩薩善を行するに三業を出でず。身三口四意三合して十善とす。而て一善を首とせば餘の九善は莊嚴となる。是れ則ち十善亘に莊嚴すれば百善となる。一善の中に十如あ

り。即ち千善なり。自行化他の二を合すれば二千となる之を衣座室の三軌に(第四卷七十七頁)約して六千也と云。之を六根に平分すれば一一の根各一千の功德なり。然るに今は耳舌意の三根は持經の用勝ぐれば三分の一を增して千二百となし。眼鼻身の三根は持經の用劣れば三分の一を減して八百となせしなり。さて常精進菩薩に對するは常精進は十信の中の第三信の名なり。今此六根清淨の德は是れ十信の位なるを以て。之を顯さんが爲に此菩薩に對せしとなりといふ。義疏には三義を設けり。一には緣の宜しき所に隨ふなり。二には此人は經を持して已に淨根の果報を得るの故に還て之に對するなり。三には淨根を得んと欲すれは必す須く精進すへし。名に因て義を表す。故に之に對する也と。

○眼根清淨

是善男子善女人。父母所生。清淨肉眼。見於三千大千世界。內外所有山林河海。下至阿鼻地獄。上至有頂。亦見其中一切衆生。及業因緣果報生處。悉見悉知。

已下は第二に別して六章となして釋するなり。此中六段あり。一に眼根二

に耳根三に鼻根四に舌根五に身根六に意根なり。第一眼根の中に長行と偈頌との二段あり。今は長行なり。

(字義)善男子、善女人とは五種法師の人にて在家にも出家にも通ず。○父母所生清浄肉眼とは法華論に凡夫の人は經の力を以ての故に勝根の用を得て未だ初地に入らずと。(初地なれは)若し初地に入れは法性身と得へけれは則ち三界生死の身と捨てゝ便ち父母所生の眼を用ゐざるなり。(父母生身ば即ち三界生死の身なり)○阿鼻とは無間と譯す。此の世界の最底とある地獄なり。○三千大千世界内外とは三千界は前に註せり。文句に凡そ梵王の天眼は已の世界に在ては遍く大千界を見る。大千界の外は風輪の障りとなりて見ること能はず。小羅漢は小千界を見。大羅漢は大千界と見。緣覺は百の三千界を見る。今は大千の内外を見ると。○有頂とは色究竟天にて色界の最高處なり。無色界は形体なく隨て方所を定むへからされは言はず。○一切衆生とは地獄天宮は依報を見るをいふ。今は正報と見るなり。○業因緣とは業は果報を生する因緣たれは業の因緣と云。略しては業因とも業緣ともい

いへり。業に種種の差別あり。之の因となり緣となりて種種の果を生するなり。○果報生處とは業因に依て天上又は地獄の生を受くる之を果報といふ。果報は即ち衆生の生所なり。依て果報の生所と熟す。

(問答)義疏に問ふ。眼なれは但色を見るへし。云何そ業因緣果報をも見るといふや。是れ意根の知る所なれはなり。答ふ。小乘の人は肉眼但色法のみを見るなり。天眼通は天眼を方便と爲すに因るの故に天眼智を發して能く未來の生死等の事を知るといへり。(天眼通か未來の事を知ること前の三明の解を看よ第二卷六十八頁)此天眼に例して知るへし。又法華論に云く六根淨とは一一の根の中に於て六の用を具足すと。故に眼根亦業因及び果報を知るなり。問ふ。六根云何して互用を得るや。答ふ。六根即ち是れ實相なり。實相は即ち是れ無相なりと悟るの故に六根無碍なり。六根無碍なるの故に互用を得るなり。問ふ根に功德を具すること既に多少不同なり。云何の同しく三千界を見るや。答ふ。燈の大小異なれとも同しく一室と照すの如きなり。問ふ。既に三千界を見る。何か故そ天眼と名けさるや。答ふ。禪定を修して得る所の淨色の來て眼

▲淨色とは天眼に具ふ所の清淨の眼球をいふ

中に入るにあらす。（天眼を修得すといふは此義なり。人にして禪定を修し禪定に至るの天眼を修得するには天眼の淨色を感得して三千界の事を見るなり。）又彼の天に生して得るにもあらす。（之を生得の天眼といふ。さて天とは色界天なり）故に天眼と名けす。問ふ二乘の天眼三千界を見ると今の眼根淨と何の異ぞ。答ふ。二乘は但三千の國土を見るのみ。今は經を持する力に依て此眼を得諸佛及ひ涌出の菩薩及ひ寶塔を見る故に二乘と異なり。（看よ經中の諸佛并に寶塔等は凡夫の肉眼又は二乘の天眼に因て見る所にあらす）

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

若於大衆中　以無所畏心　說是法華經　汝聽其功德
是人得八百　功德殊勝眼　以是莊嚴故　其目甚清淨
父母所生眼　悉見三千界　內外彌樓山　須彌及鐵圍
幷諸餘山林　大海江河水　下至阿鼻獄　上至有頂天
其中諸衆生　一切皆悉見　雖未得天眼　肉眼力如是

（字義、無所畏、心とは大衆の中にて安心して法を說く心なり。○彌樓山、須彌とは義疏に彌樓山とは此に高山といふ。又は光山といふ。須彌山とは此に安明山といふ。亦は好高山と云とあり。然るに新譯家の說によれは。彌樓と須彌とは同一梵語の訛略にして正しくは蘇迷盧といふ。此に譯して妙高山といふと西域記に出つ。○鐵圍とは大海を圍繞して一世界を區劃せる鐵山なり。○雖未得天眼とは今は十信相似即の位なれは天眼を得す。天眼は初住分眞即の位に入りて得るなりといふ。但し天眼といふは此中に法眼慧眼佛眼の三を兼ねる意あるへし。此四は共に聖者の感得するものなれはなり。

復次常精進。若善男子善女人。受持此經。若讀若誦若解說若書寫。得千二百耳功德。以是清淨耳聞三千大千世界。下至阿鼻地獄。上至有頂。其中內外種種所有語言音聲。象聲。馬聲。牛聲。車聲。啼哭聲。愁嘆聲。螺聲。鼓聲。鐘聲。鈴聲。笑聲。語聲。男聲。女聲。童子聲。童女聲。法聲。非法聲。苦聲。樂聲。凡夫聖人聲。喜聲。不喜聲。天聲。龍聲。夜叉聲。乾闥婆聲。阿脩羅聲。迦樓羅聲。緊那羅聲。摩睺羅伽聲。

○耳根清淨

水聲。風聲。地獄聲。畜生聲。餓鬼聲。比丘聲。比丘尼聲。聲聞聲。辟支佛聲。菩薩聲。佛聲。以要言之。三千大千世界中一切內外所有諸聲。雖未得天耳。以父母所生清淨常耳。皆悉聞知。如是分別種種音聲。而不壞耳根。

己下は第二に耳根の功德なり。長行と偈頌との二段ありて先つ長行なり。(字義)千、二百、耳功、德とは義疏に問ふ。耳は云何ぞ眼に勝くれて千二百を得るや。答ふ。無眼の人は自行化他を妨けず。生聾の人は此二義を欠くの故に耳は勝くれ眼は劣れりと。○法聲非法聲とは道理に合する聲を法聲といひ。道理に合せざる聲を非法聲といふ。常耳とは平常の耳にて特殊の物にあらずとなり。○不壞耳根とは父母所生の耳根其まゝにして此の如きの大用を起すとなり。生得の耳根を壞して更に別物を易ふるにあらざるをいふ。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

父母所生耳　清淨無濁穢　以此常耳聞　三千世界聲

象馬聲牛聲　鐘鈴螺鼓聲　琴瑟箜篌聲　簫笛之音聲
清淨好歌聲　聽之而不著　無數種人聲　聞悉能解了
又聞諸天聲　微妙之音聲　及聞男女聲　童子童女聲
山川險谷中　迦陵頻伽聲　命命等諸鳥　悉聞其音聲
地獄衆苦痛　諸阿脩羅等　饑鬼飢渴逼　求索飲食聲
諸種種楚毒聲　居在大海邊　自共言語時　出于大音聲
如是說法者　安住於此間　遙聞是衆聲　而不壞耳根
十方世界中　禽獸鳴相呼　其說法之人　於此悉聞之
其諸梵天上　光音及徧淨　乃至有頂天　言語之音聲
法師住於此　悉皆得聞之　若讀誦經典　若爲他人說
一切比丘衆　及諸比丘尼　若讀誦於經法　若爲他人說
法師住於此　悉皆得聞之　撰集解其義
復有諸菩薩

如是諸音聲　悉皆得聞之　於諸大衆中　演說微妙法
諸佛大聖尊　敎化衆生者　悉皆得聞之　下至阿鼻獄　上至有頂天
持此法華者　內外諸音聲　其耳聰利故　悉能分別知
三千大千界　而不壞耳根　但用所生耳　功德已如是
皆聞其音聲　雖未得天耳
持是法華者

此は偈頌なり。

（字義）聽之而不著とは好聲と聞くも貪着の心を生せざるをいふ。○迦陵頻伽とは此に妙聲鳥と譯す。正法念經に云く。山あり曠野と名く。其中多く伽陵頻迦あり。妙なる音聲を出だす云々。○命命とは雜寶藏經に云く。雪山に鳥あり名て共命となす。一身三頭。識各異なり。報命は則ち同し。故に命命と云ふと。阿彌陀經には共命之鳥といひ。勝天王經には生生之鳥といひ。涅槃經には耆婆耆婆といふ。經音藏に耆婆耆婆は此に命命鳥と言ふと○梵天とは欲界の初禪天なり○光音とは第二禪天なり○徧淨とは第三禪天也。

○鼻根淸淨

復次常精進善男子善女人。受持是經。若讀。若誦。若解說。若書寫。成就八百鼻功德。以是淸淨鼻根聞於三千大千世界。上下內外種種諸香。須曼那華香。闍提華香。末利華香。瞻蔔華香。波羅羅華香。赤蓮華香。青蓮華香。白蓮華香。華樹香。果樹香。旃檀香。沉水香。多摩羅跋香。多伽羅香。及千萬種和香。若抹若丸。若塗香。持是經者。於此間住。悉能分別。又復別知衆生之香。象香。馬香。牛羊等香。男香。女香。童子香。童女香。及艸木叢林香。若近若遠。所有諸香。悉皆得聞。分別不錯。持是經者。雖住於此。亦聞天上諸天之香。波利質多羅拘鞞陀羅樹香。及曼陀羅華香。摩訶曼陀羅華香。曼殊沙華香。摩訶曼殊沙華香。旃檀沉水種種抹香。諸雜華香。如是等天香。和合所出之香。無不聞知。又聞諸天身香。釋提桓因。在勝殿上。五欲娛樂嬉戲時香。若在妙法堂上。爲忉利諸天說法時香。若於諸園遊戲時香。及餘天等男女身香。皆悉遙聞。如是展轉乃至梵世。上至有頂。諸天身香。亦皆聞之。并聞諸天所燒之香。及聲聞香。

辟支佛香菩薩香諸佛身香亦皆遙聞知其所在雖聞此香然於鼻根不壞不錯若欲分別爲他人說憶念不謬

己下第三に鼻根の功德なり。此中長行と偈頌との二あり。此は長行なり。○須曼那香とは翻譯名義集に須曼那は或は須末那といひ又は蘇摩那といふ。此に善攝意といふ。又は稱意華といふ。其色黃白にして極めて香し。樹至大ならず。高さ三四尺下垂して蓋の如しと○末利華とは名義集に末利は亦摩利といふ。此に奈といふ。又鬘花といふ。鬘に作るに堪ゆと○瞻蔔華とは前に註せり○波羅羅華金錢華といふと。○末利華とは名義集に具さには多阿摩羅駄陀羅此に性無垢といふ。或は瞻蔔葉香といふと○多伽羅香とは名義集に此に根香といふ。大論に木香樹といふと。○波利質多羅とは序品に(第一卷十三頁六)天樹王といふ是れなり。涅槃經に云く。三十三天に波利質多羅樹あり。其の根地に入ること深さ五由旬なり。高さ百由旬。枝葉四面五十由旬。其花開敷すれば香氣周徧すること五十由旬なりと。○拘鞞陀羅樹とは

名義集に此に大遊戲地樹といふと。立世經及び起世經に云く。園中に樹あり波利夜多と名く。又拘毘羅多と名くと。○釋提桓因とは帝釋の事忉利天の主なり。序品の初に辨せり。○勝殿とは帝釋の居住する宮殿なり。俱舍論卷十一に云く。三十三天は迷盧の頂に住す。山頂の中に於て宮あり善見と名く。是れ天帝釋の都する所の大城なり。其城中に於て殊勝殿あり。種種の妙寶具足莊嚴せり。餘の天宮を蔽す。故に殊勝と名くと是れなり。○妙法堂とは俱舍論に所謂善法堂なり。云く外の西南の角に善法堂あり。三十三天時に集まりて彼に於て如法不如法の事を諍論そと。是れなり。婆娑論百三十三に云く。常に半月の八日十四日十五日に於て此堂中に集り。詳に人天及び阿素路を制伏することを辨ずと。○諸園とは俱舍論に城外(善見城)の四面に四苑莊嚴せり。是れ彼の諸天の共に遊戲する處なり。一には衆車苑二には麁惡苑三には雜林苑四には喜林苑。此を外の飾りと爲すといふ是なり○梵世とは色界の初禪天に三天あり。大梵天梵輔天梵衆天是なり。梵衆天は最下にあり。又梵世といふ。○不壞不錯とは我が鼻根をも傷はず。聞く

所の香をも錯まらざるといふ。

爾時世尊。欲重宣此義而說偈言。

是人鼻清淨　於此世界中　若香若臭物　種種悉聞知
須曼那闍提　多摩羅旃檀　沉水及柱香　種種華果香
及知衆生香　男子女人香　說法者遠住　聞香知所在
大勢轉輪王　小輪轉及子　群臣諸官人　聞香知所在
身所著珍寶　及地中寶藏　轉輪王寶女　聞香知所在
諸人嚴身具　衣服及瓔珞　種種所塗香　聞則知其身
諸天若行坐　遊戲及神變　持是法華者　聞香悉能知
諸樹華果實　及蘇油香氣　持經者住此　悉知其所在
諸山深嶮處　旃檀樹華敷　衆生在中者　聞香皆能知
鐵圍山大海　地中諸衆生　持經者聞香　悉知其所在
阿修羅男女　及其諸眷屬　闘諍遊戲時　聞香皆能知
嚫野險隘處　師子象虎狼　野牛水牛等　聞香知所在

若有懷妊者　未辨其男女　無根及非人　聞香悉能知
以聞香力故　知其初懷妊　成就不成就　安樂產福子
以聞香力故　知男女所念　染欲癡恚心　亦知修善者
地中衆伏藏　金銀諸珍寶　銅器之所盛　聞香悉能知
種種諸瓔珞　無能識其價　聞香知貴賤　出處及所在
天上諸華等　曼陀曼殊沙　波利質多樹　聞香悉能知
天上諸宮殿　上中下差別　衆寶華莊嚴　聞香悉能知
天園林勝殿　諸觀妙法堂　在中而娛樂　聞香悉能知
諸天若聽法　或受五欲時　來往行坐臥　聞香悉能知
天女所著衣　好華香莊嚴　周旋遊戲時　聞香悉能知
如是展轉上　乃至於梵天　入禪出禪者　聞香悉能知
光音徧淨天　乃至子有頂　初生及退沒　聞香悉能知
諸比丘衆等　於法常精進　若坐若經行　及讀誦經法
或在林樹下　專精而坐禪　持經者聞香　悉知其所在

菩薩志堅固　坐禪若讀經　或爲人說法　聞香悉能知
在在方世尊　一切所恭敬　愍衆而說法　聞香悉能知
衆生在佛前　聞經皆歡喜　如法而修行　聞香悉能知
雖未得菩薩　無漏法性鼻　而是持經者　先得此鼻相

此は偈頌なり。

（字義）大勢轉輪王、小轉輪とは轉輪王に金銀銅鉄の四王あり。金輪とは四大洲に王たり。乃至鉄輪王は一大洲に王たりといふ。俱舍論等に出つ。大勢轉輪王とは金輪王をいひ。已下は則ち小轉輪なり。○轉輪王、寶女とは轉輪王は必す七法を感得す。寶女は其一なり。俱舍論に委し。○蘇油とは蘇摩那油なり。○鉄圍山、及大海地中とは鉄圍山中及ひ大海并に地中の衆生なり。○無根、及非人とは無根は男女根なき不具者なり。非人とは畜類なり。○染欲、癡、悲とは染欲は即ち貪煩惱。悲は即ち瞋煩惱なれは是れ貪瞋癡の三毒なり。○欠禪、出禪とは色界初禪天の天人か或は禪定に入り或は禪定より出るなり。○光音、徧淨天とは第二禪天に三天あり少光天無量光天光音天なり。光音天は其最頂なれは舉く。又第三禪天に三天あり。少淨天無量淨天徧淨天なり。徧淨天は其最頂なれは舉く。○初生及退沒とは天に生るゝを初生といひ。死するを退沒といふ。是れ梵天即ち初禪天の入禪出禪者といふに對して互に顯はすなり。○欠、漏法、性、鼻とは下の文には無漏法性之妙身とあり。父母所生の肉鼻にて無漏法性の妙鼻にあらさるをいふ。初住已上にて一分實相を證したる人の鼻を無漏法性の鼻といふ。無漏法性とは實相眞如の別名なり。

復次常精進。若善男子善女人。受持是經。若讀若誦。若解說。若書寫。得千二百舌功德。若好若醜。若美若不美。及諸澁物。在其舌根。皆變成上味。如天甘露。無不美者。若以舌根於大衆中。有所演說。出深妙聲。能入其心。皆令歡喜快樂。又諸天子天女。釋梵諸天。聞是深妙音聲。有所演說言論。次第皆悉來聽。及諸龍龍女。夜叉夜叉女。乾闥婆乾闥婆女。阿修羅阿修羅天。迦樓羅迦樓羅女。緊那羅緊那羅女。摩睺羅伽摩睺羅伽女。爲聽法故。皆來親近。恭敬供

○舌根清淨

菩薩志堅固　坐禪若讀經　或爲人說法　聞香悉能知
在在方世尊　一切所恭敬　愍衆而說法　聞香悉能知
衆生在佛前　聞經皆歡喜　如法而修行　聞香悉能知
雖未得菩薩　無漏法性鼻　而是持經者　先得此鼻相

此は偈頌なり。

（字義）大勢轉輪王、小轉輪とは轉輪王に金銀銅鉄の四王あり。金輪とは四大洲に王たりといふ。俱舍論等に出つ。大勢轉輪王とは金輪王をいひ、已下は則ち小轉輪なり。○轉輪王、寶女、とは轉輪王は必す七法を感得す。寶女は其一なり。俱舍論に委し。○蘇、油、とは蘇摩那油なり。○鉄圍山、及大海、地中、とは鉄圍山中及ひ大海并に地中の衆生なり。○無根、及非人、とは、無根は男女根なき不具者なり。非人とは畜類なり。○染欲、癡、悲、とは染欲は即ち貪煩惱、悲は即ち瞋煩惱なれは、是れ貪瞋癡の三毒なり。○入禪出禪とは色界初禪天の天人か或は禪定に入り或は禪定より出るなり。○光音、徧淨、天とは第二禪天に三天あり少光天無量光天光音天なり。光音天は其最頂なれは擧く。又第三禪天に三天あり。少淨天無量淨天徧淨天なり。徧淨天は其最頂なれは擧く。○初生及退沒とは天に生るゝを初生といひ、死するを退沒といふ。是れ梵天即ち初禪天の入禪出禪者といふに對して互に顯はすなり。○鉄、漏、法、性、鼻、とは下の文には無漏法性之妙身とあり。父母所生の肉鼻にて無漏法性の妙鼻にあらさるをいふ。初住已上にて一分實相を證したる人の鼻を無漏法性の鼻といふ。無漏法性とは實相眞如の別名たり。

復次常精進。若善男子善女人。受持是經。若讀若誦。若解說。若書寫。得千二百舌功德。若好若醜。若美若不美。及諸澁物。在其舌根。皆變成上味。如天甘露。無不美者。若以舌根於大衆中。有所演說。出深妙聲。能入其心。皆令歡喜快樂。又諸天子天女。釋梵諸天。聞是深妙音聲。有所演說言論。次第皆悉來聽。及諸龍龍女。夜叉夜叉女。乾闥婆乾闥婆女。阿修羅阿修羅　迦樓羅迦樓羅女。緊那羅緊那羅女。摩睺羅伽摩睺羅伽女。爲聽法故。皆來親近。恭敬供

○舌根清淨

養。及比丘比丘尼。優婆塞優婆夷。國王王子。宰臣眷屬。小轉輪王七寶千子。內外眷屬。乘其宮殿。俱來聽[illegible]以是菩薩善說法故。婆羅門居士。國內人民。盡其形壽。隨侍供養。又諸聲聞辟支佛。菩薩諸佛。常樂見之。是人所在方面。諸佛皆向其處說法。悉能受持一切佛法。又能出於深妙法音。

已下は第四に舌根の功德なり。此中長行と偈頌との二あり。今は長行なり。

（字義皆、變成、上味、とは義疏に云く。此に二義あり。一には天の惡食の變して上味となり。餓鬼の好食の變して不淨と成るが如し。二には佛の咽喉の中には甘露の泉ありて一切の泉に和して皆甘露となる。今經を持つ人も分に隨ふて之ある。問ふ。舌は能く味を知る。惡味未だ舌に到らずして皆變して上味となる。耳能く聲を聞く。諸の惡聲と聽くに何ぞ變して好聲と成らさらんや。答ふ。皆互に通ずるなり。耳は既に遍く好惡の聲を聞く。舌も精しく一切の味を分別す。但だ互に歎する耳。又味は正しく身を益す。變を論する所以なり。餘は正しく益せざるが故に變を論せざるなりと。○七、寶、千、子

とは轉輪聖主七寶を感し七寶の中に女寶ありて王の千子を生むこと長阿含經十八等に委し。○諸、佛、皆、向、其、方、說、法、とは此人は既に惑に背て理に向ふが故に常に佛面を見る。故に佛の面を轉して之に向ふか如し。若し理に背て惑に向へは則ち佛を見す。佛の面を轉して之に背くが如し。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

是人舌根淨　終不受惡味　其有所食噉　悉皆成甘露
以深淨妙聲　於大衆說法　以諸因緣喩　引導衆生心
聞者皆歡喜　設諸上供養　皆以恭敬心　而共來聽法
諸天龍夜叉　及阿修羅等　徧滿三千界　隨意即能至
是說法之人　若欲以妙音　合掌恭敬心　常來聽受法
大小轉輪王　及千子眷屬　亦以歡喜心　常樂來供養
諸天龍夜叉　羅刹毘舍闍　如是諸天衆　常來至其所
梵天王魔王　自在大自在　常念而守護　或時爲現身
諸佛及弟子　聞其說法音

此は偈頌なり。

（字義夜叉とは西域記に藥叉舊に訛して夜叉と曰ふ能く空中に飛騰すと。名義集に此に勇健と云ふ亦暴惡と云ふと。○羅刹とは名義集に此に速疾鬼と云ふ又可畏と云ふ亦暴惡と云ふと。○毗舍闍とは亦鬼の名なり前に註せり。（第二卷六十二頁）○魔王とは他化自在天は欲界の頂なり魔身を現す依て魔王と稱す。

○身根清淨

復次常精進善男子善女人受持是經若讀若誦若解說若書寫得八百身功德得清淨身如淨瑠璃衆生喜見其身淨故三千大千世界衆生生時死時上下好醜生善處惡處悪於中現及鐵圍山大鐵圍山彌樓山摩訶彌樓山等諸山王及其中衆生悪於中現下至阿鼻地獄上至有頂所有及衆生悪於中現若聲聞支佛菩薩諸佛說法皆於身中現其色像

己下は第五に身根の功德なり。此の中長行と偈頌との二節あり。此は長行なり。○悪於中現とは身中に於て諸相を現出すると鏡中に影を現ずる如

きをいふ。○山王とは諸山の中の王なるが故に山王といふ。

爾時世尊欲重宣此義而說偈言若持法華經其身甚清淨如彼淨瑠璃衆生皆喜見又如淨明鏡悪見諸色像菩薩於淨身皆見世所有唯獨自明了餘人所不見

三千世界中一切諸群萌天人阿修羅地獄鬼畜生如是諸色像皆於身中現鐵圍及彌樓摩訶彌樓山諸天等宮殿乃至於有頂諸天海水等皆於身中現若獨若在衆說法悪皆現諸佛及聲聞佛子菩薩等若獨若在衆說法悪皆現雖未得無漏法性之妙身以清淨常體一切於中現

此は偈頌なり。

（字義群萌とは群生といふ如し。○無漏法性之妙身とは圓教の初住別教の初地已上の身にて實相の一分を證悟せしを無漏法性の妙身となす。此の

時始て分段生死を離れて變易生死を受くるなり。二生死の事は前に辨せり（十一卷七十一頁）○清淨常躰とは平常父母所生の躰をいふ又如淨明鏡悉見諸色像といふを。

皇太后宮大夫俊成

詠藻　濁りなくきよき心にみがゝれて身こゝろますみの鏡なりけれ

中納言定家

題草　法にそむ心に身をもみがゝはやさても戀しき影や見ゆると

慈鎮和尚

○意根清淨

○皆與實相不相違背

○資生業等皆順正法

拾玉　いつくさの法のしわさの花の色のうつる鏡と見る人ぞなき

復次常精進。若善男子善女人。如來滅後。受持是經。若讀若誦若解說。若書寫。得千二百意功德。以是清淨意根。乃至聞一偈一句。通達無量無邊之義。解其義已。能演說一句一偈。至於一月四月乃至一歲。諸所說法。隨其義趣。皆與實相不相違背。若說俗間經書。治世語言。資生業等。皆順正法。三千大世界六趣衆生。心之所行。心所動作。心所戲論。皆悉知之。雖未得無漏智惠。而其意根清淨如此。是人有所思惟籌量言說。皆是佛法。無不眞實。亦是先佛經中所說。

（籌量）言說皆是佛法

已下は第六に意根の功德なり。此の中長行と偈頌との二節あり。先つ長行なり。

（字義）如來滅後とは義疏に云く意根を釋する中に偏に如來滅後と言ふは一を擧げて諸を類するなりと。○聞一偈一句とは義疏に云く。此文の中四無礙辯を明すす。聞一偈一句とは法辯なり。通達無量義とは義辯なり。能演說一句一偈とは辭辯なり。三千大千世界已下は樂說辯なりと。四辯の義は前に辨せり（第一卷百一頁）○一月四月乃至一歲とは一月は月の滿なり。四月は時の滿なり一歲は年の滿なり。四月は時の滿とは印度は一年を熱時雨時寒時に分てばなり。西域記に云く。如來の聖敎には歲を三時となす。正月十六日より五月十六日に至るは熱時なり。五月十六日より九月十五日に至るは雨時なり。九月十六日より正月十五日に至るは寒時也と○皆與實相不

相違背とは法華經の悟を開きて見れば櫻花紅葉四季おり〳〵の轉變も眞如隨緣のけはひ岸うつ波の音松吹く風の聲まで諸法實相の唱へにあらずといふことなし。

結崎や寄くる波も松風によく〳〵きけば四德波羅密
秋の野につまこふしかの聲までも皆與實相不相違背
能く聞けば鶏の聲も御法也あはは本不生あくは不可得

○心之所行とは心の思ふ所にて意業なり○心所動作とは身業に涉るをいふ○心所戲論とは口業に涉るをこふ戲論とは言語は假名にて法の實躰に契はざれば（火と呼ひ口中の如し）都て戲論といふ戲言をのみいふにあらず。

爾時世尊欲重宣此義而說偈言。

是人意淸淨　明利無穢濁　以此妙意根　知上中下法
乃至聞一偈　通達無量義　次第如法說　月四月至歲
是世界內外　一切諸衆生　若天龍及人　夜叉鬼神等

其在六趣中　所念若干種　持法華之報　一時皆悉知
十方無數佛　百福莊嚴相　爲衆生說法　悉聞能受持
思惟無量義　說法亦無量　終始不忘錯　以持法華故
悉知諸法相　隨義識次第　達名字語言　如所知演說
此人有所說　皆是先佛法　以演此法故　於衆無所畏
持法華經者　意根淨若斯　雖未得無漏　先有如是相
是人持此經　安住希有地　爲一切衆生　歡喜而愛敬
能以千萬種　善巧之語言　分別而演說　持法華經故

此は偈頌なり。

（字義）上中下法とは聲聞緣覺菩薩の三乘教なり○百福莊嚴相とは佛に三十二相あり。此一一の相は過去世に於て百種の福業を修せしに由りて感する所なりといふ。故に三十二相を百福莊嚴の相といふなり。○隨義識次第とは其文義に隨ふて能く次第を知るなり。○雖未得無漏とは初住に至

りて始て無漏法性の意根を得へし。○希有地とは六根清淨の地をいふ

妙法蓮華經卷第六

妙法蓮華經講義卷六

○一心三觀

天台一万八千丈。屹として法界に聳ゆ。而して之を攀ぢんには教觀の二道に由るへきと第六卷の首に辯せし如し。但し其教道は前に既に解せり。今將に觀道を論せん。

蓋し聞く。昔し北齊に一禪師あり。惠文といふ。自ら詫して曰く。我れ河淮に獨歩せり。誰をか呼んで師とせん。若し經を得は佛を師とせん。若し論を得は菩薩を師とせんと。乃ち大經藏に入り。香を燒き花を散して。手を後にして之を取るに。龍樹菩薩所造の中觀論を得たり。菩薩は釋尊より次第付法十三代の祖なり。論を開て之を讀み觀四諦品に至り。

因緣所生法　我說即是空。　亦爲是假名。　亦是中道義

といふ偈に於て。恍然として一心三觀の妙旨を悟り。以て南岳の惠思に授け。惠思は之を天台の智顗に授くといふ。故に一家の觀門に於ては此一偈二十字を以て究竟の勘文となす也。

さて文の意は。一切の法は皆因緣所生にて自爾自然の法なし。故に之を分拆すれは盡く因と緣とに飯して法の自躰自性なし。之を因緣所生法我說即是空といふ。かくて自性は

空なれとも因縁の合する處彼此の物躰顯現せさるなし。之を亦爲是假名といふ。此物自性なくして暫く自性ある如き假相を裝へは之を假名と稱するなり。されは空と言はんとすれは歴然たる假相あり。有と言はんとすれは自躰あることなし。有とも空とも定むへからす。即ち有空不二の中といふより外なし。之を亦是中道義といふ。是れ即ち空假中の三諦にて。此三諦の理は一切諸法本より之を具ふ者なれは。荆溪大師は三諦は天然の性德なりといへり。諦とは誠諦眞實の一義なり。此空假中の理は誠諦眞實なれは三諦といひ。此三諦を照すを三觀といふ。即ち三諦は所觀の理に就き三觀は能觀の智に約せし名なり。

さて空諦の理によれは。一切諸法彼も空此も空なれは。彼此の區別もなく自他の差別もなく。天地万物平等一味空寂無相なり。更に一法の存するなし。強て之を言へは空の一法あるのみ。故に空諦の故には万法を一法に飯すといふ。次に假諦の義によれは。因縁所生の法森羅万象たり。無量無邊無盡無際なり。強て名て三千の諸法と云(後に解す)。次に中諦の義によれは上に明かす空假の二諦本來相即相融して不二一如の者なれは。空にして空にあらす。有にして有にあらす。非空の空なり。非有の有なり。されは有とも名くへからす。空

とも稱すへからす。何を以て之に名けん。強て名て中といふのみ。中とは絶妙不可思議の異稱にこそ。

是に於て三諦各〻一の功能あるを知るへし。空諦には破情の作用あり。假諦には立法の功能あり。中諦には絶待の功用あり。何となれは空諦の故には諸法の當躰空寂無相と觀して一切の情量を遣蕩すれは破情の能ありとし。假諦の故には諸法の當相宛然として顯現すと觀すれは立法の用ありとし。中諦の故には諸法法爾に有空の對待を絶し中道不可思議なりと觀すれは絶待の功ありとするなり。但し此の如く立立絶の三能を以て三諦に配當する者は。姑く名相の上より其德用を區別せし者なれは。之を名隨德用の三諦と稱するなり。

名隨德用三諦
- 空諦……一切法即一法……破情
- 假諦……一法即一切法……立法
- 中諦……妙躰不可思議……絶侍

然るに三諦は元と圓融して一相一味なり。分離して其界畔を見るべき法にあらす。空諦といふも假中を全ふしたる空諦にして偏空にあらす。假諦といふも空中を收めたる假

諦にして偏有にあらす。中諦といふも空有そのまゝなる中諦にして但中にあらされは。三諦互に融通して三諦の中に各三諦を具へ。隨つて三諦各三能あるを見るなり。其の故は前に云ふ如く諸法の上には本來有空中の三性あり。而して空諦の故には此三性を併せて空するなり。

一空一切空
- 破有……空諦……破情
- 破空……假諦……立法
- 雙破……中諦……絶待

之を一空一切空といふ。一切空のの故に空諦の中反て三諦を存して三能を具ふなり。次に假諦の故には此三性を併せて立つるなり。

一假一切假
- 立有……假諦……立法
- 立空……空諦……破性
- 雙立……中諦……絶待

之を一假一切假といふ。一切假の故に假諦の中反て三諦を存して三能を具ふなり。次に中諦の故には此三性を并せて中ずるなり。

一中一切中
- 雙破不二……空諦……破情
- 雙立不二……假諦……立法
- 破立不二……中諦……絶待

之を一中一切中といふ。一切中の故に中諦の中反て三諦を存して三能を具ふなり。以て三諦各三諦三能を互融互具すると知るへし。

さて此の如く三諦は一往差別すれとも。畢竟融通するを以て四句を成す。四句とは三即一。是れ第一句なり。一即三。是れ第二句なり。非一非三。是れ第三句なり。而一而三。是れ第四句なり。三即一とは三諦別なれとも共に是れ一法の上の理性にして躰一互融するをいひ。一即三とは一法を分別すれは法爾として此の如きの三諦を具するをいひ。非一非三とは第二句の故には非一にして第一句の故には非三なるをいひ。而一而三とは已に第二句の故には一にあらされとも而るも第一句の故には是れ一なり。又第一句の故には三にあらされとも而るも第二句の故には是れ三なるをいふ。如此一とも異とも定むへからすして而るも一とも異ともなる故に之を圓融不可思議の三諦といふなり。此三諦は本有性德の理に。て此三德を照らす者は。一心三觀の修德の智なり。三觀の大綱蓋し

此の如し。

さて惠文禪師は中觀論の一偈にて此三諦の理を證悟せられしか。覆りて經文を見れは本經の中昭々として其義あり。方便品の中に諸法實相を說明して如是相乃至本末究竟等といへり。十如差別するは是れ假諦なり。十如の本末究竟して平等なるは是れ空諦なり。而して此二相即不二なるは即ち中諦なり。故に諸法實相とは。即ち三諦にして三諦は諸法の上の天然の性德なれは實相と云ひし事明らけし。(序品の下を看よ)

一念三千といふも此三諦圓融の理より成りし觀念なり。先つ三千とは十界に十界と具すれは百界となり。百界各十如を具すれは千如となり。此千如に衆生世間と國土世間と五陰世間との三世間を乘したる數なり。是れ圓融の至極を示したる者にて經に所謂本末究竟等の等の一字より來たるなり。即ち十界十如三世間の法の互に融通して一念の中に具するは諸法本來空諦なるか故なり。(即ち一切法一法の理)而のも三千の諸法顯現して歷々たるは假諦なるの故なり。(即ち一法一切法)而のも此二相融即して妙躰不可思議なるは中諦なるか故なり。(一法此の二相同時なり)(一切法一切法の理)されは諸法の實相たる十如を更に擴充して三諦圓融の妙を極めし相を示したるの一念三千なりと知るへし。而して一念といふは一

往主觀に約せし語にて。汎く之を言へは塵々法々皆三千を具せるなり。止觀には一色一香。無非中道といふを以て證すへし。

さて如此諸法は盡く三諦圓融して中道一實なるの。此中道一實の理を敎法の上に示したるの迹門の開會にて。之を佛身の上に明かしたるか本門の開會なり。何となれは敎法は三乘と一乘となり。佛身は本地と垂迹となり。三乘を開會して一乘に皈し。垂迹を開會して本地に融せしめしは。恰も三千の諸法を一法の中に收めたる姿にて。廓實すれは本末究竟等の一句の意なり。故に余は第四卷の首に於て左の如く結論せり。法華の主意は諸法を開會して一乘に皈し一實に融ずるに在りて。此開會を得る所以は一心三觀一念三千の觀に基く者なりと。

次に敎觀二門といふに就て。敎門の觀門より出つるを說かは。先つ敎門とは五時八敎なり。而して五時とは八敎を說きし時期を示したる者なれは。八敎の外に五時はなく。五時の敎化は盡く八敎の中に在り。又八敎とは化儀の四敎と化法の四敎とにて。化儀の四敎は化法の四敎を說き玉へる其儀式作法を分別せし者なれば。化法の四敎の外に化儀の四敎は之なし。されは五時八敎といふも。詮する所は藏通別圓の化法の四敎のみ。かくて

此四教といふは全く三諦中の空中の二諦より成立せしなり。空諦より藏通二教を出たし。中諦より別圓二諦を出たして四教を構成せしなり。三諦中假諦獨り出たす所なきは凡そ教法は斷惑證理を目的となす。而して此目的を達せんには假諦の一は相應せず。何となれは前にも云へる如く假諦は立法を作用とすれは斷惑の破情門と予盾すれはなり。故に假諦の立法門によりては教理行果の四法（此四を建立する一教法と云）を建立すること能はさるなり。さて空諦に依て藏通二教と立つる所以は。凡そ諸法を空と觀するに就て拆空と躰空との二樣あり。拆空とは五蘊を分拆して人なしと見る如く。諸法を分拆して空ならしむる者なり。是れ三藏教の教る所にして。小乘教の中に說く所の眞理といふは此拆空に極まれるなり。又躰空とは之れを分拆するを要せず。直に法の躰を押へて幻の如く夢の如く是れ空なりと觀するにて。金剛經の如夢幻泡影。如露亦如電。の喩の如きは此の躰空を教へしなり。是れ即ち通教にて。此躰空の中には自ら中道の理を含めは（躰そのまゝか躰なりとは自ら空そのまゝか躰なりとは眞空妙有二者一如にして中道なりと知らるゝ也）之を不但空とも含中空ともいふなり。不但空とは拆空の如く但空にあらさるをいひ。（諸法を分拆して但空に躰せしむれは但空といふ）含中空とは中道を含む空なるをいふなり。如此空理の中に中道を含めは鈍根の者は空理を了り

て三藏教の悟りに同ずれ共。利根の者は其中道を看破して別圓二教の悟りに同ず。即ち一教前後に通ずれは通教とはいふなり。次に中諦に就て別圓二教を立つる所以は。中觀に亦但中不但中の二樣あり。但中とは三觀次第して空假の外に中を認るをいふ。是れ中は只中にして空にも假にもあらされは但中の觀と稱し。別教にて教る所なり。當教は此の如く其眞理とする所隔歷差別して融會する所なけれは別教といふなり。次に不但中とは前に詳論せし如く三諦融即して一異不可得なれは。別教の如く但中にあらすとて不但中といふ。是れ即ち圓教にて如此圓融無礙の理を教ゆれは圓教とはいふなり。即ち左圖の如し。

一心三觀
- 空觀……藏教
- 假觀……通教
- 中觀……立法門なれは教法を構成せす
  - 拆空觀……藏教
  - 躰空觀……通教
  - 但中……別教
  - 不但中……圓教

明かに知りぬ。四教は三觀の中に收まり。三觀は一心に飯す。一心の外には何等の法なき

ことを。さて此の如く三諦は至極の觀法にして五時八教を生出するのみならず。本迹二門の開會一念三千の互具に至るまで。凡ろ一宗の要義は盡く此中に蘊在するものなるを。分明に之を說破せしは中論四句の偈にて。此一偈こそ實に一宗の主腦骨目なれ。之に就て宋の竹庵禪師は面白き一絕を提唱されたり。

中論因緣所生法　一句道盡無剩語
我說即是空假中　朱簾暮捲西山雨

此詩は能く三諦圓融の極意を穿ちたる者なるを。大抵の人は解し誤まるなり。今靈空和尙の和語雜錄中に記する意に依て解せば。中論の四句の中第一句の因緣所生法といふか最も肝要にて。此一句に三諦を言ひ盡くして更に剩語なしとなり。其故は因緣所生法とは一面よりは空諦を說明せし如くなれども。更に一面より之を看れば假諦とも證明せしなり。何となれば因緣所生の故に諸法は歷然として顯現すればなり。されば昔し印度に在りて護法淸辨の二論師の有空の諍をなせし時。淸辨論師の立量して。

有爲法は空なるへし緣生の故に喩へは幻の如し

といへば護法論師よりは

有爲は不空なるへし緣生の故に喩へは幻の如し

といふへしといふ。(三論玄義鈔大)以て因緣生の一句は空をも有をも成立する義あるを知るへし。此二含具すとせは中諦の存すること更にも言はず。明らかに知りぬ。因緣所生法の五字一句にて空假中三諦の妙現を言ひ盡くし更に剩餘なきことを。されは我說即是空亦爲是假名。亦是中道義の三句は只風景を添ふまでに言ひしのみとの意にて。滕王閣の詩を引きしなり。彼の詩に云く。畫棟朝飛南浦雲。朱簾暮捲西山雨。と閣至て高けれは畫棟朝々南浦の雲を飛ひ來らしめ。暮に垂として朱簾を捲き上くれは西山の雨は景色殊に新奇也と。是れ共に滕王閣上の氣象風物を形容せしのみ。されは我說即是空等といふも只是因緣所生の閣の上の風物を詠せしのみとなん。

目錄

常不輕品第二十　初頁
神力品第二十一　二十六頁
囑累品第二十二　四十二頁
藥王品第二十三　五十頁
妙音品第二十四　八十三頁

妙法蓮華經講義

織田得能講述

○常不輕菩薩品第二十

▲菩薩比丘とは内心は菩薩にて外相は比丘なり

妙法蓮華經卷第七

妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十

流通分の中弘經の功德深きことを明らして流通を勸むるに三段ある中。此は第三段法華を信する者と法華を毀る者との罪福を引て證となし。以て流通を勸むるなり。(前卷八十頁を見よ)常不輕品と號するとは常不輕菩薩の因緣を引きて之を明らせはなり。

身に不輕の行を立て。口に不輕の教を演ふれは人之を字して不輕といふ。法華論に此菩薩知衆生有佛性。不敢輕之。といへり釋尊昔し威音王佛の世に出て丶菩薩比丘となり。常不輕と名く。常に四衆を敬禮して輕慢せず。汝等皆菩薩の道を勤めて佛となるへしとて禮拜讃嘆せり。然るに彼の上慢無智の徒は此理を知らす。反て菩薩を罵詈打擲すれとも少も瞋りを起さ

す。遠く走りて猶高聲に我不敢輕汝等。皆當作佛。と唱へて之を禮す。かくて此菩薩虛空の中に於て威音王佛の前きに說き玉ふ法華經の偈をさゝ。盡く受持して六根清淨の功德を得。其後廣く人の爲に說き玉へり。又かの增上慢の四衆の人は此菩薩を輕賤せし因緣によりて二百億劫が間三寶の名を聞かず。千劫かはゞ阿鼻地獄に落つと雖も其罪終りて復た不輕菩薩に逢ひ。其所說の法を信受せることを說けるなり。人皆佛性を具へ必ず作佛すへき旨を聞きし故に。其緣空しからず。今釋尊(即ち昔の不輕菩薩)に逢て悟りを得。信毀の罪福照々として疑ふへからざるを證する也。義疏に云く。此經の始終に宣持の人の三世の功德を得ることを明かせり。分別功德品の初に十二種の利益を明かす。是れ即ち經を聞て道を悟るにて現世の功德なり。分別功德品の末より法師功德品に至るまでは經の能く未來の衆生の功德を生することを嘆す。今此一品は經の能く過去世の衆生の功德を生することを歎す。此皆佛の在世に就て此三世を分つなり。經力多けれども三世の利益に出てされはなり。又近く法師品を證するか故に來る。上には持

▲本生とは佛の經歷を本生といふ

經には六根清淨を得ると說けども未た其事あらす。今は釋迦の本生を引て親く自ら證驗す。證驗とは正しく佛(威音)の滅後に經を持する人(即ち釋迦)の六根淨を得しことと證して。以て未來の衆生(即ち釋迦佛の滅後)を奬勵して經を持せしめんとなり。又上には六根淨の果を明かす。今は六根淨の因を敘ふ。六根淨を得んと欲せは當に不輕菩薩の如く一心に諸の打罵を忍んて物の爲に弘經をへし。必そ現身に於て六根淨を得へしとなり。又衆生に悉く佛性ありと說きて一乘の義を成せんと欲するの故に此品を說く。一切衆生は但佛性のみありて餘の性あることなし。故に唯一乘のみありて餘の乘なきを知るなり。前の方便には一毫の善たも皆佛道を成そを明かす。(第一卷百三十七頁已下)今此品には正しく惡人の佛性ある義を辨す(不輕菩薩を打罵せる者等は是れ惡人なり)。則ち知りぬ一切の心ある者は並に佛性ありて皆成佛すと。又上より以來授記の義を明かすこと未た盡きす。上には但佛の授記を明かして未た菩薩の授記を明かさそ。則ち能授の人盡きす。上には但善人に記を授けて未た惡人に記を授けす則ち所授の人未た盡きす。上には但現在に授記して

未た佛の滅後に亦た授記を得ることを明かさず則ち時節未た盡きず。今は此三種の義を盡さんと欲するか故に此品を說くなり（不輕菩薩人に向て汝等皆行二菩薩道一當レ得レ作レ佛といふ是れ授記ふり此授記に三義あることを思ふて知るへし）さて此品の意を

新後撰　草の庵柴のあみ戸の住ねさてわゐぬは月の光なりけり　前大僧正道照

續後拾　各枯の梢はなにゐあたならん枝にそこもる花も紅葉も　道遙院實隆

○第一段信毀の罪福

雪玉集　塵の身を思ふにすてん輕からぬ理を知る人もある世に

爾時佛告得大勢菩薩摩訶薩汝今當知若比丘比丘尼優婆塞優婆夷持法華經者若有惡口罵言誹謗獲大罪報如前所說

此品の中長行と偈頌との二段あり。長行の中三大段に分かれ。第一段は前品所說の罪福を雙指し。第二段は今品の信毀を雙開し。第三段は信毀の果報を雙明す。初の前品の罪福を雙指する中二節あり。初は罪を指し。後は福

を指す。今は初なり。

（字義）得大勢菩薩とは義疏に云く。即ち是れ常不輕か大忍力を得て打罵の爲に摧かれさることを顯して得大勢を以て對告とし。以て持經の人として其行を學はしむるなりと。○如前所說とは譬喩品の末を指すなり（第二卷八十一頁）

（通解）若し吾か四衆の弟子にして法華經を受持する者あらんに若し人あり惡口を以て罵詈し誹謗することあらは。大罪報を得んことは前の譬喩品の末等に說きし如しとなり。

其所得功德如向所說眼耳鼻舌身意清淨

此は第二節福を指すなり。

（通解）其持經の人の功德は亦先に法師功德品の中に（第六卷百廿一頁以下）說きし如く六根清淨の福報を得へしとなり。▲長行三大段の中第一大段前品の罪福を雙指し終る。

○第二段信毀を雙開す

得大勢乃往古昔過無量無邊不可思議阿僧祇劫

▲本本とは十二部經の中の本生に當り。本事とは即ち十二部の隨一なり。第一卷百六十頁を看よ。

己下は第二大段今品の信毀を雙開するなり。此中二段あり。初は事本を明かし後は本事を明かす。通して往昔の威音王佛を擧げて不輕菩薩の本となを名つけて事本となし中に於て別して最初の威音王佛の時の不輕菩薩の事を說くを名けて本事と云。初の事本を明かす中に七節あり。第一節は時節なり。今の文是なり。○乃往古昔とは乃ち往きにし昔をいふ。

有佛名威音王如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。

此は第二節名號なり。

劫名離衰。國名大成。

此は第三節劫國なり。

其威音王佛。於彼世中。爲天人阿修羅。說法。爲求聲聞者。說應四諦法。度生老病死。究竟涅槃。爲求辟支佛者。說應十二因緣法。爲諸菩薩。因阿耨多羅三藐三菩提。說應六波羅密法。究竟佛慧。

此は第四節說法なり。

○大乘小乘の區別

(通解)威音王佛が在世中に於て、天人阿修羅の三善道の者に爲に法を說けり。其說法には種種ありて聲聞を求むる者の爲には其に相應せる四諦の法を說て生老病死の苦海を渡りて涅槃の果を究竟せしめ。又緣覺を求むる者の爲には其に相應せる十二因緣の法を說いて同しく涅槃果を究竟せしめ。又諸の菩薩阿耨菩提を因とする者の爲には其に相應せる六度の法を說いて一切種智を究竟せしむとなり。

(注意)此處の說相序品に日月燈明佛の說法を敍ふると同じ(第一卷七十四頁)參考すへし。又二乘には究竟涅槃といひ。菩薩には究竟佛惠といふ。是れ大小乘究竟の差別なりと知るへし。

得大勢。是威音王佛壽。四十萬億那由佗恒河沙劫。

此は第五節壽命なり。

正法住世劫數。如一閻浮提微塵。像法住世劫數。如四天下微塵。其佛饒益衆生已。然後滅度。

此は第六節正像なり。○四天下とは即ち四大洲なり。

正法像法滅盡之後於此國土復有佛出亦號威音王如來應供正徧知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊如是次第有二萬億佛皆同一號

此は第七節二万億佛同一名號なり

最初威音王如來既已滅度正法滅後於像法中

以下は第二に本事を明かすなり此中三段あり初は時節を示し次は兩名と雙標し後は得失を雙明す今は初の時節なり

增上慢比丘有大勢力爾時有一菩薩比丘名常不輕

此は第二に兩名を雙標するなり兩名とは增上慢の比丘と常不輕菩薩となり一は法華の毀者にして一は法華の信者なり○增上慢とは序品の中に解せり○菩薩比丘とは大乘の菩薩にして小乘の比丘の儀相を表そるなり

得大勢以何因緣名常不輕是比丘凡有所見若比丘比丘尼優婆塞優婆夷皆悉禮拜讚嘆而作是言我深敬汝等不敢輕慢所

○二十四字の記別

以者何汝等皆行菩薩道當得作佛而是比丘不專讀誦經典但行禮拜乃至遠見四衆亦復故往禮拜讚歎而作是言我不敢輕於汝等汝等皆當作佛故

以下は第三に得失を雙明するなり即ち信毀の得失なり此中二節あり初は信者に就て得を論し後は毀者に就て失を明らす今は初なり

(字義)禮拜讚嘆とは義疏に云く此中三業を以て經を弘むる也禮拜とは身業の禮拜なり讚嘆とは口業の讚嘆なり身口既に敬嘆あれは必す意地と經るか故に意業あり是れ三業を具足して法華經を弘るなり然る所以は一切衆生皆佛性あるを以ての故に是れ當來の佛なり今は當來の佛を敬せんと欲するか故に之を禮拜するなり口に嘆することも亦然り皆佛性ありて當に成佛を得へきを以ての故に當來の佛を嘆するなり律に云く比丘は俗人を禮せすと今四衆を禮する者は大小乘の法異なるか故なり涅槃經に云ふか如し有知法者若老若少皆應恭敬と○我深敬汝等とは己下の五句を古來二十四字の記別と稱せり義疏に云く深敬といふは衆生

に正因佛性あることを顯はすなり。既に佛性あり即ち是れ當來の佛なれは深敬といふ。行菩薩道とは緣因佛性を明かすなり。佛性ありと雖も要す修行を須ゐて見ることを得へけれはなり。(案するに此中丁因佛性を兼ぬ)當得作佛とは本と佛性あり今復因を行すれは緣正二因の義を具ふるの故に成佛を得る也と。(三因佛性の義は第一卷百七十四頁に辯せり)又文句には此文を四一に約して解す。名常不輕といふは是れ人一なり。凡有所見とは是れ理一なり。皆悉禮拜とは是れ行一なり。而作是言とは是れ教一なり。是れ即ち開權顯實の四一なりと。

(通解)何の故にか常不輕と名くとならは。是の比丘凡ろ相遇ふ者あれは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を擇はす。皆悉く禮拜し讃嘆して曰く。我深敬汝等不敢輕慢所以者何。汝等皆行菩薩道。當得作佛と。而この四衆の中に此比丘は法華經を讀誦することを專にせすして但禮拜のみを行ふ。乃至遠く四部の衆を見ても亦故さらに往て上の如く禮拜讃嘆せりとなり。

(問答)義疏に問ふ。何か故そ此菩薩敬嘆の事を行して一乘を弘むるや。答ふ。不輕の弘經に凡ろ二種あり。一には密說二には顯說なり。敬嘆の事を行ふ

るは即ち是れ密に一乘を說くなり。後に六根淨を得て神通智惠を具し四衆の中に於て法を說くは(後に出つ)是れ顯に一乘を說くなり。密を前にし顯と後にする所以は末世の時には增上慢の人は惡は强く善は弱けれは彼等に向て頗に說く可らさるか故に。初には髣髴に之を說き。髣髴の中に但作佛を明かすなり。作佛を明かすとは是れ顯實の義なり。未た二乘を破斥することを得さるの故に開權をなさゝるなり。

四衆之中。有生瞋恚心不淨者。惡口罵詈言。是無智比丘。從何所來。自言我不輕汝。而與我等授記當得作佛。我等不用如是虛妄授記。如此經歷多年。常被罵詈。不生瞋恚。常作此言。汝當作佛。說此語時。衆人或以杖木瓦石。而打擲之。避走遠住。猶高聲唱言。我不敢輕於汝等。汝等皆當作佛。以其常作是語故。增上慢比丘比丘尼。優婆塞優婆夷。號之爲常不輕。

此は第二節變者の失を明かすなり。

(通解)然るに四衆の中に瞋恚ありて心の不淨なる者惡口罵詈して曰く。此

無智の比丘何くより來りて自ら我れ汝を輕しめすと言て我等の爲に當得作佛と授記するや我等は是の如きの虛妄の授記を用ゐすと此の如く多年を歷て常に罵詈せらるれども瞋恚を生ずることなくして常に汝等作佛と曰ふ衆人或は杖木瓦石を以て打擲すれば逃け走りて遠く居り猶前の如く禮拜讚嘆して高聲に唱ふ其比丘常に此說を作すの故に增上慢の四部の弟子をも呼んで常不輕と名くとなり是は常不輕の名は惡比丘よりの指斥せし稱號なり

(釋意)義疏に云く須菩提は他の謗を起さず今は他の瞋を生ずることは亦是大小乘の異なり宜く時に適ふて勸むへきなり又文句記に云く增上慢の人は本より善因なし故に不輕菩薩を罵詈打擲せすと雖も必す墮獄すへし然に今謗法の罪にに依て一旦は墮獄すれとも聞法の緣によりて終には成佛すへきの故なり人の地に倒れて還て地に從りて起つの如しと

(問答)釋迦は出世して踟躕して說のさるに(四十餘年始て之を說く)常不輕は一見して造次に之を言ふは何ろや答ふ釋迦の所化の者は昔のつて種を下たし既に宿善を具ふか故に小乘を以て之を保護して唐突に大乘を說のす不輕菩薩の所化は本來未た善あらされば爲に種を下さんとして故さらに大法を以て强て之を毒するなり而打擲之避走遠住といふ意を

金葉　ありかたき法をひろめし聖にろうちみし人も道ひかれぬる　覺雅法師

玉葉　幾飯りくるしき道を過し來てむのしの杖になをかゝりけん　寂蓮法師

詠藻　そのゝみのあらきたふさの杖にこそ終にかゝりて導れけれ　皇太后宮大夫俊成

拾玉　うてはにくにけてもおかん心より人を輕めぬ名をそ留むる　慈鎭和尙

法文　あはれなり憂もつらきもしりなからたへ忍ひける人の心は　後嵯峨御製

▲長行三大段の中第二段今品の信毀を雙開し終る(已五頁下)

▲之を毒すとは涅槃經に出る毒鼓の譬なり。經に云く。譬へは人ありて雜毒の藥を以て用て大なる鼓に塗り。衆人の中に於て擊て聲を發せしむ。心に聞くことを欲することを無しと雖も之を聞て皆死するが如く。是の大乘典大涅槃經も亦復是の如し。在在處處に諸の衆生聲を聞くことある者は所有貪欲瞋恚愚痴悉く皆滅盡す云云。

○第三段信毀の果報

是比丘臨欲終時於虛空中具聞威音王佛先所說法華經二十千萬億偈悉能受持即得如上眼根清淨耳鼻舌身意根清淨得是六根清淨已更增壽命二百萬億那由他歲廣爲人說是法華經於時增上慢四衆比丘比丘尼優婆塞優婆夷輕賤是人爲作不輕名者見其得大神通力樂說辯力大善寂力聞其所說皆信伏隨從是菩薩復化千萬億衆令住阿耨多羅三藐三菩提命終之後得値二千億佛皆號日月燈明於其法中說是法華經以是因緣復値二千億佛同號雲自在燈王於此諸佛法中受持讀誦爲諸四衆說此經典得是常眼清淨耳鼻舌身意諸根清淨於四衆中說法心無所畏得大勢是常不輕菩薩摩訶薩供養如是若干諸佛恭敬尊重讚歎種諸善根於後復値千萬億佛亦於諸佛法中說是經典功德成就當得作佛

己下は第三大段信毀の果報を雙明するなり此中二段あり初は信者の報を明かし後は毀者の報を明かす信者の報をかす中に二段あり初は正し

信者の果報を明かし後は古今を結會す今は初なり此の中義疏には八信の果を得るとなす法華經二十千万億偈悉能受持とは第一に聞法能持の果なり即得如上眼根清淨の下は第二に根淨の果なり得是六根の下は第二に延壽の果なり是の大士は法の無生滅を躰る寧ろ心に存亡あらんや但物の爲に經を弘めんとす故に長命あるを示すのみ於時增上慢の下は第四に惡人信伏の果なり是菩薩復化の下は第五に善人住道の果なり命終之後の下は第六に捨身値佛の果なり於此諸佛法中の下は第七に六根常淨無所畏の果なり蓋し常不輕の八果を得ること位に就かは三階あり初に根淨を得るとは謂く內凡三賢の果なり今此に復た根淨を得るとは即ち第二に初地已上に於て無生忍を得て一切の法は本來寂滅なりと了悟するが故に六根常に淨きなり後に功德成就當得作佛とは即ち第三に佛地の果なり而して未だ根淨を得さるの前は則ち十信の位なるが故に此人五十二の賢聖の位を具ふなり次に得大勢是常不輕の下は第八に常得作佛の果なり さて八果あれども三報を出てす初の四は是れ現報なり

▲內凡三賢とは十住十行十回向の三十位を三賢と稱し十信を外凡と稱するに對して之を內凡といふ

▲無生忍とは圓教の初住又は別教の初地にて無生法忍の悟を開くと第六卷百二十八頁に辯せり

▲五十二位とは十信十住十行十回向十地等覺妙覺なり此處淺疎の

說は即ち天台別教の義也。
▲生報後報とは未來世の受報に就て二を分ち。今生より直に次生に受るを生報といひ。次生以下の受報を總て後報といふ。

次の一は是れ生報なり。後の三は是れ後報なり。

(字義)二十千万億偈とは印度古代の數法の中に千位已上は一十百千と十倍毎に數目を換ふれとも千位已上は万億兆と百倍毎に數目を變する法あり。依て聖經の中に八万の法藏と云ふへきを八十千の法藏といへり。今も此數法に依りて二十千といふ即ち東土の二万なり。下に万の語あるを以て故さらに重言を避けて二万の數を二十千万といふなり。○如上とは法師功德品をさす○大神通力とは身に神通力を示現するなり○樂說辯力とは即ち四無礙辯なり。是れ口業に法を說くなり。○大寂力とは意に禪定を得るなり三業の功德此に成滿す○常眼清淨とは父母所生の平常の眼根にて清淨の德を具ふるをいふ。法師功德品の中に耳根清淨を明かして父母所生清淨常耳といふ如し(第六卷百二十八頁)○心無所畏とは四無畏を得れはなり。第一卷(百二)に辯せり。

得大勢。於意云何。爾時常不輕菩薩。豈異人乎。則我身是。

已下は第二に古今を結會するなり。此中二節あり。初は正しく結會し後は

信を擧けて順を勸む。今は初なり。

若我於宿世不受持讀誦此經爲佗人說者不能疾得阿耨多羅三藐三菩提我於先佛所受持讀誦此經爲人說故疾得阿耨多羅三藐三菩提。

此は第二節信を擧けて順を勸むるなり。釋尊か信受を擧けて餘人の之に隨順せんことを勸むるをいふ。

得大勢。彼時四衆比丘比丘尼。優婆塞優婆夷。以瞋恚意輕賤我故。二百億劫。常不値佛。不聞法。不見僧。千劫於阿鼻地獄受大苦惱畢是罪已。復遇常不輕菩薩教化阿耨多羅三藐三菩提。

已下は第二に毀者の報を明すなり。此中二段あり。初は正しく毀者の報を明す。後は古今を結會す。今は初なり。

(釋意)此は毀者の善惡の両果を得ることを明すなり。誘るの故に惡道に墮し。佛性の名を聞きし毒鼓の力の故に善の果報を獲。此れ所謂誘るも亦種を成す也。是れ即ち人の地に仆て還て地に依て起るか如き也。(毒鼓經に出る喩)

リ)されは謗毀に因て尚果を獲。況んや復毀謗を生せすして能く讃嘆し隨喜せん者をや。

(問答)義疏に問ふ。經には諸佛菩薩は衆生の爲に煩惱の因緣と作らすといへり。云何ろ禮拜讃嘆して其惡因を生し後に其をして苦果を得せしむるや。答ふ。二種の義あり。一には增上慢の四衆は惡因を成就して必ず地獄に墮すへし。今禮拜讃嘆して地獄を出るの因。佛を得るの緣を作す。是れ彼の惡を生するにはあらざるなり。其の故は常不輕未た禮せざる時より已に是れ增上慢なり。爾の時已に小を執して大を信せす。是れ方等大乘を謗する人にして墮獄に定まれはなり。二には世の良醫の病を治そるに二あるか如し。一には善藥を與へて即ち病差ゆ。二には苦藥を與ふ。初は悅はすと雖も後には安樂なり。諸佛も亦然り。自ら初に妙法を說いて即ち了悟せしむるあり。自ら初に法を說くの爲に其謗心を增して地獄に墮せしむるも後に此善に因て必す解脫を得るあり。問ふ。譬喩品に法華を謗する人は阿鼻獄に入て無數劫を經と云。今何か故ろ但千劫なるや。答ふ。四衆若し直爾

に謗を起さは即ち彼の說の如けん。今は不輕の强て其の爲めに說くを聞くの故に。謗毀すとも聽法の力を以て苦を受くること輕く。及ひ後に信解を得るなり。問ふ。不輕は是れ實行とやせん是れ權行とやせん。答ふ。既に是れ壽量中の迹化なり。即ち知りぬ是れ權行なるを。

得大勢。於汝意云何。爾時四衆常輕是菩薩者。豈異人乎。今此會中跋陀婆羅等五百菩薩。師子月等五百比丘。尼思佛等五百優婆塞。皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉者是。

已下は第二に古今を結會するなり。此中二節あり。初は正しく古今を結會し。後は逆を擧けて以て順を勸め持を勸めて以て毀を遮す。今は初なり。

(字義)跋陀婆羅とは大論に譯して善守と云ふ。○尼思佛とは羅什譯の千佛因緣經に思佛千優婆塞等得無生忍とあり。尼を略せしなり。尼思佛とは比丘の名なり。尼思檀尼犍子等といふ類なり。此の處出家の二衆には但比丘を擧け。在家の二衆には但優婆塞を擧けしなり。

得大勢。當知是法華經。大饒益諸菩薩摩訶薩。能令至於阿耨多

羅三藐三菩提。是故諸菩薩摩訶薩。於如來滅後。常應受持讀誦
解說書寫是經。

此は第二節持を勸めて毀を遮する也。經に大力あり。終に大果を感ず。務て當に五種の行を勤修せへしとなり。書寫是經の意を

般富門院太輔人丸か墓尋て佛事と行ふとて人々に釋教の歌よませ侍りけるに　　櫃中納言長方

玉葉　かきつめし言葉の數の露ことに法の海には今日や入らん
母の身まうりて七日にあたりける日法花經うき供養し侍るとて　　後一條入道前關白太政大臣女

同　子と思ふ心の闇を照すとて今日うゝけつる法のともし火　　從三位氏久

後千載　ひかし思ふ御法の花の露ことに涙やろへてかき流すらん

花園院七年の御遠忌に徽安門院より法華經の品文を人々によませられて經の料紙になされたりけるに彼御經を見奉りて女房のもとに申おくりける　　入道前太政大臣

新千載　なゝとせのつき日にみうく蓮葉の露の白玉ひうりそふらし
後法性寺入道前關白太政大臣家百首歌に五種行書寫の心を　　正三位季經

新續古　のきなうす法の水ころ嬉しけれ心のあうをすゝくと思へは　　般富門院

夫水もゝ草にうく水くきの跡はみなひとつみのりの海に入らし

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

過去有佛　號威音王　神智無量。將導一切　天人龍神
所共供養。

已下は第二に偈頌なり。此中二段あり。初は但信毀の因果と頌し後は勸持

を頌す。信毀の因果を頌する中二段あり。初は總じて事本を頌し後は本事を頌す。今は初なり。○神智無量とは神通及び智惠なり。

是佛滅後　法欲盡時　有一菩薩　名常不輕　時諸四衆
計著於法

己下第二に本事を頌するなり。此中三段あり。初は二人を雙標し次は得失を頌し後は信毀の果を擧けて古今を結會す。今は初なり。

(字義)計著於法とは法を種種に計度して之に執着するなり。文句に云く。著法といふは蓋し是法不可示言辭相寂滅なり(方便品の文)若し定めて是れ有なりと謂はゝ即ち是れ法に着するなり。乃至定めて非有非無なりと謂ふも亦著法と名く。故に佛藏經第三に云く。刀輪を以て閻浮提の人を害するも其失尚少し。有所得の心を以て大乘を說く者は其罪彼に過きたりと。又大論に云く。有と執して無と諍ひ。乃至非有非無と執して有無と諍ふ者は牛皮龍繩の共に患を免れざるが如しと。(大論三十七及六十五取意の文なり)

▲牛皮龍繩とは牛の皮を鉢に繫けて日に向へば彌堅くして鉢を苦しむ。是れ有に着する譬に譬ふ。又龍繩の繩を以て身を縛して水に入れば轉緊くして身を痛む。是れ空に着する失に譬ふなり。

不輕菩薩　往到其所　而語之言　我不輕汝　汝等行道
皆當作佛　諸人聞已　輕毀罵詈　不輕菩薩　能忍受之
其罪畢已　臨命終時　得聞此經　六根清淨　神通力故
增益壽命　復爲諸人　廣說是經　諸著法衆　皆蒙菩薩
教化成就　令住佛道　不輕命終　値無數佛　說是經故
得無量福　漸具功德　疾成佛道

己下は第三に信毀の果報を擧け及び古今を結會するなり。此中二節あり。初は果報後は結會。今は初なり。

(字義)其罪畢已とは常不輕をいふ。四衆輕しめて不輕の名を作し。又は瓦石を以て之を打擲するなど種々凌辱するを能く忍受せしを以てあらゆる罪業之に因て盡きしとなり。金剛經に是人先世罪業應墮惡道以今世人輕賤故先世罪業即得消滅といふに同し。

彼時不輕　則我身是　時四部衆　著法之者　聞不輕言

汝當作佛　以是因緣　値無數佛　此會菩薩　五百之衆
幷及四部　清信士女　今於我前　聽法者是　我於前世
勸是諸人　聽受斯經　第一之法　開示教人　令住涅槃
世世受持　如是經典

此は第二節結會なり。

（字義）開示教人令住涅槃とは義疏に云く。恒に諸法從本來常自寂滅相（方便品の文）と識らしむるを之を名けて法華を以て人を教へ涅槃を得せしむと爲すと。

（通解）彼の時の不輕比丘は則ち今の我の身是れなり。其時の四部の衆法に著して增上慢なりし者も。不輕比丘の汝當作佛と言ふを聞きし因緣を以ての故に無數の佛に値ひ奉れり。即ち今日此會の中の五百の菩薩衆幷に四部の衆我の前に於て法を聽く者是れなり。我は前世に於て是の諸人を勸めて斯の法華經の第一微妙の法を聽受せしめ。又開說顯示して諸人を教化し大般涅槃を得せしめ自ら生生世世是の妙典を受持せしむとなり。▲

頌文の中第一大段信毀の因果を頌し終る（頌の初を看よ）

億億萬劫　至不可議　時乃得聞　是法華經，
至不可議　諸佛世尊　時說是經　億億萬劫，
聞如是經　勿生疑惑　是故行者　於佛滅後，
疾成佛道　應當一心　廣說此經　世世値佛，

此は頌文の中第二大段勸持を頌するなり。○至不可議とは不可思議の劫數をいふ。

（釋意）徐註に云く。所謂億生にも際ふこと罕に浩劫にも聞くこと難し。或は能く受持せは決定して成佛せん。金口の委喩なり。信順して之を勉めさるへけんや。此品は蓋し是れ如來過去劫の中に於て佛の出世に値へり。威音王と號しき。彼の佛の所に於て菩薩の行を修し常不輕と號そ。諸の四衆の爲に强き毒種を下たせり。而して彼の四衆根器眇劣にして大化に堪えす。遂に瓦石を以て之を打擲す。坐して罪咎に乘して泥犂に沈墜す。各相謂て言く。我等今日何の因緣を以ての此處に墮つと。復各相謂らく前世愚鈍に

○如來神力品第二十一

して知る所なく、不輕菩薩を罵詈打擲せしに由ると、既にして善を興し惡を革めて永く三途を離れ即ち勝果を獲、槁木の春に生し寒灰の再び燼るに譬ふ、此經勝妙の力用其れ是の若し云云。

妙法蓮華經如來神力品第二十

凡そ本經の流通分に十一品半ある中如上の三品半は功德流通と明かし終るを以て、已下の八品は付囑流通を明かすなり。（第六卷八十頁を看よ）付囑流通とは如來の付囑に依て經典の流通を勸むるをいふ、此中三段に分かれて、初の二品は正しく付囑流通を明かし、次の藥王等の五品は化他に就て流通を勸むるなり、其の初の二品の中、神力品は菩薩の弘經を明かし、次の囑累品は如來の付囑を明かす、即ち此品は菩薩の佛の敎命を受けて弘經することを明かすなり。（但し此は文中の初段に就て言ふなり）に三段ある

品の得名を云はゝ深法を付囑せんか爲に十種の神力を現し云へはなり。（此は第二段の所明ふ）如來の義は上の壽量品に悉く解せり、神力とは文句の第十一

○第一段菩薩の受命

に神名不測、力名幹用、不測則天然之躰深、幹用則轉變之力大といへり、天然の躰とは法（理）報（智）二身なり、內に理智相應して（即ち法報二身）不二なるを以て外に能く變通を作すを神力といふなり、當品の第二段に釋迦並に分身の諸佛一時に十種の力を現して現當二世に各敎行人理の四一あることを表はすか故に如來神力品と題するなり。

爾時千世界微塵等菩薩摩訶薩從地涌出者皆於佛前一心合掌瞻仰尊顏

一品の中長行と偈頌とあり、長行の中三大段あり、初は菩薩命を受るを明かし、次は如來神力を現するを明かし、後は要を結して持を勸む、初の菩薩命を受る中に二節あり、此は第一節經家敬儀を敘するなり、上の品に如來信毀に罪福ある證を引て諸菩薩の弘經を勸め玉ふか故に今其の命を受くるなり。

而白佛言世尊我等於佛滅後世尊分身所在國土滅度之處當廣說此經所以者何我等亦自欲得是眞淨大法受持讀誦解說

○眞淨大法

○第二段如來の神力

書寫而供養之

此は第二節菩薩誓を發して經を弘むることを明かすなり。

（字義眞淨大法とは義疏に云く。二乘の僞に對するか故に稱して眞と爲し。累として盡きさることなし。所以に淨と稱す。德として備はらさるなし。之を目して大と爲すと。妙玄に云く。眞淨大法とは是れ眞是れ淨。略して二德を擧く。我樂知るへしと。（此は淨樂我常の涅槃の四德に約して解す）▲第一大段菩薩の受命終る

爾時世尊。於文殊師利等無量百千萬億舊住娑婆世界菩薩摩訶薩。及諸比丘比丘尼。優婆塞優婆夷。天龍夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等。一切衆前。

已下は第二大段如來神力を現するなり。此中二段あり。初は所對の衆を擧け後は正しく神力を現す。今は初なり。

現大神力。出廣長舌。上至梵世。

已下正しく神力を現するに十種あり。此は第一に舌相を吐くなり。○梵世とは初禪天なり。

▲三藏佛とは小乘の化身佛をいふ

▲理一とは四一の隨一なり

（釋意）此は第一の神力なり。長舌は不妄語の報なり。（大論に委し）故に今經の迹門の開權顯實。本門の開近顯遠。中間今日三世の利益眞實にして虛ならさることを顯はして廣長舌を出たすなり。大論卷八に福德人の舌は鼻に至り。三藏佛の舌は髮際に至ると。今梵天に至ることは相いよ〳〵勝るゝと以て說いよ〳〵信すへきことを顯はすなり。又義疏に云く。舌相を現することは二權二實を說て虛妄あることなしと表するなり。法華論に云く。出廣長舌者。令憶念故。と即ち是れ佛の所說の不虛を憶念せしむるなり。

一切毛孔。放於無量無數色光。皆悉徧照十方世界。衆寶樹下師子座上諸佛。亦復如是。出廣長舌。放無量光。釋迦牟尼佛。及寶樹下諸佛。現神力時。滿百千歲。

此は第二に通身より光を放つなり。

（釋意）此は第二の神力なり。通身の毛孔より光を放ちて十方に周遍し處として朗かならさることなし。本迹二門の理一盡く究竟せることを表するなり。但し序品の中に白毫光を放ちて東の一方を照らすことは。七方便の

人初て一理を見ることを表する耳。今本門既に竟て一切の光を放ちて一切の土を照すは、能く初因をして等覺を終へ佛慧を究竟せしむればなり。義疏に云く、光を放つことは此經能く惑を滅して解を生ずることを、光の暗を除き物を顯はすか如しと表するなり。又彼此をして相見せしめんと欲するなり。問ふ、前の二處には（第一卷四十二頁第四卷百一頁）但一光を放つ。今何が故ぞ一切の毛孔の光を放ちて遍く十方を照すや。答ふ、上の二處には唯有一乘と及び法身無二とを表せん爲の故に但一光を放つ。今は此經を流通して二世の衆生をして皆信持そることを得せしめんと欲するが故に一切の光と放つなり。次に分身の佛の亦二瑞を現ずるとは、同一法身にして皆是應迹なりと顯はさんと欲するか故なり。又一會の衆多佛の神力を現するを見れば則ち信敬益深からん。又滿百千歳とは、一時の神力未た希有とするに足らす百千歳に滿てゝ方に是れ奇特なり。又是れ法の久住を顯はすか故に神力の時長きなりと。

然後還攝舌相一時謦欬。

此は第三に謦欬なり。

（釋意）此は第三の神力なり。謦欬はセキバラヒなり。將に語らんとするの狀なり。亦是通暢の相なり。本迹二門の教通暢することを表す。即ち教一と表するなり。四十餘年眞實を隱秘せり。今仲暢することを得て遺滯あることなし。是れ我が出世の大事通暢す。故に謦欬するなり。又此法を以て諸菩薩に付して後世の衆生を導利せしめんと欲し。將に此事を語らんとす。其の故に謦欬するなり。義疏に問ふ、何か故ろ舌相を攝めて而も光を收めさるや。答ふ、說法の事竟ることを表するの故に舌相を攝む。十方をして通徹して彼此相見せしめんと欲するか故に光を收めさるなりと。

俱共彈指。

此は第四に彈指なり。

（釋意）此は第四の神力なり。天竺の國俗にて歡喜そる時彈指すといふ。今は七方便の人の同く圓道に入ることを隨喜し。圓道を得て智を增し生を損することを隨喜し。諸菩薩の眞淨の大法を受持することを隨喜し。後世に

無上の實を獲んことを隨喜するなり。本迹二門の入實を表す。即ち人一なり。されは此一彈指堅には三世に徹り横には十方に亘る者なり。義疏に云く。彈指は衆生を覺悟して修行せしむることを表すと。

是二音聲。徧至十方諸佛世界。地皆六種震動。

此は第五に地動なり。

(釋意)序品の六種震動は住行向地等妙の六位に無明の惑を動かすことを表す。而して今復六種震動を明らすは是れ一切の人の六根を動らして清淨なる事を得せしむるを表す。即ち行一なり。

其中衆生。天龍。夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等。以佛神力故。皆見此娑婆世界無量無邊百千萬億衆寶樹下師子座上諸佛。及見釋迦牟尼佛共多寶如來在寶塔中坐。師子座。又見無量無邊百千萬億菩薩摩訶薩及諸四衆恭敬圍繞釋迦牟尼佛。既見是已。皆大歡喜得未曾有。

此は第六に普く大會を見るなり。

(釋意)此は第六の神力なり。普く大會を見る事は諸佛の道同きを表す。上の五千の退去と(序品)土田三變に移されたる衆生と(見寶塔品)既に本心を失へると(壽量品)の三類は滅後の得益の人なり。諸の菩薩の弘經に從ふて得道し佛惠に入ることは今の會の如し。是れ即ち未來に一乘の機あることを表するなり。

即時諸天。於虛空中。高聲唱言。過此無量無邊百千萬億阿僧祇世界。有國。名娑婆。是中有佛。名釋迦牟尼。今爲諸菩薩摩訶薩。說大乘經。名妙法蓮華教菩薩法佛所護念。汝等當深心隨喜。亦當禮拜供養釋迦牟尼佛。

此は第七に空中の唱聲なり。

(釋意)此は第七の神力なり。空中の聲言は未來の教一を表するなり。

彼諸衆生。聞虛空中聲已。合掌向娑婆世界。作如是言。南無釋迦牟尼佛。南無釋迦牟尼佛。

此は第八に南無を稱して佛弟子たるを表するなり。

（釋意）此は第八の神力なり。南無此に皈命といふ。弟子として師に皈順する時の詞なり。弟子は即ち一乘の人なり。是れ未來に人。一。あることを表する也。但し南無佛と唱ふる事は常の習なり。何ろ別して一の神力と立るといふに。十方世界の諸の衆生か空中の聲と聞て娑婆世界に向て同時に南無釋迦牟尼佛と唱ふるの最も不思議の事なり。故に一神力を立つるなり。さて佛號を唱ふる事甚深の功德あるは。央崛經に云く。稱佛名字。雖未發心。即是菩薩也。と又觀經に云く。稱佛名故。於念念中。除八十億劫生死之罪。と

以種種華香瓔珞旛蓋及諸嚴身之具珍寶妙物。皆共遙散娑婆世界。所散諸物。從十方來。譬如雲集。變成寶帳。徧覆此間諸佛之上。

此は第九に遙に諸物を散して雲集するなり。

（釋意）先は第九の神力なり。遙に諸物を散するは未來に行。一。あることを表するなり。間ふ。何そ供養を行一となすや。答ふ供養は是れ施にして六度の根本なるの故なり。

○第三段要を結して囑を勸む

○約教の五意

于時十方世界。通達無礙。如一佛土。

此は第十に十方同く一佛土の如きなり。

（釋意）此は第十の神力なり。十方通同して一佛の如しとは理。一。を表するなり。▲長行三大段の中第二大段如來の神力終る。

爾時佛告上行等菩薩大衆。諸佛神力。如是無量無邊不可思議。若我以是神力。於無量無邊百千萬億阿僧祇劫。爲囑累故。說此經功德。猶不能盡。

已下は第三大段要を結んで持を勸むるなり。此中四節あり。此は第一節稱嘆して付囑そるなり。○囑累とは「アツラヘワヅラハス」なり。下の囑累品の題下に詳釋せん。

以要言之。如來一切所有之法。如來一切自在神力。如來一切祕要之藏。如來一切甚深之事。皆於此經。宣示顯說。

此は第二節結要して付囑するなり。

（字義）所有之法とは結要に四句あり。此は一切皆佛法なるをいふ。是れ妙の

▲八自在とは涅槃經に出つ。大論には八神變といふ。第一に一身を以て多身となす。乃至第八に身虛空の如くして存沒宜に隨ふなり。

▲妙玄とは法華玄義の異名なり。

▲五重玄義とは第一卷の初に辨せり。

名を結ひしなり○自在神力とは通達無碍にして八自在を具ふをいふ。是れ妙用を結ひしなり。○秘要之藏とは一切處に遍して皆是實相なるをいふ。是れ妙躰を結ひしなり。○甚深之事とは一乘の因果をいふ。是れ妙宗を結ひしなり。○皆於此經宣示顯說とは一經を總結するに唯是名用躰宗の四に皈するをいふ。

(注意)妙玄に五重玄義を分別するに就て。約行と約教との三種あり。約行の五章は序品の偈の末の我見燈明佛本光瑞如此以是知今佛欲說法華經(是名)今相如本瑞是諸佛方便今佛放光明助發實相義(是辨)諸人今當知合掌一心待佛當雨法雨充足求道者(是宗)諸求三乘人若有疑悔者佛當爲除斷令盡無有餘(是用)といふ四頌を證として。而も教は此四を分別する者なるの故に教を第五に加へて五重の玄義とそるなり。次に約教の五章は今の文に由る。之を約教といふことは凡そ如來の諸教を垂れ玉ふことは一乘教を以て其の本意とす。故に一切の諸法を以て皆名けて妙法となす。是れ即ち經の名なり。次に用を安くことは佛に神力自在あるの故に身口意の三輪に化

▲三密とは如來の三業を三輪とも三密ともいふ。

を設け機に稱へて運爲せり。されは妙法の教を播くことは必す佛の三密の自在力に依るか故に名に次で用を辨するなり。次に躰あることは此の如きの自在神力を以て教を設くることは衆生をして同く諸法實相の理躰に入らしめんの爲なり。故に用に次で躰を安く。次に宗を安くことは宗とは因果にして如來の昔し修因證果し玉ひし所なり。故に亦衆生をして躰を知て修を起さしめんと欲す。故に躰に次で宗を辨す。而して教は此四を辨するか故に第五に安くなり。

是故汝等於如來滅後應當一心受持讀誦解說書寫如說修行所在國土若有受持讀誦解說書寫如說修行若經卷所住之處若於園中若於林中若於樹下若於僧坊若白衣舍若在殿堂若山谷曠野是中皆應起塔供養

此は第三節勸奬して付囑するなり。此經は是れ如來の眞身の舍利なるを以て隨處塔を起して供養するを勸むるなり。

所以者何當知是處即是道場諸佛於此得阿耨多羅三藐三菩

提諸佛於此轉於法輪諸佛於此而般涅槃

此は第四節釋して付囑するなり。

(字義是處とは上の受持讀誦乃至經卷所在の處をいふ。○即是道場とは道場は是れ修因證果の處なれは上の甚深之事(是宗)といふを釋する也。○得三菩提とは此は是れ法身なり。即ち秘要之藏(是眞)といふを釋す。○轉於法輪とは此は是れ般若なり。所有之法(是名)といふを釋す。○般涅槃とは般は入の義なり。此は即ち解脫なり。自在神力(是用)といふを釋す。一切の障礙を解脫して自在なるは即ち涅槃の德なれはなり。

(釋意)阿含經に云く。佛出世。唯四處起塔。生處。得道處。轉法輪處。入涅槃處。とされは今法華經を弘通する處は此四處に相當するを以て須らく塔を起そへしと。上の意を釋成せしなり。此中道場といふは即ち法身の生處なり。餘の三は名同し。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。

諸佛救世者　住於大神通　爲悅衆生故　現無量神力

舌相至梵天　身放無數光　爲求佛道者　現此希有事

諸佛謦欬聲　及彈指之聲　周聞十方國　地皆六種動

以佛滅度後　能持是經故　諸佛皆歡喜　現無量神力

巳下は第二に偈頌なり。此中二段あり。初は十種の神力を頌し。後は勸修を頌す。今は初なり。但し十神力の中に前の五を擧けて後の五を略せり。是れ前の五は此土に親く見る所にして。後の五は他方にて遙に見聞そる所なるか故なり。

囑累是經故　讚美受持者　於無量劫中　猶故不能盡

是人之功德　無邊無有窮　如十方虛空　不可得邊際

巳下は第二に勸修を頌するなり。此中二段あり。初は稱嘆し。後は勸持す。初の稱嘆に凡そ七門あり。此兩偈は第一に功德の無邊を頌するなり。(此分科は義疏に由る)

能持是經者　則爲已見我　亦見多寶佛　及諸分身者

又見我今日　教化諸菩薩

此は第二に諸佛を見るを得るを頌す。

能持是經者　令我及分身　滅度多寶佛　一切皆歡喜
十方現在佛　并過去未來　亦見亦供養　亦令得歡喜

此は第三に諸佛の歡喜を頌す。

諸佛坐道場　所得祕要法　能持是經者　不久亦當得

此は第四に久しからずして成佛すべきを頌す。

能持是經者　於諸法之義　名字及言辭　樂說無窮盡
如風於空中　一切無障礙

此は第五に四無碍辯を得るを頌す。

於如來滅後　知佛所說經　因緣及次第　隨義如實說
如日月光明　能除諸幽冥　斯人行世間　能滅衆生闇
教無量菩薩　畢竟住一乘

此は第七に滅惑生解を頌す。法華經を持する人は此七種の果を得るなり。

○行世間とは世間に遊行するなり。さて如日月光明能除諸幽冥といふと。

蓮上法師

千載日の光月のかけころ照しけるくらき心の闇はれよとて

選子内親王

續後撰　さやかなる月の光の照さすは冥き道にや獨りゆのまし

是故有智者　聞此功德利　於我滅度後　應受持斯經
是人於佛道　決定無有疑。

此は勸修の中の第二段正しく勸持なり。○於佛道決定無有疑とは自ら成佛得道すべしとの決定心を得るをいふ。さては於我滅度後應受持斯經といふを

前大納言忠良

新後撰　あらさらん後の世かけし契ころ頼むにつけて嬉しのりけれ

慈鎮和尚

玉法の花にはとけの種を結ふことうたがふまじと聞ろ嬉しき

○囑累品第二十二

山家集行末の爲にとゝめぬ法ならはなにかわか身に頼みあらまし

妙法蓮華經囑累品第二十一

付囑流通を明かす中に當品は第二に如來の付囑を明かすなり。即ち此品の中に如來の摩頂付囑あり。是れ如來の親たり直に付囑し玉ふ所なれは囑累品と名くるなり。囑は囑託の義にして諸菩薩弘經せよとあつらへ玉ふを云ひ。累は煩累の義にして諸菩薩をわづらはして弘經の爲に苦勞せしめ玉ふをいふなり。

さて諸經の囑累品は多く經末にあり。故に竺法護正法華に當品を經末に置けり。然るに今羅什譯の本に於て神力品の次に安するは如何といふに。嘉祥は義疏の中に數番の義を設けて羅什か妙に經旨を得しことと釋成せり。然に慈恩は玄贊の中に八箇の相違を立て又玄奘の弟子安國寺の利渉の疏には十箇の不可を立て（玄贊に二箇を加ふなり）今經の列次を破せり。之に就て妙樂の文句記には總別各八義を以て一一に之を對破せり。頌はしけれは略しぬ。

○第一段如來付囑

義疏に問ふ。小乘には佛永く無餘涅槃に入りて復物を化せすと言へは付囑を須ゆへし。此經には法身常に存して感あれは斯に應すと明かす。何か故ろ付囑を明かすや。答ふ。三の因緣あり。一には時衆佛慇懃に付囑し玉ふを聞て則ち法を重そる情深くして各宣持せんと欲せん。二には諸の菩薩に付するは即ち其をして自行化他せしむるなり。三には衆生は菩薩に於て重緣あるの故に其をして法を弘め物を化せしむるなり。

爾時釋迦牟尼佛。從法座起。現大神力。以右手摩無量菩薩摩訶薩頂。而作是言。我於無量百千萬億阿僧祇劫。修習是難得阿耨多羅三藐三菩提法。今以付囑汝等。汝等應當一心流布此法。廣令增益。如是三摩諸菩薩摩訶薩頂。而作是言。我於無量百千萬億阿僧祇劫。修習是難得阿耨多羅三藐三菩提法。今以付囑汝等。汝等當受持讀誦廣宣此法。令一切衆生普得聞知。

一品の中二大段あり。初は付囑を明かし。後は時衆の歡喜を叙す。初の付囑

を明らかす中三段あり。初は正しく如來の付囑。次は菩薩の領受。後は分身に退散を命ず。初に正しく付囑を明らかす中三節あり。此は第一節正しく付するなり。

（字義）從法座起とは釋迦牟尼佛多寶塔中の座より起て大神力を現し玉ふなり。○右手摩頂とは權智を右手に譬へ實智を頂に譬ふ。如來化他の權智を以て諸菩薩の自行の實智の頂を摩て玉ふ也。○而作此言とは大神力を現するは意業の付囑なり。手を以て頂を摩するは身業の付囑なり。今は口業の付囑を明かすなり。○難得菩提とは義疏に云く。菩提の得難きことを嘆するは物をして尊重の心を起さしめん爲めなり。但し此經には二權二實を明かす。（乘の權實身の權實）今總して菩提と言ふは即ち一の正觀なり。正觀は縱任自在なれは名けて乘と爲す。即ち初分の經なり。（迹門）長短化に適へは名けて壽量となす。即ち後分の經なり。（本門）今總して菩提といふは即ち二分を振むと。

所以者何。如來有大慈悲。無諸慳悋。亦無所畏。能與衆生佛之智

▲室衣座の三を弘經の三軌といふ。第四卷七十七頁に詳なり。

惠如來智惠自然智惠。如來是一切衆生之大施主。汝等亦應隨學如來之法。勿生慳悋。

此は第二節釋して付するなり。（法師品に云く如來室者一切衆生中大慈悲心是）○無諸慳悋とは如來の衣なり。（文に云く如來衣者柔和忍辱心是）○無所畏とは如來の座なり。（文に云く如來座者一切法空是）諸法の空を觀して所對を見さるときは畏るゝ所なし。故に是れ如來の座なり。○佛之智惠とは一切智なり。○如來智惠とは道種智なり。○自然智とは一切種智なり。一切智等の三智は天台の所立にて之を次第の如く空假中の三智に配當するなり。問ふ。佛の智惠と如來の智惠とは名の相違のみ。何ろ之を空（一切智）假（道種智）の二智に分配するや。答ふ。佛とは梵語にて釋しては如實の道に乘して來て正覺を成する義なるの故に。因より果に至れる義邊を以て道種智に合するなり。因果の差別は是れ道種智の所見なれは

なり。蓋し佛の三智は三といへども即ち一なるか故に名に就て一往義の相應する所を取るまてなり。差別の三智にはあらす。○汝等亦當隨學とは佛意を釋出して之に付囑するなり。

於未來世若有善男子善女人信如來智惠者當爲演說此法華經使得聞知爲令其人得佛惠故若有衆生不信受者當於如來餘深法中示敎利喜汝等若能如是則爲已報諸佛之恩

▲七方便とは人天二乘と聲緣二乘と藏通別の三種の菩薩乘とをいふ

▲方等とは大乘經の通名なり

此は第三節誡めて付するなり。

(字義)餘深法とは別敎なり。佛惠は是れ深にして餘にあらす。六方便は(七方便の中に別敎を除く)是れ餘にして深にあらす。但別敎のみ是れ餘にして深妙なり。故に若し直に佛惠(即ち圓敎)を受くへからさる者には別敎の法を說て之を助發せよとなり。義疏に亦た云く。問ふ。文に云く。若し衆生ありて信受せさる者には即ち如來の餘の深妙の法中に於て爲に說けと。然に小乘の三藏は是れ深妙にあらす。大法は即ち是れ大乘なり。云何そ別に餘の深妙あるや。答ふ。方等に二あり。一には大乘二には一乘なり。今餘法といふは即ち大乘を

指す。問ふ。何の故ろ大乘を信して一乘を信せさるや。答ふ。二種の人あり大乘を信して一乘を信せす。一には是れ小乘の人は大品(即ち般若經)等を信す。大品等は是れ大乘なれとも未た小乘を廢せさるを以ての故に。經中所說の大乘法は是れ菩薩の法なりと信し。小乘は是れ聲聞の法なりと信するなり。二には新學の菩薩亦大品を信す。謂く大品は菩薩の法を明らす爲に說けるなり。是れ吾等か所行なり。二乘の法にあらすと。○已報諸佛之恩とは上は佛の三德を學ひ下は兩機を知りて法と通し人を利するは則ち深く佛恩を報すとなすなり。○示敎利喜とは法を以て開示敎化し彼を利益して歡喜せしむるをいふ。

時諸菩薩摩訶薩。聞佛作是說已。皆大歡喜。滿其身。益加恭敬。曲躬低頭。合掌向佛。俱發聲言。如世尊勅。當具奉行。唯然世尊。願不有慮。諸菩薩摩訶薩衆。如是三反。俱發聲言。如世尊勅。當具奉行。唯然世尊。願不有慮。

此は第二に菩薩の領受なり。皆大歡喜とは意の領受なり。低頭合掌とは身

の領受なり。俱、發聲、言は口の領受なり。佛三たび付し玉ふ故に菩薩亦三たび受くるなり。如世尊勅といふを

拾玉　三度なてゝ契りし君の勅なれはけふまて誰もその示教利喜　慈鎮和尚

疊草　三度なつる我黒髪の末までもゆつる御法をなのくたのまん　中納言定家

夫水行末の世にひろめよと三度なて三度さつけしのりはこの法　雅有

新葉　末の世を思ふはとけの勅なれは我等の爲そいともかしこき　中務卿宗良親王

爾時釋迦牟尼佛。令十方來諸分身佛各還本土。而作是言。諸佛各隨所安。多寶佛塔還可如故。

此は第三に菩薩に退散せよと命するなり。

（字義各隨所安とは十方の分身佛は各本土に還りて銘々隨意に安する處に居れとなり。○還可如故とは多寶佛の塔は其處に留まり。但本の如く戸を閉ちよとなり。

（釋意）多寶は經を證せんか爲の故に來れり。今迹本の二門既に終る故に謹んで復た閉つること本の如くならしむ。分身は塔を開くんの爲の故に集れるなり。開塔の事終るの故に分身として各本土に還へらしむ。塔重て開くへからさるなり。而して多寶塔の尙此に留まる所以は猶藥王以下の流通の諸品を聞くんか爲なり。是れ即ち本迹の正說終り法華付囑の儀式も悉く終る故に釋尊は塔より出て又本の靈山に還り玉へは。多寶は自ら塔の戸を閉ちて流通の諸品を聽き玉ふなり。さては法華を兩處三會といひ。序品より寶塔品までは靈山會なり。寶塔品より囑累品までは虛空會なり。藥王品より經の終りまては復靈山會なりかし。▲一品二大段の中付囑の一大段終る。

○第二段時衆歡喜

說是語時。十方無量分身諸佛。坐寶樹下。師子座上者。及多寶佛。幷上行等無邊阿僧祇菩薩大衆。舍利弗等聲聞四衆。及一切世

○藥王菩薩品第二十三

間天人阿修羅等聞佛所說皆大歡喜

此は第二大段時衆の歡喜なり。諸佛は化他の事を遂くるか故に喜び、菩薩は自行の法を得るか故に喜ふなり。

妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

此品より巳下の五品は化他に約して流通を勸むるなり。(神力品の末に辨せり)五品の中四科に分けて此品は弘法の師を勸むるなり。次に妙音觀音の兩品は他方の大士の如來の命を受けて經を弘むることを明かす。即ち受法の弟子を勸むるなり。次に陀羅尼品は惡世に經を弘るに惱難多し。咒を以て護ることを明かす。次に妙莊嚴品は人を以て之を護ることを明かす也。

當品の得名を云はゞ藥王菩薩の昔しの事を說くか故に藥王菩薩本事品といふ。即ち十二部中には本事經なり。藥王菩薩は法師品より以來屢出つ。觀藥王藥上二菩薩經に曰く。過去不可說劫の昔。懸勝旃國の正法安穩劫に瑠璃光照如來出世し玉ひき。佛の壽は十大六劫。時の人壽は八大劫。正法像法各八大劫なりき。像法の中に於て千の菩薩の比丘ありて衆生を敎化し

き。其中に一の比丘あり。日藏と名く。大衆の爲に廣く大乘を說き又佛惠を讚しき。時に衆の中に星宿光長者と云ふ者あり。彼れ妙法と聞て大に歡喜して即ち雪山の呵梨勒果及び諸の雜藥を持して日藏に白さく。大德我れ仁者の說く所の不老不死の甘露の妙藥を得たり。今此上藥を持して仁者ふよび衆生に奉上し。此の功德を以て菩提に廻向す。若し我が名を聞かん者は願くば三種の病苦を除滅せん。一には身中の四百四病。二には邪見愚痴。三には三惡道の身なりと。時の大衆其の行に因て名けて藥王と曰ふ。爾の時に空中より七寶の蓋を雨らして藥王の上を覆ふ。其蓋より光明を放ちて光中に偈を說て曰く。大士妙善願。施藥濟一切。未來當成佛。號名曰淨眼。

(巳上略抄)藥王の得名是にて知るへし。

義疏に云く。一には上來は法華經を說く。今は法華經を行する人の所得の果報を說て以て宣持を勸むる也。二には十二門論に大乘の義を釋するに凡そ二種あり。一には諸佛大人の所乘なるの故に名けて大となす。二には彌勒文殊等の諸の大士の所乘なるの故に名けて大となすと。此二門を具

して乘の義乃ち備はる。此經に一乘を明かす亦爾り。一には諸佛の所乘也。二には菩薩の所乘なり。經の初より神力品に至るまで佛の所乘の法（即ち開三顯一）及ひ能乘の人（即ち開近顯遠）を明ゐし。此二章既に竟るか故に囑累品にて付囑せしなり。而して此より已後には菩薩の所乘の法と及ひ能乘の人とを明ゐす。但上には所乘の法と能乘の人とを開て以て二段となし。今は合して所乘の法と能乘の人とを明ゐす。開合不同なることは轉勢して法を說かんか爲の故なり。三には衆生の根性結緣不同なり。上來は釋迦と結緣せし衆生を化す。斯の事已に竟りぬ。今は諸の菩薩と結緣する衆生を化す。故に品品の中に皆悟道あり。是其の證なり。四には維摩經に菩薩を以て佛事を作すといへり。上來には諸佛、佛事を作すことを明かし竟ぬ。以下は菩薩、佛事を作すことを明ゐすなり。五には善知識を明かすに凡そ二種あり。一には諸佛は是れ衆生の眞の善知識なり。是の故に皆く分身及ひ過去の多寶佛を集るなり。今は菩薩衆生の爲め善知識なりと明かすゐ故に廣く菩薩の事と說くなり。華嚴の說經竟て流通分の法界品の中に至て廣く菩薩

は是れ善財童子の眞の善知識なるを明ゐすゐ如し。法華論に依れは此六品（此より經末に至る六品なり）を合して以て四章となす。初の藥王妙音の二品は苦行力の弘經を明かす。謂く藥王は身命財を以て報恩供養し。經を弘め人を利し衆生を敎化す又妙音菩薩は形を六趣に分けて一乘を弘宣せり。即ち是れ苦行力の弘經なり。第二に觀音陀羅尼の二品は護難力の弘經を明ゐす。觀音は人を以て難を護り。陀羅尼は法を以て難を護る。護難力の弘經と名く。第三に妙莊嚴品には功德の勝力を示現す。謂く淨藏淨眼の二子勝功德ありて能く父王をして邪を廻して正に入れしむ。即ち是れ衆生の眞の善知識なり。是れ勝功德力なり。第四に普賢品は亦は護法力と名く。謂く普賢は大神力を以て此經を宣通して留難なからしむ。即ち護法力と名づくるなり。四門次第する所以は苦行力は謂く報恩供養して此經を宣通す。即ち上に大法を弘むるなり。但し化を受るの徒諸の障難多し。宜く須らく之を救ふへし。即ち是れ下を濟ふなり。故に第二門あり。下を濟ふことを得る所以は良に勝功德あるに由る。故に勝功德力を擧けて下濟を釋成す。即ち第三

門あり。又上弘するには必す護法力を要す。故に護法を擧けて上弘を釋成す。即ち第四門あり。宣通の意此四門に具足するなり云云。

○第一段問

爾時宿王華菩薩。白佛言。世尊藥王菩薩。云何遊於娑婆世界。

一品の中大判して四段となす。初に問二に答三に時衆得益四に多寶稱歎なり。初の問の中に三節あり。此は第一節通して遊化を問ふなり。

世尊。是藥王菩薩。有若千百千萬億那由他難行苦行。

此は第二節別して苦行を問ふなり。

善哉世尊。願少解說。諸天龍神。夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等。又他國土諸來菩薩。及此聲聞衆。聞皆歡喜。

此は第三節答を請ふなり。

(通解)如上三節の意は、此衆中の藥王菩薩は云何なる此娑婆世界に遊化するや。又此菩薩は定て無量の難行苦行あらん。願くは佛少しく說き玉へ。菩薩聲聞天龍八部の徒之を聞て皆歡喜せんとなり。

○第二段答

爾時佛。告宿王華菩薩。乃往過去。無量恒河沙劫。

已下第二に答なり。此中二段あり。初は苦行を答へ後は經を歎す。苦行を答ふる中に二段あり。初は事本を明すし後は本事を明すす。(事本本事のこと六頁に辨せり)

初に事本を明かす中三節あり。此は第一節時節を擧くるなり。

有佛號日月淨明德如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。其佛有八十億大菩薩摩訶薩。七十二恒河沙大聲聞衆。佛壽四萬二千劫。菩薩壽命亦等。

此は第二節佛名等なり。

彼國無有女人地獄餓鬼畜生阿修羅等。及以諸難。地平如掌。瑠璃所成。寶樹莊嚴。寶帳覆上。垂寶華旛。寶缾香爐周徧國界。七寶爲臺。一樹一臺。其樹去臺盡一箭道。此諸寶樹。皆有菩薩聲聞。而坐其下。諸寶臺上。各有百億諸天。作天伎樂。歌歎於佛。以爲供養。

此は第三節國土の相なり。

(字義)無有女人とは補正記に云く。女人は即ち四惡趣の門を開く。既に女人

なきか故に則ち四惡趣なき也。○地獄餓鬼畜生阿修羅とは之を四惡趣といふ。○一箭道とは一箭力を盡すの遠きなり。義疏に云く一箭道者二里也。

爾時彼佛爲一切衆生喜見菩薩及衆菩薩諸聲聞衆說法華經

已下第二に本事を明かすなり。此中四段あり。第一は佛の說法。第二は藥王の悟解第三は報恩供養。第四は古今を結會す。今は初なり。(此四科は義疏に依る)此の時一切衆生喜見菩薩正しく對告衆たるなり。故に別して其名を揭く。是れ今の藥王なり。

是一切衆生喜見菩薩樂習苦行於日月淨明德佛法中精進經行一心求佛滿萬二千歲已得現一切色身三昧

○現一切色身三昧

此は第二に藥王の悟解なり。

(字義精進經行とは句解に云く精一修進して晝夜行道し直に來り直に去り線の經の直なる如きを經行といふ。即ち常行三昧なり。(四種三昧の一)○現一切色身三昧とは略して普現三昧といふ。一切衆生の色身を示現する三昧なり。此に三義あり。一には內現。法師功德品の中に身根清淨なれは十法界の

▲十法界の依正とは地獄界乃至佛界を十法界といふ。其國土を依報といひ。其身躰を正報といふ。

▲中道王三昧とは三昧中の王なれは王三昧といひ。中道の理を悟りて證得する者なれは中道といふ。

依正身中に於て現すること淨明鏡の諸の色像を現するか如しといふ。是れなり。(第六卷百四十頁)三には外現。妙音觀音の二品の中に二大士の普門示現して自在に十界の身を變現するの如きなり。三には內外現。大集經に說く如し。己か身を見るに衆生身も諸佛身も悉く己か身の中に於て現す。(內現)又我か身衆生の身共に佛身の中に現し。又我の身佛の身俱に衆生身の中に現すと。(外現)此は圓敎の初住已上の位に於て證得する中道王三昧なり。

得此三昧已心大歡喜即作念言我得現一切色身三昧皆是得聞法華經力我今當供養日月淨明德佛及法華經即時入是三昧於虛空中雨曼陀羅華摩訶曼陀羅華細抹堅黑栴檀滿虛空中如雲而下又雨海此岸栴檀之香此香六銖價直娑婆世界以供養佛

以下は第三に報恩供養を明らす。此中二段あり。初は現世の報恩供養を明らす。後は轉身の報恩供養を明らす。良に以れは恩を得ること深重なるの故に累世之を報すへけれはなり。初に現世の供養を明らす中に又二段あ

り。初は外財の供養を明かし。後は內身の供養を辯す。今は初なり。

（字義）海、此岸、栴檀之香、とは海此岸は須彌山の南岸なり。閻浮提より之を稱して此岸といふ。此方の岸といふ意なり。此南岸に香あり。栴檀と稱すること正法念處經に出つ○六銖、とは補註に云く。二十四銖を兩となす。六銖は即ち一兩の四分の一なり。

作是供養已。從三昧起。而自念言。我雖以神力供養於佛。不如以身供養。即服諸香栴檀薰陸兜樓婆畢力迦沈水膠香。又飲瞻蔔。諸華香油。滿千二百歲已。香油塗身。於日月淨明德佛前。以天寶衣。而自纏身已。灌諸香油。以神通力願。而自燃身。光明徧照八十億恒河沙世界。

已下は第二に內身の供養なり。此中三節あり。此は第一節身を燒くなり。

（字義）薰陸、とは本草に云く。大秦國に出つ大樹なり。枝葉古松の如し。沙中に生す盛夏に木膠流出し狀桃膠の如しと。○兜樓婆、畢力迦、とは本草に時珍云く。兜樓婆は薰香なり金光明經には之れを鉢怛羅香と謂ふと。又云く。畢

力迦は苜蓿なり宿根自生し牛馬を飼ふへしと。義疏に云く。羅什の言く龍神國に出つ。此土には無き所なるの故に翻せざるなりと。○膠香とは本草に云く。楓樹の香脂を白膠と名く。白楊に似たり。葉圓にして齒を作す三角ありて香し。○華香油とは諸の華香を以て油に浸すなり。○神通力願とは神通力と本願となり。身を燃て徧く八十億の世界を照すは神通力なり。以て深重の佛恩を報するは本願なり。

其中諸佛。同時讚言。善哉善哉。善男子。是眞精進。是名眞法供養如來。若以華香瓔珞。燒香抹香塗香。天繒旛蓋。及海此岸栴檀之香。如是等種種諸物供養。所不能及。假使國城妻子布施。亦所不及。善男子。是名第一之施。於諸施中。最尊最上。以法供養諸如來故。作是語已。而各默然。

此は第二節佛稱嘆し玉ふを明かす。

（字義）眞法供養とは喜見菩薩既に中道三味に入り。（普現色身三昧をいふ）諸法みな實相と見て。內に智觀を運らして煩惱の因果を燒盡す故に眞法といふ。又若

▲普賢道場とは普賢菩薩を勸請して法華三昧を修する道場なり。後の普賢勸發品に出つ。

▲旋陀羅尼とは前に辨

は身若は火若は能供若は所供を見るに皆是れ實相なり。誰れか燒き誰れの燃えん。能所共に不可得也。此の如く悟解する故に之を眞法と名く。然らすんは外道の巖に投し火に赴くと同し。無益の苦行を成すのみ。何そ眞法を以て如來を供養すと稱せん。

昔天台の智者大師七歳にして果願寺に至て僧の普門品を誦するを聞て隨て之を誦す。自ら七卷の文を憶するに了々として差誤なし。十八にして親ら果願寺に至りて僧となり。二十にして進んで具足戒を受け。曠律師に依て律藏に通す。光州の大蘇山に惠思禪師ありと聞て。遙に風德を慕ふて險を涉りて去る。思初て見て笑て曰く。昔し共に靈山に法華經を聽けり。宿緣の追ふ所今復來れりと。即ち普賢道場を示して法華三昧を行ふに。二七日を經。行道して經を誦し。此品の諸佛同時に讚して是眞精進是名眞法供養といふに至りて。豁然として大悟し法華を照了せり。將て師に白す。師の曰く。爾にあらすんは證せし。我にあらすんは識ることなをらん。所證は法華三昧の前方便にて旋陀羅尼なり。たとひ文字の法師千萬衆ありとも能

く汝の辯を窮むると莫らんと。

其身火燃。千一百歳過是已後。其身乃盡。

此は第三節時節を明すなり。其身火燃といふを。

法師のうたはらなるつほねにきたりしに經よめといはせしうはいとくらし火ともしてと言ひしにおつらやるとて。

赤染衛門

新拾遺 消ぬへき法の末にはなりぬとも身をともしても聞へかりける

從二位家隆

玉吟 弘むへき法のためとも思ひせはもゆる共身をおしまさらまし

慈鎮和尚

拾玉ともし捨し其身も共に反りにき反るもともすむくひならすや

一切衆生喜見菩薩。作如是法供養已。命終之後。復生日月淨明德佛國中。於淨德王家。結跏趺坐。忽然化生。

已下は第二に轉身の供養なり。此中五段あり。第一は王家に生まるを敘し。

第二は本事を説くを明かし。第三は佛所に往くを辨じ。第四は如來の付囑を示し。第五は命を受けて受持するを説く。今は初なり。

即爲其父而說偈言。

大王今當知　我經行彼處　即時得一切　現諸身三昧

勤行大精進　捨所愛之身

說是偈已。而白父言。日月淨明德佛。今故現在。我先供養佛已。得解一切衆生語言陀羅尼。復聞是法華經。八百千萬億那由他甄迦羅頻婆羅阿閦婆等偈。大王我今當還供養此佛。

此は第二に本事を説くなり。

(字義)一切現諸身三昧とは即ち現一切色身三昧なり。○解一切衆生語言陀羅尼とは陀羅尼は總持不失の力なり。一切衆生の語言を知解して忘れざる力用をいふ。補註に實積經を引て曰く。三昧あり。解一切衆生語言と云。此三昧を得る者は善く一切の語言を宣說し、一字の中に於て一切字を說き。一切の字を了して一字に同せしむと。○甄迦羅とは倶舍論十二に矜羯羅

○法華經の偈數

○女人成佛の勸文

といふに同し。即ち五十二數の中に第十六數なり。○頻婆羅とは倶舍には頻跋羅といふ。即ち第十八數なり。○阿閦婆とは倶舍論に阿芻婆といふ。即ち第二十數なり。義疏に云く。此文の中に二の數あり。一には八百千萬億とは是れ此土の數なり。百より轉增して億に至る。那由他より已上は皆是れ外國の數なり。即ち億より轉增するか故に那由他等ありと。

(注意)經中過去の如來の說き玉ひし法華經の文偈の數量を示す處總して三あり。一には化城喩品の中に大通智勝佛は恒河沙の如き偈を說くといひ。(第三卷百十四頁)二には不輕品に威音王佛が二十千萬億の偈を說くといひ。(十四頁)三には此處に日月淨明德佛は八百千万億那由他甄迦羅頻婆羅阿閦婆等の偈を說くといふ。釋尊も亦然り。芬陀利經には(異譯の經)無央數の偈を說く時に七寶の塔ありて其前に踊現すといへり。多寶出現已前に既に無央數の偈あり。又地下より涌出の衆、諸の菩薩の讚法の偈を以て佛を讚じ五十小劫を經るといへり。(第五卷百六頁)誰れか其偈數を知らん。

此偈の中捨所愛之身の一句女人成佛の勸文なりといふ。其故は女人は色

○聖德太子前身の經

を好み愛着殊に深し。今所愛の身を燃ゝ事は愛着の當躰實相なりと達すれはなり。此理に依らは如何なる女人の成佛せらんや。故に此品の末に若有女人聞是經典如說修行於此命終即往安樂世界等と女人の往生を說けりとなん。

聖德太子嘗て七日入定して通力を以て前生惠思禪師たりし時書寫し玉ひし法華經の支那の衡山般若寺にありけるを取り來り玉ふ經中には此句の下に供養於世尊爲求無上惠といふ二句ありしとなり。箋難に云く。有本に此偈の後に於て更に供養於世尊以求無上惠の二句を添ふ。乃ち後人擅に加ふる耳。添品法華亦但六句のみ。正法華は但只四句のみと。

白已即坐七寶之臺上昇虛空高七多羅樹往到佛所頭面禮足。合十指爪以偈讚佛。

容顏甚奇妙　光明照十方　我適曾供養　今復還親近

爾時一切衆生喜見菩薩說是偈已而白佛言世尊世尊猶故在世。

▲三德とは法身般若解脫之た涅槃の三德といふ。

此は第三に佛所に往くなり。○多羅樹とは上に辨せり。

爾時日月淨明德佛告一切衆生喜見菩薩善男子我涅槃時到滅盡時至汝可安施牀座我於今夜當般涅槃又勅一切衆生喜見菩薩善男子我以佛法囑累於汝及諸菩薩大弟子并阿耨多羅三藐三菩提法亦以三千大千七寶世界諸寶樹寶臺及給侍諸天悉付於汝我滅度後所有舍利亦付囑汝當令流布廣設供養應起若干千塔如是日月淨明德佛敕一切衆生喜見菩薩已於夜後分入於涅槃

此は第四に如來の付囑なり

（字義涅槃時到とは義疏に云く。三德に安住するを入涅槃となすなりと。○滅盡時到とは應を捨てゝ眞に飯する也と。是れ涅槃と滅盡とは梵漢の相違なるを姑らく借りて兩義と示したるなり。○并阿耨菩提法とは會義に云く。前に佛法といふは通して一代の所說をさす。此に阿耨菩提といふは別して法華經を指すなりと。○夜後分とは中夜の後を後分といふ。

爾時。一切衆生喜見菩薩。見佛滅度。悲感懊惱。戀慕於佛。即以海此岸栴檀爲積。供養佛身。而以燒之。火滅已後。收取舍利。作八萬四千寶瓶。以起八萬四千塔。高三世界。表刹莊嚴。垂諸旛蓋。懸衆寶鈴。

已下は第四に命を奉して住持するを明すなり。此中四節あり。此は第一節塔を起つなり。

（字義）高、三世界とは三千世界より高しとなり。初禪天は小千界を覆ひ二禪天は中千界を覆ひ三禪天は大千界を覆ふといふ。故に三千界より高〻といふは第三禪天より高きをいふなり。○表刹、莊嚴、とは塔の上に表出する刹竿と表刹といふ。即ち九輪の如き者なり。刹とは梵語刹多羅。幡竿なり。

爾時。一切衆生喜見菩薩。復自念言。我雖作是供養。心猶未足。我今當更供養舍利。便語諸菩薩大弟子及天龍夜叉等一切大衆。汝等當心念。我今供養日月淨明德佛舍利。作是語已。即於八萬四千塔前。燃百福莊嚴臂。七萬二千歲。而以供養。

此は第二節臂を燒くなり。○百福莊嚴とは過去に百福を植て今生に感得せし好妙の相なれは百福莊嚴といふ。佛の一一の相は各百種の福業を以て之を感することと俱舍論等に出つ。

令無數求聲聞衆。無量阿僧祇人發阿耨多羅三藐三菩提心。皆使得住現一切色身三昧。

此は第三節利益なり。

爾時諸菩薩。天人阿修羅等。見其無臂。憂惱悲哀。而作是言。此一切衆生喜見菩薩。是我等師。教化我者。而今燒臂。身不具足。于時一切衆生喜見菩薩。於大衆中。立此誓言。我捨兩臂。必當得佛金色之身。若實不虛。令我兩臂還復如故。作是誓已。自然還復。由斯菩薩福德智慧淳厚所致。當爾之時。三千大千世界。六種震動。天雨寶華。一切天人。得未曾有。

此は第四節現報を示すなり。

（字義）阿修羅とは此品の初に日月淨明德佛の淨土には阿修羅なしといへ

り。今何ろ阿修羅といふや。答ふ。彼は佛の在世に就て言ふ。佛の滅後諸難起る。修羅あるを妨けさるなり。○捨、両臂、とは大に深意あり。何となれは両臂は定慧の二門なり。法華巳前の權經には定慧各別に明かす。故に是ろ定なり是ろ慧なりと有所得の情を有するか故に法華實相の悟りは開けさるなり。然るに今定慧各別の情を捨てゝ法界一如の理に住する時法華の悟りを開くることゝ得。之を両臂を燒くにたとへしなり。○還復如、故とはさて實相一如の理を開き。立ち還りて見れは定慧の功德歴然として備はれり。之を還復如故といふなり。燒身は躰。燒臂は用なり。又燒身は戒。燒臂は定慧なり。

佛告宿王華菩薩。於汝意云何。一切衆生喜見菩薩。豈異人乎。今藥王菩薩是也。其所捨身布施如是無量百千萬億那由佗數。

巳下は第四に古今を結會するなり。此中二節あり。此は第一節正く結會なり。

宿王華。若有發心欲得阿耨多羅三藐三菩提者。能燃手指乃至

足一指。供養佛塔。勝以國城妻子。及三千大千國土山林河池。諸珍寶物。而供養者。

此は第二節勤修を勸むるなり。

(問答)律に制す。身を燒けは偷蘭遮の罪を得指を燒けは突吉羅の罪を得と。此中に燒身燒臂を勸奬するは何ろ。答ふ。大小乘の開制教法不同なり。小には制して過を結す。大には制して燒かしむ。故に梵網經に云く。若し身臂指を燒て諸佛に供養せされは。出家の菩薩にあらすと。大乘の開士法を重して身を忘る。身を忘るは實相を躰するに由る。豈に有所得の小乘を以て之を難することを得んや。▲答の中の第一段終る。(頁五十五以下)

若復有人以七寶滿三千大千世界。供養於佛及大菩薩。辟支佛。阿羅漢。是人所得功德不如受持此法華經乃至一四句偈。其福最多。

巳下第二に經の功德を嘆するなり。此中三段あり。初は能持の者を嘆し。次は所持の法を嘆し。後は受持すれは福の深きことを明らす。今は初なり。

▲偷蘭遮とは大遮と譯す善道を障ふ義なり。
▲突吉羅とは惡作と譯す。
▲開制とは開は之を許すないひ。制は之を禁するをいふ。律藏の詞なり。

(字義)一四句偈とは一如云く。凡そ長行の文を散華偈と名け。四言五言等の偈を貫華偈と名く。故に長行偈頌通して偈と稱することを得るなり。而して一四句といふは少を以て多を況るなりと。

宿王華。譬如一切川流江河。諸水之中。海爲第一。此法華經。亦復如是。於諸如來所說經中。最爲深大。

已下第二に所持の法を嘆するなり。此中二段あり。初は法の躰を嘆し。後は法の用を嘆す。法の躰を嘆する中に十喩あり。即ち十節となす。此は第一節水に比況して嘆するなり。

(釋意)此は法華の教を醍醐の海に譬ふなり。說。本源を窮むるを深となし。一切處に徧きを大となす。

又如土山黑山。小鐵圍山。大鐵圍山。及十寶山。衆山之中須彌山爲第一。此法華經。亦復如是。於諸經中。最爲其上。

此は第二節山に比況して嘆するなり。

(字義)土山とは土石の諸山なり。○黑山とは俱舍に云く。南洲の三處に三重の黑山ありと。○鐵圍山とは外海を圍繞せる鐵山なり。○十寶山とは一に雪山。二に香山。三に阿梨羅山。四に仙聖山。五に由乾陀山。六に馬耳山。七に尼民陀羅山。八に斫迦羅山。九に宿慧山。十に須彌山なり。華嚴經に出づ。

(釋意)他は土黑鉄の故に是れ實にあらず。十寶は是れ實なれども或は一或は二にして且つ神龍雜居せり。須彌は四寶の所成なり。純ら天の所住なり。此法華經は所說の諦理は常樂我淨なれは須彌山の四寶所成なるか如し。又佛惠を開示悟入する者の所居にして餘人の所依處にあらず。故に須彌に譬ふなり。

又如衆星之中。月天子最爲第一。此法華經。亦復如是。於千萬億種諸經法中。最爲照明。

此は第三節衆星に比況して歎するなり。

(釋意)月の盈昃あるを權智に譬ふなり。星月は同く陰の精にして同く夜に於て現せり。星は盈昃なけれとも其の明月に及はす。此の如く諸經に說く權智は自在を得す。所謂定盤星なり。但此經に明かせる權智は權即ち實實

即ち權不二にして二なり。此の如きの自在の權智餘敎に勝ること月の星に於ける如きなり。

又如日天子能除諸闇。此經亦復如是。能破一切不善之闇。

此は第四節日光に比況して嘆するなり。

(釋意)日は是れ陽の精なり。獨り能く暗を破す。諸經に明せる實智は惑を破すること。今經の一心三觀の實智に及はす。何となれは一心三觀なるゆ故に能く一時に見思(空觀)塵沙(假觀)無明(中觀)の三惑を破すること日の一たび出て、一時に一切の闇を破するゆ如し。豈に餘敎の及ふ所ならんや。

又如諸小王中。轉輪聖王。最爲第一。此經亦復如是。於衆經中。最爲其尊。

此は第五節輪王に比況して嘆そるなり。

又如帝釋。於三十三天中王。此經亦復如是。諸經中王。

此は第六節帝釋に比況して嘆するなり。

(字義)三十三天とは忉利天の譯名なり。四方に三十二人の天主あり。中心の第三十三の天主即ち帝釋なり。

又如大梵天王。一切衆生之父。此經亦復如是。一切賢聖。學無學及發菩薩心者之父。

此は第七節大梵王に比況して嘆するなり。

(字義)大梵とは色界初禪天の天主なり。自ら思ふ我れ能く娑婆世界の衆生を生出すと。故に序品の初に娑婆世界主梵天王とあり。○學、無學とは三乘の極果を無學といひ以下を學といふ。

(釋意)王といひ父といふは上より下に冠して自在を得るに譬ふなり。此の經は實相を以て空に入れは決了聲聞。是諸經之王。となり。(第六卷百四十二頁)實相を以て假に入れは資生業等皆順正法。となり。(第四卷八十二頁)實相を以て中に入れは諸法佛法に非そといふことなし。(上の如來一切所有之法を云ふ意なり)故に父たり王たりといふ。

又如一切凡夫人中。須陀洹。斯陀含。阿那含。阿羅漢。辟支佛爲第一。此經亦復如是。一切如來所說。若菩薩所說。若聲聞所說。諸經

▲無作とは自然と言ふ如し。人の造作を加へずして自ら具はる性德をいふ。任運無功用とも之をいふ。自然の運に任せて人の功用を加へざるの義なり。

法中最爲第一有能受持此經典者亦復如是於一切衆生中亦爲第一

此は第八節四果及び辟支佛に比況して嘆するなり。

(通解)一切の凡夫に對すれは二乘の證果は最勝殊妙なる如く一切の如來菩薩聲聞の所說の經法中には此法華經を第一となすとなり。

一切聲聞辟支佛中菩薩爲第一此經亦復如是於一切諸經法中最爲第一

此は第九節菩薩に比況して嘆するなり。

如佛爲諸法王此經亦復如是諸經中王

此は第十節佛に比況して嘆するなり。

(釋意)初に二乘に比する者は此經に明かす實相の理は無作の性德にして自然に妙用を具ふるを顯はそなり。二乘の證果は是れ涅槃にして涅槃の實躰は無作の德を具ふれは也。次に菩薩に比する者は因の圓滿を明かそなり。餘經に明かそ因は是れ七方便にして。今經に明らす因は七方便の外

に出すれはなり。次に佛に比する者は果の圓滿を明らす。餘經に明かす果は始成正覺の佛果にして。今經に明かす佛果は本地久成の如來なれはなり。故に因に於ても果に於ても第一たるなり。以上十喩終る。

宿王華此經能救一切衆生者此經能令一切衆生離諸苦惱

已下第二に法の用を嘆するなり。此中三節あり。此は第一節抜苦の用を嘆するなり。

(字義)一切衆生とは九界の衆生を該ぬ。十界の中に但佛を除く。○諸苦惱とは變易分段の二種の生死なり。

此經能大饒益一切衆生充滿其願如清冷池能滿一切諸渴乏者如寒者得火如裸者得衣如商人得主如子得母如渡得船如病得醫如暗得燈如貧得寶如民得王如賈客得海如炬除闇

此は第二節與樂の用を嘆するなり。此中十二喩あり。

如寒者得火

新　拾　谷の水みねの嵐をしのひきて法のたきゝにあふろうれしき

寂　蓮　法　師

〈さるの義ふり。

○如子得母如渡得船

法文　いまそしる冬の霜夜のうつみ火に花の御法の春のこゝろを　定家

如裸者得衣

同　今ろかもふかた岡山の旅人も身をつくしけるむらさきの袖　寂蓮法師

如渡得船

金葉　うき身をし渡すときけは海士小船のりに心を懸ぬ日ろなき　懐尋法師

新千載　こきよする便ならては渡し舟のりうけかたき吾身なりけり　藤原景綱

拾玉　わたしもりなうらましかは湊川苦しき海もこれよりそしる　慈鎮和尚

愚草　君をゝきてまつもひさしき渡舟のりうる人の契りしれとや　中納言定家

千五百番歌合　ふもふ人あるにつけてもみやことりあはれ今はと法の川長　寂蓮法師

法文　かの岸にねうふ心やしかゝらん嬉しくよするのりの舟うな　源三位頼政

如商人得主

同　里遠き市のちまたのとまひさし行うふ民にあふこゝちして　同

如子得母

同　かゝりけるみのりのはなそ鶯よ梢をゝしとなにおもひけん　同

如病得醫

同　身につもる風の通路尋ねすはよもきの關をいのてすへまし　同

如暗得燈

同　雪はたる光を窓にあつめてもおもひしらるゝ法のともしひ　同

如貧得寶

同　わひ人の心はかりは通ひきて思ふにさこそうれしかるらめ　同

如民得王

同　難波津にをのか物ゆへ行歸りねをなくあさも春に逢ふころ

續後高きやに治れる世を空に見て民のゐまともけふりたつなり

千五百番歌合　寂蓮法師

見すしらぬもろこし舟の行衛まで世をふる道は八重の鹽風

此法華經。亦復如是。能令衆生離一切病痛。能解一切生死之縛。

此は第三節總結の辭なり。

若人得聞法華經。若自書。若教人書。所得功德。以佛智慧籌量多少。不得其邊。若書是經卷。華香瓔珞。燒香。抹香。塗香。燔薰衣服。種種之燈。蘇燈。油燈。諸香油。燈。瞻蔔油燈。須曼那油燈。波羅羅油燈。婆利師迦油燈。那婆摩利油燈。供養。所得功德。亦復無量。

巳下は第三に持經の福を明す。初は全經を聞く福を明かし。後は一品を聞く福を示す。此は初なり。

(字義)婆利師迦とは音義に雨花といふ。餘は悉く前に註せり。

宿王華。若有人聞是藥王菩薩本事品者。亦得無量無邊功德。若

○往生極樂の勸文

○所得功德火不能燒水不能漂

有女人聞是藥王菩薩本事品。能受持者。盡是女身。後不復受。若如來滅後。後五百歲中。若有女人聞是經典。如說修行。於此命終。即往安樂世界。阿彌陀佛。大菩薩衆圍繞住處。生蓮華中寶座之上。不復爲貪欲所惱。亦復不爲瞋恚愚癡所惱。亦復不爲憍慢嫉妬諸垢所惱。得菩薩神通無生法忍。得是忍已。眼根清淨。以是清淨眼根。見七萬二千億那由陀恒河沙等諸佛如來。是時諸佛。遙共讚言。善哉善哉。善男子。汝能於釋迦牟尼佛法中。受持讀誦。思惟是經。爲他人說。所得福德。無量無邊。火不能燒。水不能漂。汝之功德。千佛共說。不能盡。汝今巳能破諸魔賊。壞生死軍。諸餘怨敵。皆悉摧滅。善男子。百千諸佛。以神通力。共守護汝。於一切世間天人之中。無如汝者。唯除如來。其諸聲聞辟支佛。乃至菩薩。智慧禪定。無有與汝等者。宿王華。此菩薩成就如是功德智慧之力。若有人聞是藥王菩薩本事品。能隨喜讚善者。是人現世口中常出

青蓮華香身毛孔中常出千頭栴檀之香所得功德如上所說

已下は第二に一品を聞く福を示すなり。此中二節あり。此は第一節格量なり。藥王本事品の一品を聞く福と格量するなり。

(字義)後五百歲とは大集經の中に五重の五百歲を說く中の第五の五百歲なり。○如說修行とは安樂行品の中に示す如し。○無生法忍とは圓敎の初住已上の悟なり。上に註せり。(第六卷十八頁六)○諸魔賊とは魔に四種あり。魔法身を害すれは之を賊にたとふ。四魔の事は上に辨せり。(第五卷十二頁九)

(問答)此中に女人の往生を明らして男子の事を言はさるは如何といふに。飯室の敎行決に劣を擧けて勝と包ぬといへり。又義疏に問ふて曰く。此品を聞て女人を受けすとならは餘品を聞ても亦當に受けさるや。答ふ。品品を聞て皆受けさるなり。但事の相似に約するの故に此品に寄せて之を言ふ。何となれは女人は多く己か身の種々の嚴飾に愛着するを以ての故に。今菩薩の身を捨てゝ臂を燒くことを明かして彼の着情を破り。以て染着と生せさるの故に女身を捨るなりと。さて此中女人の往生を明かす處如

○病即消滅不老不死

說修行の一句着眼すへし。

是故宿王華。以此藥王菩薩本事品囑累於汝。我滅度後。後五百歲中。廣宣流布。於閻浮提。無令斷絕。惡魔魔民。諸天龍夜叉。鳩槃茶等。得其便也。宿王華。汝當以神通之力守護是經。所以者何。此經則爲閻浮提人病之良藥。若人有病。得聞是經。病即消滅。不老不死。宿王華。汝若見有受持是經者。應以青蓮華盛滿抹香供散其上。散已作是念言。此人不久。必當取艸坐於道場。破諸魔軍。當吹法螺。擊大法鼓。度脫一切衆生老病死海。是故求佛道者。見有受持是經典人。應當如是生恭敬心。

此は第二節囑累なり。

(字義)無令斷絕とは案するに上の句に屬す。○惡魔魔民等とは言ふ意は若し此妙法を斷絕せしめは此等の惡鬼神其便を得んとなり。○不老不死とは義疏に云く。此經を聞て老病死等本來寂滅なりと知る故に不老死といふと。○取草とは草を取て座となし之に坐す。所謂草座なり。是れ應身佛の

座なり既に圓果を證し眞より應を起して八相成道を現するをいふ。○吹法螺とは一切衆生を警醒するなり。▲已上當品の初より第二大段如來の垂答終る。

○第三段一品利益

說是藥王菩薩本事品時。八萬四千菩薩。得解一切衆生語言陀羅尼。

此は第三大段一品の利益なり。藥王菩薩往古の時に得し所の如く八万四千の菩薩解一切衆生語言陀羅尼を得るなり。八万四千の菩薩とは前に八万四千の塔といふに應するなり。

○第四段多寶稱嘆

多寶如來。於寶塔中讚宿王華菩薩。言。善哉善哉。宿王華。汝成就不可思議功德。乃能問釋迦牟尼佛如此之事。利益無量一切衆生。

此は第四大段多寶如來の稱嘆なり。義疏に云く。前に塔を閉つれとも猶此に至て稱嘆の言を發す。則ち法身不滅の義彰かなりと。

○妙音菩薩品第二十四

妙法蓮華經妙音菩薩品第二十四

藥王品より已下の五品は化他に約して流通を勸むといふ中に。藥王の一品は弘法の師を勗むる爲に之を明かし。妙音觀音の二品は受法の弟子を勗むる爲に之を明かすと云ふ天台の意なり。即ち藥王か燒身燒臂は法を弘むる爲に其神力を竭し其形命を盡くせし者なりとの意なり。又妙音觀音の二品は他方の大士の如來の命を受けて此土に至り。三十三身の形を現してひたすら妙經を弘通せり。而て普く色身を現して。形に定準なければ牛羊の眼を以て看るへからす。凡愚の識を以て計るへからす。所聞所見の所に於て輕賤の想を生すへからすとなり。是れ即ち受法の弟子を誡むるなりといふ。

妙音菩薩品といふは釋迦牟尼如來肉髻と白毫との二の光を放ちて東方百八万億の世界を照らし玉ひしに。其を過きて淨光莊嚴といふ國あり。妙音菩薩彼國より娑婆に來り玉ふ時。七寶の蓮華をふらし百千の天樂自ら鳴る。菩薩の面貌端正にして諸相具なれり。諸の菩薩衆圍繞して靈山に至り。釋迦及ひ多寶如來を問訊し玉ふ。その時華德菩薩佛に白して此妙音菩

薩は如何なる善根を植ゑ如何なる功德を修して此神力あるやと問ひしに、佛華德に答へて過去に雲雷王といふ佛あり、其の時妙音菩薩十万種の伎樂と以て彼佛を供養し、幷に八万四千の寶鉢を奉上せし因緣によりて、今淨華宿王智佛の國に生れてゐゝる神力ありとて、妙音菩薩か普門示現の事を說き玉へは掲て品題となせしなり。

義疏に云く上の藥王品は經を聞て益を得、身命財を以て報恩供養することを明らす、今の妙音品は形を六道に分けて一乘を宣通することを明らすと、是亦一說なり。

和字解に云く、藥王妙音觀音と次第する事甚深の子細あり、蓋し釋尊の三業を分ちて三菩薩となせしなり、何となれは藥王燒身の行は即ち如來の身業周遍法界の義なり、妙音は一の妙音を以て普く十方世界に妙法を弘むる義なり、即ち如來の口業周遍法界の義なり、觀音は大慈大悲にて如來の意業周遍法界の義なり。

▲周遍法界とは周く十法界に彌滿する義なり。十法界とは地獄界乃至佛界なり。

○第一段放光東召

爾時釋迦牟尼佛放大人相肉髻光明及放眉間白毫相光徧照

東方百八萬億那由他恒河沙等諸佛世界過是數已有世界名淨光莊嚴其國有佛號淨華宿王智如來應供正徧知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊爲無量無邊菩薩大衆恭敬圍繞而爲說法釋迦牟尼佛白毫光明徧照其國

一品の中六大段あり、第一は佛光を放ちて妙音を召す、第二は妙音命を奉して來たる、第三は正しく妙音の弘經の模軌を明かす、第四は二土の得益、第五は事畢て本國に還飯す、第六は重て往來の利を明らす、此は第一光を放ちて妙音を召すなり。

(字義)大人相とは文句に云く、徧躰の毛の功德は一好の功德に及はす、衆好の功德は一相の功德に及はす、諸相は下より上に向ひ展轉して相勝れ、白毫の功德に及はす、白毫の功德は肉髻の功德に及はす、故に殊に肉髻を稱して大人の相と名くと、○肉髻とは佛頂の上に一肉團あり、髻の狀の如し肉髻と名く、此相は師長に孝順するより起れり、故に今是の光を放つことは本弟子(本門の弟子)を召し、之に命して中道の經を弘めて大機を利益せしめ

ん爲なり。即ち菩薩の孝順師長の義成就するなり。○白毫とは此相は一道清淨より起るなり。故に今此光と放つことは此一道清淨を弘めんの爲なりとぞ。義疏に云く。二光を放つ所以は一乘の妙理は有空の頂に踰ゑたるの故に肉髻の光明を放つなり。又極智は偏ならす能く中道の照をなすの故に眉間の光を放つなり。又頂の光は一乘を尊となし衆聖の重そる所なるを表し。眉間の光は一乘偏ならすして中道圓正なるを表す。此法を以て其人に付囑せんと欲するか故に。此二光を放ちて以て之を召すなり。又上の品には法華は第一なり持經の人も亦第一なりと明かせり。(七十四頁)今其人の行高きことを表するか故に頂の光を放ち。其人の解正しきことを表するの故に眉間の光を放つ。二光を放ちて其人を表する所以は。大衆をして此菩薩に於て深く慈心を起して其道法を受けて益を得せしめんと欲すれはなり云云。

(問答)問ふ。佛の有緣の弟子は十方に滿たん。何の故そ東に召し西に來たる耳にして八方を論せさるや。答ふ。此に所表あり。東は是れ光の始西は是れ

光の終なり。始あり終あるは其れ唯た聖人乎。未た發心せさる者をは其をして發心せしめ。未た究竟せさる者をは其をして究竟せしむ。一菩薩既に爾り。諸衆も亦た然り。一方既に爾り諸方も亦た然り

○第二段妙音西來。

▲莊嚴とは福智の二莊嚴とて此二德を以て其身を莊嚴するをいふ。

爾時一切淨光莊嚴國中。有一菩薩名曰妙音。久已植衆德本。供養親近無量百千萬億諸佛。

已下第二に妙音命を奉して西に來たるを明かすなり。此中二段あり。初は發來の緣と明かし。後は正く發來するを明かす。初の發來の緣を明かす中に六段あり。第一は經家其福惠を叙し。第二は照を被ると叙し。第三は菩薩の告辭。第四は如來の垂誡。第五は菩薩の受旨。第六は來相を現するを明かす。第一福慧を叙する中に三節あり。此は第一節福惠を得るの由しを叙するなり。

而悉成就甚深智惠。

此は第二節智惠を叙す。即ち智惠莊嚴なり。

得妙幢相三昧。法華三昧。淨德三昧。宿王戲三昧。無緣三昧。智印

三味。解一切衆生語言三味。集一切功德三味。清淨神通遊戲三味。惠炬三味。莊嚴王三味。淨光明三味。淨藏三味。不共三味。日旋三味。得如是等百千萬億恒河沙等諸大三味。

▲三千の諸法とは自家にて諸法を概括せる數量なり。別處に辨せり。

▲權智とは自悟の智を實智といひ悟他の智を權智といふ。

此は第三節福德を敘す。此十六の三味は即ち福德莊嚴なり。

(字義)妙幢相三味とは三千の諸法其躰妙寂にして堅に一切を越へ無相にして相なるを妙幢相といふ。○法華三味とは三諦圓融して一實相なるを法といひ權實不二なるを華に譬ふ。(花實は實にて花瞬は權法なり)○淨德三味とは實相の光清淨にして二邊(有空)の染汚なきを淨德といふ。○宿王戲三味とは大威德陀羅尼經に依れは宿王とは月の異名。月を權智に譬ふ。權智機を照して自在に敎化するを宿王戲といふ。戲とは遊戲にて任放自在の義也。○無緣三味とは無緣の衆生を憐む大慈大悲をさしていふ。○智印三味とは一心の三智を以て一切の法を印すれは佛法にあらすといふことなし。一色一香無非中道といふ是なり。之を智印といふ。一心の三智とは一心の中に空假中の三諦を照す智なり。○解一切衆生語言三味とは前に辨せし如し。○

集一切功德三味とは大品經に云く。此三味に住して諸の三味の功德を集むと。○清淨三味とは六根清淨にして互に用ること自在無礙なるを清淨三味といふ。○神通遊戲三味とは物を化すること自在にして世間に遊ふこと譬へは兒の戲るゝ如くなるを神通遊戲といふ。神通に遊戲する義なり。○惠炬三味とは平等の大惠炬火の暗を除く如くなるを惠炬といふ。○莊嚴王三味とは性具の万德緣了の二を以て莊嚴し融通自在なるを莊嚴王といふ。性了緣の三因のことは前に屢辨せり。○淨光明三味とは性躰澄明にして諸の垢染を離るゝを淨光明といふ。○淨藏三味とは一念の淨心に權實の功德を具足して一切を含攝するを淨藏といふ。○不共三味とは藏通別三敎の菩薩に共同せさるを不共といふ。圓敎の中道は永く三敎に超異それはなり。○日旋三味とは義疏に日天子の日の宮殿に乘して諸の衆生を照して周りて復始まるか如しと。文句に云く十六三味は法華三味の異名なり。義に隨て之を說く耳と。此十六の名は輔正記、義讚、箋難、補註、に委く釋する如し。

釋迦牟尼佛光照其身。

此は第二に妙音菩薩の身の照さるゝをいふ。

即白淨華宿王智佛言。世尊我當往詣娑婆世界。禮拜親近供養釋迦牟尼佛。及見文殊師利法王子菩薩。藥王菩薩。勇施菩薩。宿王華菩薩。上行意菩薩。莊嚴王菩薩。藥上菩薩。

此は第三に妙音菩薩の告辭なり。

爾時淨華宿王智佛告妙音菩薩。汝莫輕彼國生下劣想。善男子。彼娑婆世界。高下不平。土石諸山。穢惡充滿。佛身卑小。諸菩薩衆。其形亦小。而汝身四萬二千由旬。我身六百八十萬由旬。汝身第一端正。百千萬福。光明殊妙。是故汝往莫輕彼國若佛菩薩。及國土生下劣想。

此は第四に如來の誡勅なり。

(釋意)妙音は法身の大士なれは之を誡勅せされとも咎なからん。但將る所の眷屬或は達せさる者あらんことを恐れて彼に寄せて此を規する耳。夫れ佛身は理と相應せり。卑小を以て其の尊嚴を忘るへからす。且つ師及ひ子弟智斷具足せり。師已に權を施す。弟子も亦其實を隱くすへし。又其依報の國土は正報の所感なり。如來慈を以て大千に臨む。宜に隨ふて高を須ゐ下を須ゆ。依報を觀て正報を忽にすること勿れとなり。

妙音菩薩。白其佛言。世尊我今詣娑婆世界。皆是如來之力。如來神通遊戲。如來功德智惠莊嚴。

此は第五に妙音旨を受くるなり。

(釋意)妙音既に如來の力と神通と功德とに依て道を弘め人を利する爲に娑婆世界に至る。謹て劣想を生すること無かるへしとなり。

於是妙音菩薩。不起于座。身不動搖。而入三昧。以三昧力。耆闍崛山。去法座不遠。化作八萬四千衆寶蓮華。閻浮檀金爲莖。白銀爲葉。金剛爲鬚。甄叔迦寶。以爲其臺。

已下は第六に來相を現するを叙す。先つ來相を現することは此土の衆生をして尊敬の心を起さしめん爲なり。此中六節あり。此は第一節蓮華を現

するなり。

(字義)不起于座とは座を起すして十方に遊ぶ。上に所謂神通遊戯の力なり。○化作八万四千衆寶蓮華とは義疏に云く。蓮華を化作することは一には蓮華を以て座となさんと欲すれはなり。二には妙法蓮華を弘むることを表するなり。八万四千は一には八万四千の菩薩の座に擬せんと欲するなり。二には八万四千の法藏は皆一乘妙法華に入るを表せんか爲なり。○白銀爲葉とは義疏に此經の題は是れ白蓮華なり。二權二實を開けは則ち八万四千の法藏の義皆明白なるを表すと。○金剛爲鬚とは鬚は花心の蘂をいふ。○甄叔迦寶とは經音義に云く。此に赤色寶といふ。西域記に云く。甄叔迦樹は其華赤色にして大さ手の如し。此寶の色此花に似たり。故に之に名くと。義疏に云く。甄叔迦は此に鸚鵡といふ。此寶は鸚鵡鳥の嘴に似て赤色なりと。

爾時。文殊師利法王子。見是蓮華。而白佛言。世尊是何因緣。先現此瑞。有若干千万蓮華。閻浮檀金爲莖。白金爲葉。金剛爲鬚。甄叔

迦寶。以爲其臺。

此は第二節文殊の問なり。文殊瑞の所由を問ふ。

爾時。釋迦牟尼佛。告文殊師利。是妙音菩薩摩訶薩。欲從淨華宿王智佛國。與八萬四千菩薩圍繞而來至此娑婆世界。供養親近禮拜於我。亦欲供養聽法華經。

此は第三節世尊の答なり。如來瑞の意を答ふ。

文殊師利。白佛言。世尊是菩薩。種何善本。修何功德。而能有是大神力。行何三昧。願爲我等說。此三昧名字。我等亦欲勤修行之。行此三昧。乃能見是菩薩色相大小威儀進止。唯願世尊。以神通力。彼菩薩來。令我得見。

此は第四節文殊の請なり。此中三問一請あり。三問とは第一に如何なる善本を植ると問ふ。第二に如何なる功德を修すると問ふ。此二は過去の往因を問ふなり。始に約して善本といひ。終に約して功德といふ。行何三昧已下は第三に何の三昧を行ずと問ふ。此は現在所得の果を問ふなり。我等亦欲

勤修行之等とは彼の三昧を得るときは則ち其身を知るを得るなり。已上三問なり。唯願已下は一請なり。たとひ我等彼菩薩の三昧を得さる共佛力を以て彼菩薩を見んと欲すと請ふなり。

爾時釋迦牟尼佛告文殊師利此久滅度多寶如來當爲汝等而現其相

此は第五節多寶に功を推すなり。上の三問一請の中に但後の請と受けて未た前の三問を答へす。下に華德菩薩の重て三問を牒するに至て佛方に解釋し玉ふなり。さて多寶如來に推讓する所以は義疏に云く。蓋し是れ俗の事に隨ふなり。俗人の禮は賢を推し長に讓る。多寶既に久く成佛せり。故に釋迦之に讓るなり。二には多寶の不滅を顯さんと欲するの故なりと。

時多寶佛告彼菩薩善男子來文殊師利法王子欲見汝身

此は第六節多寶來れと命するなり。

(釋意)眞言に四部の天あり。其中の外部の天に妙音天といふは辯才天琵琶を持ち玉ふ也。之を顯敎には妙音菩薩といふ。夫れ福德莊嚴の妙音は智慧

第一の文殊を見んと欲し。文殊は妙音を見んと欲す。是れ即ち福智一躰の義なり。又何故に此品には東方の菩薩の事を說き。普門品には西方の菩薩の事を說くやといふに。日は東より出て西に傾く。東は光の初西は光の終なり。故に東方は發心の方。西方は菩提の方なり。東方の妙音の事を說くは發心せさる者を敎化して發心せしめ。西方の觀音の事を說くは菩提を究竟せさる者をして究竟せしめんか爲なり。

于時妙音菩薩於彼國沒與八萬四千菩薩俱共發來所經諸國六種震動皆悉雨於七寶蓮華百千天樂不鼓自鳴

此より已下は第二に正しく發來の相を叙せるなり。此中又六節あり。此は第一節眷屬と共に發來するを叙す。不鼓而鳴といふを。

風雅　爰にのみ有とやは見る何くにも妙なる聲に法をころきけ　赤染衛門

拾玉　わしの山妙なる聲のゆかりには風ふかねともみねの松風　慈鎭和尙

是菩薩目如廣大青蓮華葉正使和合百千萬月其面貌端正復過於此身眞金色無量百千功德莊嚴威德熾盛光明照耀諸相具足如那羅延堅固之身入七寶臺上昇虛空去地七多羅樹諸菩薩衆恭敬圍饒而來詣此娑婆世界耆闍崛山

此は第二節菩薩の相貌并に七寶の臺に乘するを叙す。

(字義)青蓮華とは肇法師の註維摩經に云く。天竺に青蓮華あり。其葉修くして廣し。青白分明にして大人の眼目の相あり故に取て譬となすと。○那羅延とは義疏に眞諦の云く。那羅をは譯して人となす。延をは生本と云。梵王は是れ衆生の祖父なるか故に人生本といふと。羅什の云く。天の力士を那羅延と名く。端正猛魅なり。倶舍論に云く。大千世界の風輪を持するを。那羅延と名く。那羅延は天力といふべきなり云云。正使和合百千万月其面貌端正復過於此といふを。

夫　木　我か心さやけき影にすむ物をある夜の月をひとつ見るたに

西行法師

新後拾　限りなき月のひかりにさそはれて驚の太山と指てきにけり

寂蓮法師

到已下七寶臺以價直百千瓔珞持至釋迦牟尼佛所頭面禮足奉上瓔珞而白佛言世尊淨華宿王智佛問訊世尊少病少惱起居輕利安樂行不四大調和不世事可忍不衆生易度不無多貪欲瞋恚愚癡嫉妬慳慢不無不孝父母不敬沙門邪見不善心不攝五情不世尊衆生能降伏諸魔怨不久滅度多寶如來安穩少惱堪忍久住不

此は第三節問訊して旨を傳ふなり。

(字義)四大調和とは地水火風之を四大といふ。身躰と攜成する元素なり。此四調和を失すれは病を生すといふ。○世事可忍とは俗事の繁累堪え得るや否やをいふ○攝五情とは五情は眼耳鼻舌身の五根なり。之を撿束して放逸ならしめさるを攝といふ。

世尊我今欲見多寶佛身惟願世尊示我令見

○第三段十方弘經

此は第四節多寶如來を見んと請ふなり。

爾時釋迦牟尼佛語多寶佛是妙音菩薩欲得相見

此は第五節釋尊爲に意と通し玉ふなり。

時多寶佛告妙音言善哉善哉汝能爲供養釋迦牟尼佛及聽法華經并見文殊師利等故來至此

此は第六節塔中より妙音を稱嘆し玉ふなり。會義に云く、善哉と稱すれは既に是れ相見竟る。塔を開くを須ゐさるなりと。▲己上第二大段命を奉して西來すると終る。

爾時華德菩薩白佛言世尊是妙音菩薩種何善根

己下は第三に妙音の弘經を論するなり。義疏に云く、前の章は是れ弘經の人に屬し今は弘經の法なれは即ち人法一雙なり。又上には妙音の果を明かし、今は其往因を出たす。謂く因果の一雙なり。即ち是れ妙音二世の德を顯はすなり。此中二番の問答あり。初の一は妙音の神力を論し、後の一は妙音の三昧を論す。神力は是れ智慧なり。三昧は是れ定なり。略して菩薩の定

慧を論するなり。又神力は是れ果なり。三昧は是れ因なり。三昧の因に由るの故に能く神力を現するなり。而して今前に果を論し後に因を論する所以は妙音神力を現して來たるか故に前に問ふ也と。華德の兩問を尋ぬれは（前後の兩問答に就て華德問を發せり）皆是れ文殊の上の三問を牒するなり。世尊上に未だ之を答へさるを以ての故に今重て牒して問ふなり。さて初の問答の中に兩段あり。初は問後は答なり。初の問の中に又二あり。此は第一問神力の因を問ふなり。

修何功德有是神通

此は第二問神力の果を問ふなり。善根と功德と異なることは善根は初に就き功德は後に就く。故に二問別なり。

佛告華德菩薩過去有佛名雲雷音王多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀國名現一切世間劫名喜見妙音菩薩於萬二千歲以十萬種伎樂供養雲雷音王佛并奉上八萬四千七寶鉢以是因緣果報今生淨華宿王智佛國有是神力於汝意云何爾時雲雷音

王佛所妙音菩薩伎樂供養奉上寶器者豈異人乎今此妙音菩薩摩訶薩是華德是妙音菩薩已曾供養親近無量諸佛久植德本又値恒河沙等百千萬億那由陀佛

己下は第二に答なり此中二節あり此は第一節初問を答ふなり

華德汝但見妙音菩薩其身在此而是菩薩現種種身處處爲諸衆生說是經典或現梵王身或現帝釋身或現自在天身或現大自在天身或現天大將軍身或現毘沙門天王身或現轉輪聖王身或現諸小王身或現長者身或現居士身或現宰官身或現婆羅門身或現比丘比丘尼優婆塞優婆夷身或現長者居士婦女身或現宰官婦女身或現童男童女身或現婆羅門婦女身或現童男童女身或現天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等身而說是經諸有地獄餓鬼畜生及衆難處皆能救濟乃至於王後宮變爲女身而說是經華德是妙音菩薩能救護娑婆世界諸衆生者是妙音菩薩如是種種變化現身在此娑婆國土爲諸衆生

說是經典於神通變化智惠無所損減是菩薩以若干智惠明照娑婆世界令一切衆生各得所知於十方恒河沙世界中亦復如是若應以聲聞形得度者現聲聞形而爲說法應以辟支佛形得度者現辟支佛形而爲說法應以菩薩形得度者現菩薩形而爲說法應以佛形得度者即現佛形而爲說法如是種種隨所應度者而爲現形乃至應以滅度而得度者示現滅度華德妙音菩薩摩訶薩成就大神通智惠之力其事如是

此は第二節後問を答ふなり即ち神力の果なり此中惣して三十四の凡身と四種の聖身とあり以て十界六道を概括せり

(字義梵王とは初禪天の主なり○帝釋とは三十三天の主なり○自在天とは欲界の主即ち他化自在天なり○大自在天とは色界の主即ち摩醯首羅天也○天大將軍とは是れ諸天を侍衛する將軍也○毗沙門天王身とは帝釋の臣即ち四王天の一なり己上六種是れ天身なり○轉輪聖王身とは金銀銅鉄四種の輪王なり○小王身とは粟散王なり○居士身とは財を畜ふ

る者を居士といふ。○婆羅門身とは天竺四姓の上首。淨行の士なり。○於王後宮變爲女身とは下の妙莊嚴品に明かす淨德夫人の如きなり。○變化智惠無所損減とは人を敎化して我に於て損減する所なきは。燈より燈を分ち一燈より傳へて無量燈に至るも。本燈失せざるの故に損減なきが如きをいふ。及衆難處皆能救濟といふを

堀川右大臣
皇太后宮大夫　俊成

讃後拾　沈むべき人を悲しと思ふには淵をせになす物にろありける

新續古　あらき海きひしき山の中なれと妙なる法はへたてさりけり

爾時。華德菩薩。白佛言。世尊。是妙音菩薩。深種善根。世世菩薩住何三昧。而能如是在所變現。度脫衆生。

已下は第二に三昧の問答なり。此中二節。初に問。後に答ふ。今は初なり。

佛告華德菩薩。善男子。其三昧名現一切色身。妙音菩薩。住是三昧中。能如是饒益無量衆生。

此は第二節答なり。現一切色身三昧に依て十界六道の身を變現するを得るなり▲已上第三大段十方弘經終る。

○第四段二土得益

說是妙音菩薩品時。與妙音菩薩俱來者八萬四千人。皆得現一切色身三昧。此娑婆世界無量菩薩。亦得是三昧及陀羅尼。

此は第四大段二土の得益なり。

（字義三昧及陀羅尼とは文句に云く。三昧と陀羅尼とは躰一にして用異なり。寂の用を三昧とし照の用を陀羅尼とす。又色身を變現するを三昧の用となし。音聲の辯說を陀羅尼の用となす。又舌根清淨を陀羅尼と名け。餘根清淨を三昧と名く。皆六根清淨の法門也と。妙樂云く。色身を現するを三昧と名け音聲を陀羅尼と名くとは。語言と色身とは但是れ身口の異のみ。豈に身を現して說法すること能はざるへけんや。但事に從ふとき。其用を別にするのみ。其理必す同し。三昧は定に從ひ陀羅尼は惠に從ふ。卽ち不思議の定惠なり。故に互用を得るのみと。

▲妙樂とは文句記の著者卽ち荆溪尊者なり。

爾時。妙音菩薩摩訶薩。供養釋迦牟尼佛及多寶佛塔已。還歸本

○第五段還飯本

國。

○第六段聞品利益。

土所經諸國。六種震動。雨寶蓮華。作百千萬億種種伎樂。既到本國。與八萬四千菩薩圍繞。至淨華宿王智佛所。白佛言。世尊。我到娑婆世界。饒益衆生。見釋迦牟尼佛。及見多寶佛塔。禮拜供養。又見文殊師利法王子菩薩。及見藥王菩薩。得勤精進力菩薩勇施菩薩等。亦令是八萬四千菩薩。得現一切色身三昧。

此は第五大段本國に還飯するなり。

說是妙音菩薩來往品時。四萬二千天子。得無生法忍。華德菩薩。得法華三昧。

此は第六大段此品を聞きし利益なり。

(問答義疏に問ふ。菩薩の來往を見て何を以てか無生忍を得るや。答ふ利根の人は菩薩不來の相にして來るか故に來たるとも來たる所なし。不去の相にして去るか故に去るとも去る所なしと悟りて。則ち實相に入るか故に無生を得るなり。問ふ。無生法忍と普現色身と法華三昧と何の異あるや。答ふ。心に所依なし。猶虛空の如し。心の動念を生せず。故に無生法忍と名く。

空なりと雖も而も有なり。放任自在にして處々に身を現す即ち是れ普現色身三昧なり。三一に於て自在なり。(迹門の法華)長短に於て無碍なるは(本門の法華)即ち是れ法華三昧なりと。

妙法蓮華經卷第七

妙法蓮華經講義卷七

目錄

觀世音菩薩普門品第二十五	初	頁
陀羅尼品第二十六	七十四	頁
妙莊嚴王本事品第二十七	八十七	頁
普賢菩薩勸發品第二十八	百四	頁

妙法蓮華經講義

織田得能講述

○觀世音菩薩普門品第二十五

○觀音經別行の緣起

妙法蓮華經卷第八

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五

當品は法華四要品の最終壽量の佛躰より（四要品の第三壽量品の所明）不可思議の化用を垂れて衆生を濟度することを明かせるなり。而して觀音菩薩は殊に此土に因緣あつきより法華經中此一品を別行して觀音經と稱へ古來より諸宗に渉りて受持讀誦せり。而して其別行するに至りし緣起は法華傳記の中に左の如く記せり。天竺の曇摩羅讖此に法豊といふ。中印度の人婆羅門種なり。亦た伊波勒菩薩と稱す。弘化を志となす。葱嶺に遊化し河西に來至す。河西王の沮渠蒙遜正法に皈命す。兼て疾患あり。以て菩薩に語る。即ち云く觀世音は此土に緣ありと。乃ち誦念せしむるに病氣即ち除く。是に因て別して一品を傳へ部の外に流通する也と。河西の沮渠蒙遜は晉代の僞王に

○觀音の此土に緣深き所以

▲十八界七大とは十八界は六根六境六識なり。七大は一に地大二に火大三に水大四に風大五に空大六に見大七に識大なり。

▲圓通とは圓かに眞性を通入するをいふ。

して姚秦の朝と並ひ立ちし者なれは本經の譯出（姚秦の弘始八年鳩摩羅什の譯）より幾くもなくして別行されしなり。問て云く此菩薩娑婆に於て緣深しといふは何そや。答て曰く嘉祥の義疏に此問を答て云く弘猛海慧經に曰く昔し此閻浮提に王あり善首と名く五百の子あり。第一子を善光と名く空王觀音佛に値ふて十大願を發せり。第一願に一切の法を得ん。第二願に般若の船を得ん。第三願に智慧の風に値はん。第四願に善方便を得ん。第五願に一切の人を度せん。第六願に苦海を超えしめん。第七願に戒定を得ん。第八願に涅槃の山に登らん。第九願に無爲の舍に會はん。第十願に法性の身に同じうらん。重て誓ふて云く我れ未來の佛とならんとき觀世音と名け三たひ我名を稱へんに往きて救はすんは我れ妙色身を取らすと。是の如く此菩薩は此土に在りて菩薩の道を行せしを以ての故に此土に緣あるなり云云。又楞嚴經に二十五人の聖者十八界七大を入理の門として圓通を得玉ふ中に觀音は第二十五人目にて耳根より圓通を得玉ふ大聖者なり。爾の時文殊菩薩二十五人の圓通を批判して觀音の耳根圓通を以て最第一と稱せり。其の故は此土の衆生は諸根の中に於て耳根最も利にして耳に依て聲教を聞き悟道の益を得へければなり。故に此土の人を化益する上には觀音の圓通最も勝るゝといふ意なり。さて此の如く觀音は耳根得道の菩薩なるゝ故に耳根の最も利なる此土の衆生には化緣最も深しとなり。是れ能化所化順同するか故なり。

○觀音菩薩の經典

觀音菩薩の事を記せる經典一にして足らす。今藏中に存せる者を掲くれは凡そ左の如し。

觀世音菩薩授記經	一卷	宋曇無竭譯
悲華經	十卷	北梁曇無讖譯
觀無量壽經	一卷	宋疆良耶舍譯
已上方等部		
金剛頂千手千眼觀自在菩薩修行儀軌經	一卷	唐不空譯
千手千眼觀世音菩薩大悲心陀羅尼	一卷	唐善無畏譯
千手觀音造次第法儀軌	一卷	同譯

千手千眼觀世音菩薩姥陀羅尼身經　一卷　唐菩提流志譯
千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神呪經　二卷　唐智通譯
千手千眼觀世音菩薩大身呪本　一卷　唐金剛智譯
千手千眼觀自在菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼呪本　一卷　同譯
千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經　一卷　唐伽梵達摩譯
千手千眼觀世音菩薩治病合藥經　一卷　同譯
大悲心陀羅尼修行念誦略儀　一卷　唐不空譯
觀自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門　一卷　唐不空譯
聖觀自在菩薩心眞言瑜伽觀行儀軌　一卷　同譯
瑜伽蓮華部念誦法　一卷　同譯
金剛恐怖集會方廣儀軌觀自在菩薩三世最勝心明王經　一卷　同譯

金剛頂降三世大儀軌法王敎中觀自在菩薩心眞言一切如來蓮華大曼荼羅品　一卷　同譯
觀自在菩薩化身襄賢哩曳童女銷伏毒害陀羅尼經　一卷　同譯
觀自在菩薩心眞言一印念誦法　一卷　同譯
觀自在菩薩大悲智印周遍法界利益衆生熏眞如法　一卷　同譯
觀自在菩薩隨心呪經　一卷　唐智通譯
聖觀自在菩薩一百八名經　一卷　宋天息災譯
佛說聖觀自在菩薩不空王秘密心陀羅尼經　一卷　宋施護譯
佛說觀自在菩薩母陀羅尼經　一卷　宋法賢譯
清淨觀世音普賢陀羅尼經　一卷　唐智通譯
請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經　一卷　東晉難提譯
千轉陀羅尼觀世音菩薩呪　一卷　唐智通譯

佛說一切佛攝相應大教王經聖觀自在菩薩念誦儀軌　一卷　宋法賢譯

佛說聖觀自在菩薩梵讚　一卷　同譯

十一面觀自在菩薩心密言念誦儀軌經　三卷　唐不空譯

十一面神呪心經　一卷　唐玄奘譯

佛說十一面觀世音神呪經　一卷　宇文周譯

佛說七俱胝佛母准提大明陀羅尼經　一卷　唐金剛智譯

七俱胝佛母所說准提陀羅尼經　一卷　唐不空譯

佛說七俱胝佛母心大准提陀羅尼經　一卷　唐地婆訶羅譯

七佛俱胝佛母心大准提陀羅尼經　一卷　唐善無畏譯

如意輪菩薩念誦法　一卷　唐不空譯

觀自在如意輪瑜伽　一卷　同譯

如意輪菩薩觀門義注秘訣　一卷　失譯

如意輪陀羅尼經　一卷　唐菩提流志譯

觀世音菩薩秘密藏如意輪陀羅尼神呪經　一卷　唐實叉難陀譯

觀世音菩薩如意摩尼陀羅尼經　一卷　唐寶思惟譯

佛說觀自在菩薩如意心陀羅尼呪經　一卷　唐義淨譯

觀自在如意輪菩薩瑜伽法要　一卷　唐金剛智譯

佛說如意輪蓮華心如來修行觀門儀　一卷　宋慈賢譯

青頸觀自在菩薩心陀羅尼經　一卷

金剛頂瑜伽青頸大悲王觀自在念誦儀軌　一卷　唐金剛智譯

大慈大悲救苦觀世音自在王菩薩廣大圓滿無礙自在青頸大悲心陀羅尼　一卷　唐不空譯

葉衣觀自在菩薩陀羅尼經　一卷　同譯

金剛頂經多羅菩薩念誦法　一卷　同譯

聖多羅菩薩一百八名陀羅尼經　一卷　宋法天譯

聖多羅菩薩梵讚　一卷　宋施護譯

已上密部

○觀音菩薩の部類

其他大方廣曼殊室利經觀自在菩薩授記品第三十一。七佛八菩薩所說神咒經等觀音の事に關する佛說儀軌等數多あり。又觀音の部數を示さは一には六觀音。此は七佛八菩薩所說神咒經に本きし者にて。經の文に南無觀世音。師子無畏音。大悲柔軟音。大梵清淨音。大光普照音。天人丈夫音。能施衆生樂。濟度生死障と。而て天台大師は六觀音を六道に配すとて。摩訶止觀の中に左の如く云へり。大悲觀世音。破地獄道三障。此道苦重。宜用大悲。大慈觀世音。破餓鬼道三障。此道飢渴。宜用大慈。獅子無畏觀世音。破畜生道三障。獸王威猛。宜用無畏。大光普照觀世音。破阿修道三障。其道猜忌嫉疑。宜用普照。天人丈夫觀世音。破人道三障。人道有事理。事伏憍慢。稱天人。理則見佛性。故稱丈夫。大梵深遠觀世音。破天道三障。梵是天主。標主得臣。と是れ即ち六觀音六道配立の根本也。但し止觀の名義と神呪經の名義と少逸あり。而して更に六觀音あり一に千手觀音。二に聖觀音。三に馬頭觀音。四に十一面觀音。五に准胝觀音。六に如意輪觀音なり。以て之を前の六觀音に配當すること左の如し。

千手觀音……大悲觀音……地獄道の能化

聖觀音……大慈觀音……餓鬼道の能化

馬頭觀音……師子無畏觀音……畜生道の能化

十一面觀音……大光普照觀音……修羅道の能化

准胝觀音……天人丈夫觀音……人道の能化

如意輪觀音……大梵深遠觀音……天道の能化

此の六觀音は道遂の六字經の驗記の中に出てゝ之を彼此配合せしは小野僧正か御堂關白に注進せられし記か本なりと觀音靈驗鈔に見ゆ。又壥囊鈔卷十七に云く。小島小僧の記に云く。以六觀配六道文。出止觀。眞言等。餘宗所不立也。但天人丈夫。末師云。不空羂索也。古師云。准胝佛母也云云。二には七觀音。前の六觀音に不空羂索觀音を加ふるなり。さて西國三十三所の觀音といふは此七觀音なり。即ち千手十七所。聖觀音二所。馬頭一所。十一面五所。准胝一所。如意輪六所。不空羂索一所也。三には八觀音。是れ眞言宗の立つる所にして三說あり。一說には一に圓滿意願明王菩薩。二には白衣自在。三には髻羅刹女。四には四面觀音。五には馬頭羅刹。六には毘俱胝。七には大勢

至。八には陀羅觀音なり。(大本如意輪經の說)又一說には一には不空羂索。二には毘俱胝。三には十一面。四には馬頭。五には忿怒鉤。六には如意輪。七には不空鉤。八には一髻羅刹なり。(義範の手跡本に見ゆ)又一說には一には如意輪。二には觀自在。三には得大勢至。四には多羅。五には毘俱胝。六には白處。七には一髻羅刹。八には馬頭なり。(小野の一切明集に見ゆ)四には十五尊觀音。一には聖觀音。二には千手觀音。三には馬頭觀音。四には十一面觀音。五には准胝觀音。六には如意輪觀音。七には不空羂索觀音。八には白衣觀音。九には葉衣觀音。十には水月觀音。十一には楊柳觀音。十二には阿摩竦觀音。(此に無長と譯す又は寬廣と云ふ)十三には多羅觀音(に根生と云ふ)十四には青頸觀音。十五には香王觀音なり。此は諸尊眞言句義鈔中卷に出づ。

○當途王經の事

文句に云く。此品是當途王經。講者甚衆。是より觀音經を當途王經と呼ひなせり。さて此に就て種々付會の說あれとも取るに足らず。大部輔註の說を可とす。其意に依れば當途とは流通分をさす。流通分中に在りて最も尊大主要なる經なれは王經といふ。即ち法華經を一代佛敎中の王經となす

○別行玄及ひ別行疏

に擇ひて此品は當途即ち流通分の王經なりと賞美せしなり。而して天台大師は別に玄義二卷義疏二卷を作りて之を解釋せり。依て之を本經の玄義本經の文句に擇ひて觀音玄又は別行玄といひ。觀音疏又は別行疏といふ。

さて一經の上より料簡するときは當品は化他に約して流通を勸むる中の第二に命を受けて法を弘むる弟子を明かすに二品あり。今其中の第二なり。(前卷妙音品の題下を見よ)

品の題目を釋せは。先つ觀世音の三字と普門の兩字と相對して釋し次に之を別釋するなり。先つ相對して釋せは觀世音は人なり。普門は法なり。即ち人法一雙なり。此の如く相對して天台嘉祥の二師共に十雙を分別せり。(二師は大同小異)而して當品の所明を見るに前後二番の問答あり。初の問答は觀世音の義を明かし。後の問答は普門の義を顯はせるなれは。天台も觀世音の三字を前番の問答に配し。普門の二字を後番の問答に配し。嘉祥は品題と二番の問答とを標釋と見て。品題は是れ雙標なり。二番の問答は是れ

雙釋なりといへり。依て十雙の分別は讀者の便を計りて前番の問答終り後番の問答を始むる處に記載すへし。此三字と兩字とを對論するか即ち前番の問答と後番の問答とを比較する義なれは也。さて觀世音の三字を釋せは舊譯には阿利耶婆盧吉低輸といふ。此に觀世音と翻す。新譯には阿利耶嚩盧吉帝濕嚩羅といふ。譯して觀自在といふ。觀自在とは自行に約せる名にて觀世音とは化他に就きし名なり。義疏に云く。菩薩に多種の名あり。今此品に依らは佛の答の中に。(初番の答)略して三名を辨せり。一には觀世音。二には觀世意。三には觀世身なり。(文に入て知る)聖人には名なけれとも物の爲に稱を立つるとは衆生の三業の善を生せしめんと欲するなり。何となれは觀世音の名を立つるとは物をして名を稱して口業の善を生せしめ。觀世意の名を立つるとは物をして存念して意業の善を生せしめ。觀世身の名を立つるとは物をして禮拜恭敬して身業の善を生せしむ。備さに三業の善を生せしむるを以ての故に此三名を立つるなり。問ふ。既に三名を具せり。何そ但觀世音と稱するや。答ふ。三の名具さに題すへからすと雖も其一を

○觀世音の釋名

標す。二には觀世意の名は但意業の善を生し。觀世身の名は身意二業の善を生す。善を生するの義局れるか故に之を標せす。若し口に名を稱するには必す三業を備ふ。善を生すると多きを以ての故に觀音の名を立つるなり。三には意業に存念し。身業に禮拜するには但自行を得て化他を得す。故に身意の二名を立てす。口に觀音を稱すれは具さに自行化他を得るの故に觀音の名を立つるなり。四には娑婆國土には音聲を以て佛事をなすか故に觀音の名を立つ。餘の義は然らさるか故に餘の稱を立てす。五には觀音の名には行願あり。過去世の時に空王觀世音佛に値ふて願を發して觀世音と名くるの故に願に依て名を立つ。又觀音は昔し此土に在て菩薩の道を行じ以て觀音の稱を受けたり。餘の二名は此二義を欠くか故に題せさるなり云云。觀とは觀察の義。抜苦大悲の慧觀なり。世とは有情世間なり。音とは有情の口業なり。有情の音聲を以て菩薩に皈命すれは大悲の惠みを以て衆生の音聲を觀じ世間の苦と救ふ故に觀世音と名くるなり。觀音玄に云く。一に觀とは凡そ觀に多種あり。謂く析空觀(藏教)躰空觀(通教)次第の三

○普門の釋義

観(別教)一心三観(圓教)なり。(前卷の首せり)今は一心三観を取て観と名く。二に世とは亦多種あり。謂く有爲世(凡夫の三界)無爲世(二乘の涅槃即ち是れ藏教)二邊世(生死と涅槃とを立つ即ち是れ別教)不思議世(實相の境即ち是れ圓教)なり。今は不思議世を取て世と名く。(世は猶壞の如し)三に音とは機なり。(觀音の名を音聲に唱ふるは則ち機なるが故也)是に亦多種あり。人天の機(五戒十善)二乘の機(藏通二教)菩薩の機(別教)佛の機(圓教)なり。今は佛の機を取て音と名くる也。されは菩薩の一心三観を以て不思議境中の佛機を觀察し玉ふを觀世音の義なり。故に觀世音の名は化他に就きし稱なれとも自行の義をも兼ねるなり。一心三觀は是れ菩薩の自行なれはなり。次に普門とは普は周遍の義なり。天台は十普を分別せり。門とは開通の義なり。今此菩薩は普現色身三昧の力を以て無量の身相を現じて衆生の樂欲に應して說法をなし。此の門よりして普く一切衆生を佛道に入らしむる故に普門といふなり。即ち現身說法の妙用をさして普門といふなり。後拾遺の中公任の歌に

世をすくふうちにはたれか入らさらんあまねき門を人しさゝねは

さて通して品題を解すれは。菩薩か圓融の妙觀を以て不思議世界の佛機

の音聲を觀して普く圓通の門に入らしむるか故に。觀世音菩薩普門品と名くるなり。

爾時無盡意菩薩。即從座起。偏袒右肩。合掌向佛。而作是言。

一品の中三大段あり。初は長行。次は偈頌。後は聞品の得益なり。長行の中に二段あり。即ち二番の問答なり。初は觀世音の人に就て問答し。後は普門の法に就て問答す。初の問答の中に二段あり。初に問後に答なり。問の中又二節あり。此は第一節經家敬意を叙するなり。

(字義)爾時とは上の品に東方の妙音菩薩の普現三昧の利益を說き了りて。次に西方の觀音の利益を說く時なり。○無盡意とは十恒河沙國の微塵の世界を過ぎて不眴世界あり。彼國に佛在す。普賢如來と名く。純ら菩薩のみありて二乘の名もなし。無盡意は彼中の菩薩なり。委くは無盡意經に見ゆ。○偏袒右肩とは偏袒は袈裟を着する相なり。右の肩を露はすことは事を辨するに便なるか故に弟子の禮を表するなり。○合掌とは漢土には手を拱くを禮とし。天竺には掌を合するを敬とす。手は本と二邊にあり。然るを

今は合して一とすることは一心に專注して心外になきことを表はすなり。

○初番の問答

▲三輪の德とは身口意の三業なり。是れ普門の德用にして當品二問答の中の第二の問答なり。

世尊。觀世音菩薩。以何因緣名觀世音。

此は第二節正しく問を起すなり。

（問答）義疏に問ふ。無盡意は何の故にか觀世音菩薩の名を問ふや。答ふ。菩薩は身口意の三業皆衆生を利せんが爲なり。衆中の八万四千の人名を聞て益を得へきを以て（品末の得益文にて知る）問を爲すなり。二には未來の苦惱の衆生の爲に名を聞て苦を脫せしめんと欲するが故に問を致すなり。三には觀音の德を顯はさんと欲して問を致すなり。觀音の德を顯はすは即ち是れ法華經を說くなり。何となれは觀音は即ち是れ能乘の人なり。三輪の德は即ち是れ所乘の法なり。名德を問ふに能乘所乘を具す。是の故に一乘を說くになりぬ。四には憍慢の徒は自ら擧して他を陵くが爲に。今無盡意は自ら尊高ならさるを顯さんと欲するが故に他の德行を問ふなり。五には嫉妬の衆生は他の德を隱くして他の過を揚く。菩薩の法は他の過を隱くして

他の德を揚く。一切衆生をして見て之を學はしめんと欲す。是の故に問ふなり。六には疑ありて未た了せさるを示すなり。一切の菩薩は皆世間の音聲を觀ず。今何の因緣を以てか獨り此稱を受るやと。是の故に問を致すなり。第七に三世の諸佛言を發するに二あり。一には自ら發す。前に三昧より起ちて問ふ者なきに自ら說くの如きなり。二には他に因るなり。要す人の問を待ちて後に方に說くなり。故に問を致すなり云云。

佛告無盡意菩薩。善男子。若有無量百千萬億衆生。受諸苦惱。聞是觀世音菩薩。一心稱名。觀世音菩薩。卽時觀其音聲。皆得解脫。

已下は第二に答なり。此中三段あり。初は總して答へ。次は別して答へ。後は持名を勸むるなり。是故衆生皆應受持といふ以下是れなり。此は第一に總答なり。

（字義）善男子とは義疏に云く。華嚴經には稱して佛子といふ。餘經には多く善男子といふ。紹繼の義あるか故に子となし。綱幹の能あるか故に稱して男となす。行ふ所他を利して理に符ひ淸昇にして樂を感するの義あるの

○事理の一心

故に之と目して善となすと。○無量百千万億衆生とは受苦の衆生の多きを明かすなり。○一心稱名とは一心に二種あり。念念に相續して更に餘を念せざるは事の一心なり。一心深く實相の理に入りて能飯の我も所飯の觀音も能稱の我も所稱の名號も皆是れ平等一相にして共に不可得なりと見るは理の一心稱名なり。此事理の両種の一心を離れて散亂の心の中に唱ふるは、たとひ年月を經るも其功わるまじきなり。義疏に云く。一心といふは疑を釋する爲の故に來れり。自ら名を稱して解脫を得さることあり。蓋し是れ一心ならざるか故なりと。問ふ。若し然らは白地の凡夫散心の中に名を稱する如きは何等の益なしとするや。答ふ。其功なしといふは決定して所願を成就することなきをいふ。其心一向決定せさるを以て其益も亦た決定せさるなり。されとも散心の稱名亦た冥熏密益して後日の結緣となるは必せり。豈に一向に其益なしといはんや。○皆得解脫とは衆生苦を受けて觀音を呼ふは是れ機の感なり。菩薩其聲を觀して之に赴くは是れ觀音の應なり。感應道交して苦惱即ち解脫するなり。

(問答)一心稱名といへは必す名號に局きるへきや。亦讀經誦呪にも通すへきや。答ふ。今は觀世音の得名を問ふに就ての答なるゝ故に姑く稱名といへり。然れとも既に世の音を觀すといふ。世人の觀音に飯依する聲何ろ必すしも稱名に限きらん。固より讀經誦呪にも通すといふへし。問ふ。菩薩大慈ありて世苦を救ふとならは一切の苦聲を觀して之を救ふへし。何ろ己の名を呼ふを待ちて方に始めて之を救ふといふや。答ふ。菩薩の大慈に就て言はゝ固より然るへきなり。故に順緣逆緣有緣無緣共に其慈光に預るなり。但し今は衆生の身に就て有緣なる者順緣なる者を擧けて其感應の虛しからさるを示したるなり。月天に在れとも水なけれは其影を寫すこと能はす。菩薩の大慈は法界に徧滿すれとも信心の水を湛えされは之を感すること能はさるなり。因緣和合の理感應道交の義輙ち是の如きのみ。問ふ。名を稱するに何の故ろ苦を脫する者と脫せさる者とありや。答ふ。義疏に多義を擧けり。一には一心と一心ならさるとに由て脫不脫あるなり。二には或るは脫して利益あるか故に之を救ひ。或るは脫して利益なき

か故に之を救はさるなり。三には觀音と結緣するに厚薄あり。薄き者は善少きの故に脫せず。厚き者は善多きか故に脫するを得るなり。四には衆生の業に定と不定とあり。不定をは救ふへし。定をは救ふへからさるなり。言ふ所の定とは一には重心に作り已りて心に慚愧なきなり。二には惡を作りて覆藏す。三には作り已りて更に作る。四には願を起して所造の惡を扶く。此の四種は決定して報を受くへけれは救ふこと能はさるなり云云。▲

巳上第一總答終る。

○別答の第一口業の感應

若有持是觀世音菩薩名者設入大火火不能燒由是菩薩威神力故。

己下第二に別答なり。身口意の三業の機應に分けて（衆生の方を機といひ菩薩の方を應といふ）釋する故に別答といふなり。即ち三段ありて第一は口業の機應を明かし。第二は意業の機應を明かす。第三は身業の機應を明かし。而して嘉祥の義疏には之を第一は觀世音の名を釋し。第二は觀世意の名を釋し。第三は觀世身の名を釋すといふ。さて第一に口業の機感即ち觀世音の名を釋する

中に二段あり。初は七難を明かし後は總結なり。初に七難を明かすに即ち七段。第一は火難。第二は水難。第三は羅刹難。第四は王難。第五は鬼難。第六は枷鎖難。第七は怨賊難なり。此は第一火難なり。

（字義）持とは手に確ともちて失はさらん樣にするなり。吾身菩薩と一躰となる樣に一心に念するなり。かゝれは入我我入して彼此冥合し菩薩の正躰となりぬへし。○威神力とは威德神妙の力なり。尅實すれは諸法實相の妙用なり。

（釋意）此中因緣觀心の二釋を用ゆへし。先つ因緣釋に依らは法華傳記三實感應錄等に記する所の事跡を擧けて之を證すへし。而して是れ輕浮慢心の能く感する所にあらす。前に一心稱名に事理の二を擧けて釋するを看よ。夫れ觀音の正躰は諸法實相なり。實相は無相なり。心實相を念ずれは能燒所燒共に不可得なり。誰れか燒き誰れを燒くれん。是れ諸法の實相なり。今は觀音を念する力に由りて識らす知らす此の諸法實相に入るを得るなり。故に前の藥王品に云く火不能燒水不能漂と是れ實相の妙躰なり。觀

▲因緣觀心とは第三卷の首に詳解せり。

○觀音を念して水火の難を免るゝ事

音は此實相を躰する者。故に其威神力亦た是の如き者あり。豈に深信して稱念せざるへけんや。次に觀心の釋をなさは火とは惑業苦三道の火なり一に果報の火。(是苦)劫末大災の時初禪天より已下大千界を盡くして皆燒盡するをいふ。二には惡業の火。(是業)五逆十惡等の惡業能く五戒十善等の善根を燒盡すれはなり。三には煩惱の火。(是惑)大日經に曰く。能損大利無過瞋。一念因緣能焚燒。俱胝曠劫所修善。と他の煩惱之に例して知るへし。初禪已下の人は第一の火を免かるゝことを得す。三界の人は第二の火を免かるゝことを得さるなり。三乘の人は第三の火を免かるゝことを得さるなり。然るに今自心中の三觀の智を以て已心中の三諦の觀音を念するときは一并に此三火を消滅すへきなり。下の諸難之に例して解すへし。

若爲大水所漂稱其名號即得淺處

此は第二に水難なり。

(釋意)若し觀解をなさは果報の水災あり。上は二禪天に至り下は地獄に至るまて皆此難を免かるゝことを得す。又惡業の水は三界に通して善根を漂

壞し煩惱の水は三乘の人に通す。故に涅槃經廿一に曰く。煩惱の大河は能く香象を漂はす。愛欲の水は邪見を增長す。生死に沒溺して涅槃の彼岸に登り難しと。若し能く一心に稱念して諸法無生を悟らは此等の諸難を免れ得ん。

新後撰　ゆく水のふかき流にしつみてもあさせありとそ猶たのむへき　從三位光成

風雅　おり立てたのむとなれは飛鳥川ふちもせになる物ところきけ　平忠度朝臣

若有百千萬億衆生爲求金銀瑠璃硨磲碼碯珊瑚琥珀眞珠等入於大海假使黑風吹其船舫飄墮羅刹鬼國其中若有乃至一人稱觀世音菩薩名者是人等皆得解脫羅刹之難以是因緣名觀世音

此は第三に羅刹難なり。義疏には之を風難とせり。曰く是れ風難たるを知る所以は一には三災の次第に由るの故に火水風と明のすなり。二には風